

鬼滅の刃～花と桜～

舞翼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

栗花落カナヲちゃんに、義兄がいたら？という物語です。

※軽く読めると思うので、暇潰しにどうぞ。

く2020年 2月14日 く本編完結く

く2020年 2月24日 く平和な世界完結く

目次

歩む道

柱合会議	55
目覚め	50
上弦の式	41
月夜の報せ	36
帰還	31
邂逅	24
最終選別	20
新たな呼吸	15
鬼殺の道へ	11
蝶屋敷	7
始まり	1

夢	125
夢の道	
帰省	120
番外編	
約束	112
悪鬼滅殺	104
桜柱	98
運命	93
初任務	85
誓い	79
日輪刀	74
桜の苦悩	69
継承	63

上弦の参	信じる心	無限列車	無限列車	継子	家族	再会と運命	柱合裁判	那田蜘蛛山	下弦の参	ひととき	想い	これから
207	200	193		187	179	173	164	158	150	142	135	130

お帰り	終幕	才能	上弦の陸	護衛	潜入	遊郭	遊郭	稽古	思い	願い	決着	強き者
281	275	267	260	253	247	241		236	230	226	221	214

贈り物	356
柱稽古	349
祈り	344
痣と報告	335
命	329
小さな命、柱稽古	
克服	319
正と悪	312
襲撃	306
おみやげ	300
刀鍛冶の里	294
花火	287

実家	419
桜と水	414
恋と蛇	407
花言葉	402
相談	396
未来（平和な世界）	390
未来へ	
繋ぐ（本編完結）	384
討伐	379
激戦	373
強さ	367
上弦の式、再び	361
無限城、教祖との戦い	

結婚式（完結）



426

歩む道

始まり

——家とも言えない場所で、俺は首元を持ち上げられてから投げられ、強く背後の壁に叩きつけられる。喉の奥からは紅い液体が昇り、それを吐血し、飛び散った鮮血で床を汚す。壁はボロボロのまま放置されており、朝方の冷ややかな風が隙間から吹き込み、体温を奪っていく。——そして、目の前に横たわっている幼い子供は、虐待で命の灯火が潰えている。

生き残りは、俺と一人の妹のみ。——絶対この子は護らなくては、仮初とは言え、俺は義兄なんだから。なので俺は、地に倒れながら義親を睨み付ける。

俺の本当の両親は病に倒れ、その町の資金源にする為身売られた。そこで、俺を奴隷として買ったのが、今の義親だ。

「チツ。またその目か。誰のお陰で飯を食えると思ってるッ！」

俺を買い取った親を見ると、顔面を目掛けて蹴られる。

だが、次に殴られないということは、これ以上は諦めてくれたらしい。

「貴様ら、今日までに残りの木材を売って於け。それまで、飯にありつけられると思うな

「よ」

義親は、ボロボロの障子を開け、勢いよく、ピシッ、と締め家を出て行った。

俺は震える膝を抑え立ち上がり、妹を見た。妹は、一度殴られただけで済んだようだ。本当は、俺が護れば、妹たちにこんな思いをさせなくて済む、はずなのに。

「大丈夫か？」

「……………」

妹は頷くだけだ、きつと心が壊われかかっている。

早朝、この家から出て行く算段だったのだが、奴らが様子を見に来たことによつて予定を狂わされた。

そして、殴られてから指示を与えられる。——その間、1人の妹は殺されてしまった。見殺し、と言われたら最後だが、俺は前に出る力がつき、地に倒れた。悔しいが、限界は迎えていた。ということなのだろう。

「ここから逃げるぞ」

妹は頷くだけだ。

俺は横たわっている妹を横抱きにして家から出て、裏手にある土の中に埋葬した。



（道中）

あの家を出て、まず汚れを落とす為川や湖を探していたら、いつの間にか夜になってしまった。

そして、脱出の為に準備していたのは、井戸の底に隠していた刀、お守りと言われている藤の花の袋一つ。懐には、黽苦茶になった食料に、水。そして顔を隠す為ポロポロの上着を羽織っている。まあ、纏っている衣服もポロポロなんだが。また、夜は冷え込む為、肌に当たると冷気が冷たい。

俺は上着を脱ぎ、妹の袖に通す。……かなり寒い、俺は義兄、俺は義兄。と、謎の義兄理論で我慢する。

「あれ、こんな所に子供か。旨そうだなあ」

眼前に立っていたのは、人間であるが理性を無くしかけている生物だ。そして僅かにだが、血の匂いが鼻をつつく。……この生物の正体は解らないが、おそらく人間を喰っている。

俺は刀を抜き、構える。

「ツチ。一人は藤の花を持ってやがるな」

……なるほど。こいつらの弱点の一つは藤の花、なのだろう。だが今までの言動で、藤の花だけでは、奴を後退させることはできないだろう。

「まあいい。小僧は持っていないようだし、貴様を喰ってやるよ」
へらへらと笑う化け物。

齧る程だけだが、俺は剣術の経験があつた。両親が生きていた時、興味本位だけだったが。

「（この場合は、奴を退けないと通れない、か……）」

俺は刀を構えたまま走り出す。

「ひひ。貴様は、いたぶってから喰ってやるよ」

「……やってみろ。逆に、お前を殺してやる」

もちろん、ハツタリである。実践経験など皆無だし、奴の首をとれる確率は低いだろう。だが、ここでやらなければ妹はどうなる？ 藤の花があろうとも、有限な物じゃないはずだ。

怪物の爪が迫るが、俺は紙一重でそれを避け、肩に一太刀浴びせるがその傷は瞬く間に塞がっていく。

「へ。そんな刀じゃ、オレを殺せねえよ」

確かに、奴を殺すには特定の武器が必要なのだろう。

研ぎ澄まされた感覚で攻撃を避け、斬撃を浴びせるが瞬く間に治ってしまう。……このままじゃジリ貧だ。何とかして突破口を見つけないと。それに、後方に隠れるように

妹もいるのだ。ここで死ぬわけにはいかない。

だが、現実是非情であり、傷ついた傷口から紅い鮮血が洩れていく。さすがに血を流しすぎたか、体の寒さが異常だ。

「…………でも、殺される訳にはいかない」

だが、徐々に力が抜けていく様を化け物はケラケラ笑いながら見ていた。

このまま死ぬ訳にはいかない。妹は何としても護る。そう心に刻みながら、化け物を睨み付ける。

——その時だった。化け物の首が空を舞ったのだ。俺は安堵し、手から刀を落とし、両膝を地面に付けた。

霞んだ瞳でその人物を見た所女性2人だ。長い黒髪の女性は「大丈夫?」と言って、俺と同じ視線まで膝をつけた。

そして俺は、重い口を開く。

「…………たぶん大丈夫だ。それよりも、妹を頼む」

「妹さん?」

「…………ああ。かなり衰弱してると思う。助けてやってくれ、俺はどうなってもいい」

「いえ、貴方も助けます。よく今まで頑張りましたね、眠ってもいいですよ」

「……………済まない」

俺は瞳を閉じ、体を前のめりに倒したのだった。
そして、俺が最後に目にしたのは、夜に輝く蝶の髪飾りだった。

蝶屋敷

「着いたわ、起きれる？」

目を擦ると、目の前には大きな屋敷が点在していた。——屋敷の名を、蝶屋敷。というらしい。てか俺、黒髪の女性におぶられてるよね？これって、傍から見たら恥ずかし過ぎる。ともあれ、俺は女性の背から下り、地面に両足を付ける。

「とりあえず、妹さんをお風呂に入れて来るわ。貴方はどうする？」

「そうだなあ。縁側に座っていいか？」

「わかったわ。じゃ、何かあったら呼んでね」

そう言つて、妹を連れて女性たちは屋敷に上がっていった。ちなみに、刀はその場で返却して貰つた。

縁側で月を見ながら座っていると、お風呂に入つて綺麗になつた妹が世話を焼かれて
いる。

「ダメだわ、姉さん！この子全然反応もないし、まるで自分の意思がないみたい！」

「んん。大丈夫、きつとどうにかなるわ。それに、この子は可愛いもの」

「姉さん！樂觀視しすぎよ！」

姉妹（おそらく）の1人が「だよね？」と呟き、俺は「大丈夫だろ」と返した。

「まだ聞いてなかったけど、貴方のお名前は？」

「……かえで楓だ。名字はない」

この名前だけが、両親が残してくれたものだ。

「そう。楓、妹さんのお名前は？」

「……無いんだ、妹の名前はない。俺は、名前をつけてあげられる存在でも無かったしな」

「そんな……」と、姉妹の1人が妹を抱きしめる。きつと姉妹は、良い親の元で育てられたのだろう。でも、俺と妹は外れを引いてしまったけど。

暫しの沈黙が流れ「胡蝶カナエ」と呼ばれた女性の笑い声が洩れる。

「うふふ。決まったわよ、この子の名前。——カナヲ。『栗花落カナヲ』なんてどうかしらっ」

「……………」

妹は反応をしない。いや、声は聞こえているがどう判断していいのか解らないのだから。う。

だがきつと、胡蝶姉妹ならカナヲのことを愛情を注いで育ててくれるだろう。今、そう確信した。

「妹の顔を見れたことだし、俺はそろそろ行くよ」

「ど、どこに行くのよ!？」

「胡蝶しのぶ」と呼ばれる女性が声を荒げた。

「俺にもわからない。でも俺は、ここに居るべきじゃない人間だ」

「じ、じゃあ、カナヲのことを残していくの!？それに、子供が1人で生きていけると思っているの!？それに貴方、傷だらけじゃない!？」

「何とかなるだろ、死にはしらないと思うし」

まあ、あの化け物を前にしたら死ぬかも知れないけど。

カナエさんに聞いた所、あれは人に肉を食らう「鬼」と言われる化け物らしい。倒す為には日輪刀と言われる刀か、日光の光だけらしい。

「それにカナヲは、胡蝶姉妹と居た方が幸せに暮らせる。仮初の「兄」が傍に居るわけにはいかないしな——お前は幸せに暮らせ、カナヲ」

俺が立ち上がろうとすると——聞いたことがない可愛らしい声上がる。

「……………お、お兄ちゃん!」

俺は目を丸くする。いやだって、初めて声を聞いて「兄」と呼ばれたんだから。さつきは、意思がなかったこの子がだぞ。

そしてカナヲは俺に寄り添い、袖を、くいと引つ張るようにして俺を引き止める。

「……………行かないで」

「い、いや、俺はお前の『兄』失格だろ。一緒に居るべきじゃない、胡蝶姉妹に世話になれ」

ふるふると首を振るカナヲ。

「絶対行かせないから」って視線で訴えかけるように見られてるのは、俺の気のせいだよね？だよね？

「うふふ。楓、諦めなさい、カナヲは絶対に引かないわよ」

「どうせ、1人も2人も変わらないわ。カナヲの為にも残りなさい」

「い、いや、でも俺は……………————わ、わかった。世話になる」

胡蝶姉妹とカナヲの言葉により、俺は折れたのだった。

「そうと決まったら、楓はお風呂ね。背中を流してあげましょうか？」

「カナエさん、冗談は止めてね。男にその言葉は麻薬に近いから」

「ふふ、そうかしら。冗談ではなかったのだけど」

数分で、家族の位が決まったように感じる。3姉妹<俺。という感じに。

はあ。と俺は溜息を吐き刀を立て掛け、立ち上がって風呂場へ向かった。——こ
のようにして『栗花落楓』の新たな人生が始まる。

鬼殺の道へ

（蝶屋敷、道場）

「うがあああー！今日も負けた——！」

俺は額から汗を流し、道場の真ん中で大の字に寝転がっていた。そして、右手で持っているのは木刀。

拾われた日から、俺は護れる剣を教えて欲しいと、カナエさんに頼み込んだのだ。

「これでも私は『鬼殺隊の柱』ですから。簡単には負けないわよ」

——鬼殺隊。

それは、鬼を狩る人たちが所属する組織。

隊士は凡そ数百名。だが、千年以上の古の時代に発足し、今も尚活動し続ける政府非公認組織。

そして——柱。

柱とは、鬼殺隊での最高位の位であり、鬼殺隊の中核核になる人物。

カナエさんは『柱』であり、『花柱』の称号を戴いているそうだ。

「大丈夫。楓は最初の頃よりも、剣捌き動きは良くなっているわよ」

カナエさんも最初の稽古よりも徐々に強さを上げてるそうだ。でも、俺が勝てる未来が見えないんだが……。

ともあれ、俺は上体を起こし胡坐をかき、カナエさんも膝を落とす。

「楓は、剣の腕を上げて鬼殺隊に？」

「先のことは決めてないけど鬼を滅したい気持ちはある」

鬼殺隊の大凡は鬼に身内を殺されたと聞いた。彼らの原動力は復讐心で間違えはないだろう。

親が殺された、恋人が殺された、子供が殺された。しかし犯人は「鬼」という化け物だ。警察などは当てにならないなら、被害者が復讐に走るのは当然だ。だが、俺にはそういう感情は無いのだ。俺の場合は、人間の醜さの方が「鬼」よりも恐怖を感じる。

「——でも、今この瞬間も【鬼】によつて悲劇は起きてるかも知れないんだよな」

「……そう、ね。私たちが駆け付けた時は手遅れ……という状況は当たり前、になりつつあるわ」

「……そうか。人手不足、という要素もあるんだな」

暫しの沈黙が流れ、俺が口を開く。

「俺はカナエさんたちの手助けになるなら——修羅の道を歩む覚悟はある」

でも、カナヲ怒らないよなあ。と思う俺だった。

そして、言葉を紡ぐ。

「——鬼殺隊に入る」

「……そう」と、カナエさんは顔を俯けた。

でも、数秒後に顔を上げ、

「それじゃあ、呼吸を会得して貰います」

「呼吸？」

「そ。全集中の呼吸って言って、肺に空気を溜め、血の廻りを増し、一時的に身体強化して型を取り【鬼】と戦う。私は、そう解釈してるかな」

全集中の呼吸は、完全に会得するまではかなり厳しいものらしい。

「私が教えるのは——花の呼吸」

——花の呼吸は、水の呼吸から派生した呼吸。果たして、俺には適性があるかを聞いた所、カナエさんが言うには「大丈夫」ということ。剣を合わせた時、*“花の呼吸”*の適性を見抜いたらしい。

そして *“花の呼吸”* の型は、

式ノ型 御影梅。

肆ノ型 紅花衣。

五ノ型 徒の勺薬。

陸ノ型 渦桃。

であり、攻守に優れた呼吸でもあるそうだ。

「でも、私は『育手』じゃないから、余り期待しないでね」

「育手」を一纏めに言えば、剣士を育てる人物のことである。

俺は立ち上がり、

「これからよろしくお願ひします、師範」

そう言つて一礼する。

カナエさんは苦笑し、

「いつも通りでいいわよ、疲れちゃうでしょ」

「そ、そうか。じ、じゃあ、これからよろしくな、カナエさん」

「任せられました。——それじゃあ、全集中の呼吸をしながら、稽古の続きをしようか」

「はい？ 一つ一つでは？」

「稽古は複数進行でいきます」

稽古は、常に全集中の呼吸を行いなからするそうだ。日に日に、難しさも増していくとも言っていた。——カナエさん、厳し過ぎない……。

新たな呼吸

修行開始から二年、俺は「全集中・常中」、花の呼吸の型、劍技、心の強さを習得することが出来た。そして今は、真剣での鍛錬中である。

俺は踏み込み、型を繰り返す。

——花の呼吸 五ノ型 徒の勺薬。

——花の呼吸 式ノ型 御影梅。

俺が九連撃の斬撃を放つが、カナエさんは周囲を包む斬撃を放ち相殺させる。それに、殺気を込め鍛錬しているので実戦に近い。

——花の呼吸 五ノ型 徒の勺薬。

カナエさんが九連撃を放つ。

それは、俺が放つた「徒の勺薬」と比べると技の質が格段に違った。斬撃は、肩、胴、足、腕、手の甲。隙ができる部位を容赦無く襲ってくる。

——花の呼吸 陸ノ型 渦桃。

だが、俺は体を捻りながら渦状の斬撃を放ち、襲ってくる斬撃を相殺する。

そして、お互いは距離を取り、刀を構え直す。

「うーん。及第点、かしら」

「……え？今の攻防で及第点？」

俺は目を丸くする。

今の攻防は、他者から見てもかなりの駆け引きだったはずだ。……カナエさん、『柱』を基準にして無いよね？そうだよね？

ともあれ、俺とカナエさんは刀を下ろし、鞘に納める。

「そうよ。——でも、楓は一人前の剣士よ。胸を張って」

カナエさんは「あと」と言葉を続ける。

「楓。私に隠しごとをしてるでしょお〜」

あれは、誤魔化す必要もないし、言っても構わないだろう。

カナエさんも「白状しなさい」って言ってるし。

「花の呼吸を派生したんだ。——桜の呼吸に」

派生したと言っても、俺には『花の呼吸』が最適であり、呼吸が合わないから切り替える。ということはない。偶々派生しただけである。

「——桜の呼吸。楓の名前にぴったりね！型はもうあるのかしら？」

「壹、貳、終ノ型がある」

でも、終ノ型は諸刃の剣だ。

型を創った俺が言うのも何だが、爆発的な破壊力がある分反動も強い。それに、無暗に繰り出すのは危険過ぎる。

このことをカナエさんに話すと「なるほど」と頷いた。

「それじゃあ最後に、壱、弐ノ型を見せて貰えるかしら？」

「わかった」

俺は刀の柄に手を添える。

そして、型を創り出し、

——桜の呼吸 壱ノ型 乱舞一閃。

俺は瞬間的に動き、目の前の木を斬ってから納刀する。

振り返ると、カナエさんがパチパチと、両手を叩いていた。

「壱ノ型は、雷の霹靂一閃に類似する部分があるわね」

「花の呼吸には、鬼の頸を斬るだけに特化した型はないからね」とも、カナエさんは言っていた。まあ俺も、一閃できたらカツコイイなあ。と思つて、創った型でもある。

それから俺は、刀を抜いて前方にある無数の木々に目を向ける。

——桜の呼吸 弐ノ型 千本桜。

千本桜は「花の呼吸 五ノ型 徒の勺薬」の改良版だ。

「徒の勺薬」は、前方に九連撃を放つ技だが、「千本桜」は全方位を囲むような無数

の斬撃で相手を斬り裂く。多数対一ならば範囲技で有効だが、一対一になるならば攻撃範囲を絞った「徒の勺葉」の方が有効だろう。

そして、俺は木々が粉々になったのを見て納刀し、カナエさんは俺の前に立った。

「うん。良いものを見せて貰ったよ」

カナエさんは、にっこりと微笑んだ。

「——最終選別を受ける許可をします」

「でも」と言葉が続ける。

「危なくなつたなら逃げて、決して無茶はしないで。——人は、死んでしまつたら、そこでお終いだから」

「心配すんな。カナヲを悲しませたくないしな」

カナエさんは頬を膨らませ、

「そこは、私としのぶもでしょ」

俺は「わかつてるって」と言つて苦笑する。

こうして、一時的に俺の修行が終了したのだった。



蝶屋敷に帰り、飯を食べてから俺とカナヲは縁側に座つて月を眺めていた。

「カナヲ。俺は、明日から最終選別を受けてくる」

「……帰ってくる？」

カナヲは不安そうな瞳で俺を見た。

俺は「必ず帰る」と言い、右手をカナヲの頭にポンと乗せる。

「……わ、私もいつかは一緒に戦える、かな？」

俺は目を丸くしたが、すぐに笑みを浮かべる。

「きつと戦える。でもその為には、自身に合う呼吸を見に付ける必要があるな」

「……たぶん私、〃花の呼吸〃だと思う。前に、呼吸の適性について調べた」

「なるほど。カナエさんに頼んでみるか。でも、義兄妹で〃花の呼吸〃か」

「……うん。お揃い」

「そうだな」と言つて、俺はカナヲの髪をクシヤクシヤと撫でた。

そして、俺が明日の早朝に向かうのは——藤襲山。最終選別が行われる舞台である。

最終選別

— 藤襲山。

この山は、鬼殺隊へ入隊を希望する者が訪れる最終試験場所。特徴的なのは、山の麓から中腹にかけて一面に藤の花が咲いていること。しかも、藤の花は一年中咲き続けているので、鬼にとっては牢獄だろう。

「皆さま。今宵は最終選別にお集まり下さり、ありがとうございます」

最終選別は、藤の花の柄の着物を着た、白髪の少女の説明から始まる。

そして、同じ柄の着物を着た、白髪の少女と瓜二つの黒髪の少女が口を開く。

「この藤襲山には、鬼殺の剣士様が生け捕りにした鬼が閉じ込められており、外に出ることは叶いません」

説明を聞きながら回りを見渡した所、参加者は約二十名。……てか、既に帰りたくなつた俺氏。

ともあれ、説明は続く。

「山の麓から中腹にかけて、鬼が嫌う藤の花が一年中狂い咲いているからでございます。しかし、これから先は、藤の花が咲いておりませんので鬼共がおります」

そして、白髪の少女は言った。

「山の中で七日間生き抜く。——それが、最終選別の合格条件でございます」

少女たちは頭を下げ、

「——では、行つてらしゃいませ」

それを聞いてから、俺は鳥居を潜り山の中に入る。——これから、最終選別が開始される。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

山の中を散策するようにゆっくり歩く。周囲に人が居ない為、置いて行かれた気分になる。

今思った、団体行動を取った方が生存率上がるんじゃないかと。でも、それが裏目に出たら申し訳ない気持ちになるが。

「腹減つたし、飯を食うか」

そう呟き、俺は肩から下げた風呂敷の中の小箱から非情食を取り出し、口に運び咀嚼し、水を口にする。この非常食は『食材を探すのは大変だから、一週間分ね』と言って、カナエさんが用意してくれたものだ。てか、この状況を先読みするなんて、さすががカナエさん^{師匠}。

ともあれ、風呂敷を肩に縛って先に進む。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
 「子供^{血肉}が来やがった！」

そう言つて、前方の茂みから鬼が顔を出す。鬼は飢餓状態なのか、考えも無しに突撃して来る。

俺は刀の鞘に手を添え、

——桜の呼吸 壱ノ型 乱舞一閃。

一閃し、鬼の後方まで移動し納刀すると、その鬼の頸が宙を舞った。振り返ると、鬼は体を崩し、霧状になってこの世を去った。

「呼吸」を始めて実戦で使用したが、鍛錬時のように使用できている。体も強張つてないし、上々といった所だ。

「つか、鬼弱くね」

そう呟く俺。

『柱』と二年間鍛錬していたので、その辺り物差しが曖昧なのかも知れないけど。

「まあいいや。鬼を狩りますか」

でも、出会った鬼だけだ。山に生息する鬼全ては、刀の強度と自身の体力^{精神力}が心配にな

る。その辺も考慮して戦う、ということも選別に含まれているのだろう。ということなので、俺は「よし」と言ってから歩き出す。

「……………あ、寝床どうしよう」

そう思ったのは、鬼を狩り暫し時間が経過した頃だった。

邂逅

——最終選別六日目。



——花の呼吸 式ノ型 御影梅。

俺は自身の回り囲うように斬撃を放ち、鬼の頸を撥ね、鬼は体が消滅してから日輪刀を鞘に納刀する。

その時、肌に刺さるような威圧が触る。

「鬼、だよな」

先程の鬼より、遥かに強いだろう。おそらく、人を喰った数も十や二十じゃない。すると、木々を掻き分けながら、選別を受けているであろう少年が顔を出し、少年は俺の傍にあった木の幹を背に座り込む。

「どうかしたのか？」

「ば、化け物だ。何であんな鬼が最終選別に居るんだよ！」

「化け物？どんな鬼だった？」

「触手を生やしている、かなり大きい鬼だ。——あれは、異形の鬼だ！」

「そうか。他に戦っていた奴はいたか？」

少年は震えた声で呟く。

「お、女の子が鬼と戦っている。小柄な女の子だった」

「わかった」

この時、カナエさんの言葉が思い出す。

——『楓。助けてあげるのが男の子よ』、と。

「(カナエさん。約束は護ります)」

俺は構えを取り、最近、改良した型を繰り出す。

でも、足が使い物になるかも知れないので、乱発はできない技である。

——桜の呼吸 壱ノ型 乱舞一閃——極。

俺はその場から勢いよく離れ、戦場へ駆けた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

私を笑いながら見る鬼は、体は緑色で人の形を保っておらず、四本の手足以外にも無数の腕を生やして胴体に結びつけていた。

「クスクスクス。お前、鱗滝の弟子だなア」

「貴方、鱗滝さんを知ってるの？」

私は型を取り、

——水の呼吸 参ノ型 流流舞い。

襲いかかる腕を斬り落とし胴体にも傷を残すが、やはり私では、この鬼の頸を斬るのは難しいかも知れない。

鬼は、後方に移動した私と対面した。

「クフフフ。そりゃ知ってるさ、この檻の中に入れたのは鱗滝だからなア！——十一、十二……お前で十三だ」

「何の話？」

鬼は「フフフ」と笑う。

「喰った鱗滝の弟子の数だよ。アイツの弟子は、皆喰ってやるって決めてるんだ」

私の動きが止まる。

「そうだなア。特に印象に残ってるのは、珍しい毛色のガキ。宍色の髪をしていて口辺りに傷があつた奴だなア。お前がしてる狐の面。厄除の面と言ったかア。それが、鱗滝の弟子の目印なんだよ」

鬼は言葉が続ける。

「だから喰われた。皆オレの腹の中だ。弟子たちは、鱗滝が殺したようなものだ。フフ

フフ」

「お前が皆をツ。鱗滝さんを悲しませた元凶かつ！」

私は激怒して走り出し、地面を蹴り型を繰り返そうとするが、呼吸が乱れていて、思うように体が動かせない。そして、地面を割って這い出てくる無数の腕。——鬼は、この瞬間を狙ったに違いない。まさか、腕を地面に隠せるなんて思っていなかった。

私は四肢を腕に掴まれ、宙に持ち上げられ、刀が手から落とされる。

——死。私はこの鬼によって惨めに殺されるのだろう。

『最終選別……必ず生きて戻れ、真菰』

——護れない。

きつと鱗滝さんは、私が約束を破ったら酷く悲しむ。でも、私はここで殺されてしま
う。

「(鱗滝さん、ごめんなさい。私、帰れない)」

私は心の中で、師に詫びた。

「クフフフ。まずはどこから潰してやろうか。右腕か、左腕か。それとも、右足からがいいかなア」

その時、私の耳に声が響く。

——桜の呼吸 壺ノ型 乱舞一閃——極。

——花の呼吸 五ノ型 徒の勺薬。

花の斬撃が鬼と私との間に走ると、私は拘束から解かれ尻餅を突く。

私は隣に立つ人物を見ると、蝶羽織りに、花色の日輪刀。黒髪に漆黒の瞳の少年。

この子は印象に残っていた。最終選別の参加者の中でも、彼だけは纏う雰囲気違ったのだ。あれは、強者のものだ。おそらく、受験者の中で一番強い。

「大丈夫か？」

「う、うん」

「そうか。足は動くか？」

「ちよつと、難しいかな」

かなり強く掴まれていたので、最終選別を終えても歩くのは厳しい。

「わかった。あいつは俺が殺していいか？」

私が「うん」と頷くと「でも、仇なんだろう」と、少年は聞く。

「私は戦えない。お願い、私たちの仇をとって」

「——ああ」

私はビクツ震えた。

続けて言った「簡単には殺さねえからな、悪鬼」と言った少年の声は、とても冷たいものだったからだ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
 俺が向かった先に少女は、花柄の着物を身に纏った小柄の少女。側頭部には花柄の狐の面。

複数の腕に拘束され、動きを封じられていたので、それを全て斬り落とす。また、少女から話を聞いた所、この悪鬼は水一門の仇だと言う。

だが、少女の手足は負傷しているので、まともに戦うことは不可能であり、俺が頸を取る。水一門の仇なので申し訳ない気持ちもあるが、簡単には殺さないので許して欲しい。

「ちきしょうちくしょうちくしょう！誰だ貴様は!？」

斬られた腕を再生した鬼が叫ぶ。

「折角、鱗滝の弟子を殺せると思ったのに邪魔しやがつて！」

「黙れ、悪鬼。お前はここで死ぬ」

俺は少女の前に出て、

——桜の呼吸 式ノ型 千本桜。

俺が刀を振るうと、無数の斬撃が悪鬼を襲う。そして、這い出る腕は『花の呼吸 肆ノ型 紅羽衣』で斬り刻む。

千本桜は、全方位から囲むような斬撃なので、奴はゆっくり切り刻まれながら「痛い痛い痛い」と雄叫び上げ斬られていく。宛ら、拷問のような斬撃だ。まあ、創った俺が言うのはアレだが。

「鱗滝いいいいいいいいいい！こんな檻に入れやがってえええええええ！」

俺は「うるせえな」と思いながら、

——花の呼吸 陸ノ型 渦桃。

俺は地面を踏んで飛び、体を捻りながら斬撃を放ち、奴の頸を飛ばす。やはり、じっくり殺すのは色々な意味で面倒くさい。

その時少女が「……うわっ」って引いたのは気のせいだよ？ そうだよ？

「鱗滝……」

奴は最後にそう呟き塵に還った。

帰還

鬼を還つたことを確認した俺は、刀を鞘に戻し、少女と対面するように腰を落とす。

「悪いな、助けるのが遅くなつて」

「ううん、助けてくれてありがとう。君が来てくれなかつたら、私は殺されてた」

少女の両足を見ると、両足首が青く変色している。

なので、俺は肩から下げている風呂敷の中にある小箱から塗り薬を取り出す。即効性の塗り薬であり、俺で実証済みの代物だ。

「それは？」

「塗り薬だ。俺の師は薬学に精通しててな、心配だからつて持たせてくれたんだ」

少女は「なるほど」と頷き、俺が両足首に薬を塗る。

「痛い。痛みが引いてきた」

「俺で実証済みだしな。だから、稽古の終わりが見えなくなった経験があるんだけど」

俺が遠い目をする。「大変だったんだね」と少女は苦笑。

どうするか。と俺は悩む。状況からして、横抱き？背に乗ってもらおう？肩を貸すだけは痛みが足に響くだろう。

「えーと。おぶつてもいいか？疾しいことは考えて無いからな、消去法だ」
少女は苦笑し、

「大丈夫だよ。それよりも、おぶつても戦闘は大丈夫なの？」

「日輪刀を抜ければ問題ない」

日輪刀を抜き振れば 桜の呼吸 式ノ型 千本桜 が使用可能だ。

「そっか。じゃあ、お願いします」

少女は「あ」と声を上げ、

「私の名前は、真菰」

「栗花落楓だ。よろしくな、真菰」

「うん。よろしく、楓」

ともあれ、俺は真菰の日輪刀を拾い、真菰を背負ってこの場を後にした。



「重くない？」

「問題ない。てか、羽のように軽い」

「またまた。お世辞は要らないんだからね」

「いや、お世辞じゃないからね」

そう話しながら、俺は真菰を背負いながら山の出口に向かっていく。

また、日が昇り始めているので鬼の活動時間は終了した。迎えた——最終選別七日目である。



——七日目早朝。

今俺たちは出口に到着し、鳥居を潜っていた。周りを見渡すが、この場に到着しているのは俺と真菰のみ。

「……私たちだけ？」

「……残りの参加者は、鬼に喰われたんだらうな」

——選別の合格者は、二人だけ。

選別開始時は二十人居た筈なのに、合格者は半分以下。

「お帰りなさいませ」

「おめでとうございます。ご無事でなによりです」

正面に現れた、二人の少女が説明を始める。

「まずは体の寸法を測り、隊服を支給させていただきます、その後は階級を刻ませていただきます」

「階級は十段階でございます。甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸。今現在の御二人は、一番下の癸でございます」

「これからお二人には、鋳鴉をつけさせて戴きます」

黒髪の少女が手を叩くと、上空から二羽の鴉が下りて来て、俺と真菰の肩に乗る。

「鋳鴉は、主に連絡用の鴉でございます。任務の際は、鋳鴉でご連絡致します」

この鴉が、俺たちの相棒となるわけだ。

てか、喋ったりするのだろうか、この鴉たち。

「では、こちらををご覧ください」

少女たちは、手前に置いてある長台に視線を向ける。

そこには、幾つかの鉋石が置かれていた。

「こちらから刀を創る鋼を選んでくださいませ。鬼を滅殺し、己の身を護る刀の鋼は、ご自身で選ぶのです」

俺は真菰を背負いながら歩き、長台の前まで移動し、感覚で鋼を選んだ。どの鋼がいいのか解らないので、ほぼ直感である。ちなみに、真菰も同様だ。ともあれ、隊服を支給され階級を刻み、俺たちは下山した。後、刀が仕上がるまでは、十日から十五日かかるということ。

また、真菰は歩くのが厳しい為、俺が背負って狭霧山まで向かうことになった。……

てか、オレの娘に！展開は無いよね？無いよね？俺、まだ死にたくないよ……。

月夜の報せ

〔狭霧山〕

「この山でいいのか？」

「うん、この山で合ってるよ」

真菰を背に乗せ、藤襲山から狭霧山までは半日程で到着した。

それから、真菰の案内によって山を登り、ある小屋から離れた場所に立ち止まる。

「ねえ楓。鱗滝さん、褒めてくれるかな」

「きつと褒めてくれるだろ。真菰は、修行の成果を出したんだからな」

「そっか」と言い、真菰は微笑んだ。

鱗滝さんは、真菰が最終選別に参加することに良い顔をしなかったそうさ。まあ確か

に、弟子を死地に送り込むのだ、“育手”から見れば“弟子”を失う覚悟を伴う。

俺の場合も、カナエさんは良い顔をしなかった。不安、と言う感情が支配していたと

思う。

「行くぞ」

「うん」

歩き出そうとした所で、俺は口をつつく。

「……なあ真菰。俺、鱗滝さんに殺されないよな? 『真菰は、儂を倒さなければやらんぞ!』 的な感じで」

「ふふふ。鱗滝さんなら、あり得るかもね」

「マジか」とガツクリ肩を落とす。だが、この場にいつまでも立ち止まってる訳にもいかない。

すると、小屋の扉が開き、鱗滝さん? が薪を持って姿を現し、真菰を見て薪を落とす。

「……真菰、よく戻った!」

「鱗滝さん! ただいま〜!」

「お邪魔してます、鱗滝さん」

俺が挨拶すると、天狗面の中で、ムツ、とした気配がした。……いや、何。俺、殺されないよね? 大丈夫だよな?

俺は、はあ。と溜息を吐きながら、促された小屋の中にお邪魔する。



「そうか、そんなことが——真菰を助けたくれたこと、感謝する。栗花落楓」

対面で座りながら、鱗滝さんは最終選別の話を聞き、頭を下げた。

「いえ、俺が助けるのが遅れた所為で、真菰は足に怪我を……」

鱗滝さんは顔を上げ、

「命を取り留めただけでも有り難いことだ。怪我なら直せるが、死んでしまつたら全てが終わりだ」

確かに、死んでしまつては、笑い合うこともできないし、悲しむこと、喜びを分かち合うこともできなくなる。

「——それに、異形の鬼を討伐してくれたこと、礼を言う」

「……——お礼、有り難く頂戴します。鱗滝さん」

鱗滝さんは「うむ」と頷く。

「しかし、『花の呼吸』の使い手か。珍しいな」

「派生の呼吸ですからね、『花の呼吸』は」

真菰はニコニコ微笑みながら、

「でねでね、鱗滝さん。——楓は『花の呼吸』を派生させてるの、凄いでしょ！」

「……いや、お前が偉そうにしてどうする」

「むふふ」と、真菰は鱗滝さんの膝に乗りながら笑う。……てか、真菰ちゃん止めて

！鱗滝さんの気配が変わつてるから、俺限定で威圧系に変わつてるから！

「……今日はもう遅い、泊まってゆけ。『育手』には、鴉を飛ばして帰るのは遅くなると伝えるといい」

「あ、はい。お世話になります」

鱗滝さんの厚意？により、俺は一泊させて貰うことになった。

夜には、日輪刀の手入れも忘れずに行いました。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

小屋の入口で鱗滝さんと真菰は、俺のことを見送ってくれていた。

「楓、もう行っちゃうの。もう少しゆっくりしていけばいいのに……」

……真菰ちゃん止めて！面で見えないけど、鱗滝さんきつと睨んでるから！

「……達者でな、楓」

……絶対睨んでるよ、鱗滝さん。早く退散しないと、威圧感で殺されそう……。

「は、はい。な、何かあったら鴉で連絡して下さい。し、失礼します」

「またね」と言う真菰の言葉を背に、俺は歩き出した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

（夜）

狭霧山を出て蝶屋敷を目指して歩いていたら、いつの間にか日が落ちてしまった。

その時、俺の鴉が空中を旋回した。……もう任務とか早くね？刀届いてないし、まだ隊服に袖を通してないよ。今使えるのは、カナエさんが貸してくれた日輪刀だけだし。

「カー！カー！一里先ノ町で花柱が上弦ノ式ト交戦中！隊士ニナツタバカリダガ、楓、即刻向カ工向カ工！」

一里先ならば、〃桜の呼吸 壱ノ型 乱舞一閃——極〃を連発すれば、直に到着できる。——それに、花柱。

「増援は!？」

「近場ニイル隊士ニ声ヲカケテイルガ、時間ガカカル。楓ガ一番近い。楓、花柱、大切ナ人！」

「ああ。俺たち恩人だ」

落ち着け、相手は上弦になる。心を落ち着かせろ。

——全集中 桜の呼吸 壱ノ型 乱舞一閃——極。

俺は刀の柄に手を添え爆発的に加速し——貴女の元へ向かった。

上弦の式

町に急行すると、そこでは、倒れたカナエさんを優しく見る上弦の式。

また、周囲は女性ばかりが殺されている。彼女たちは四肢を欠損しており、人の形を成していない者が殆んど。その中には鬼殺隊の女性隊士の姿もあった。おそらく、上弦の式は女性を好んで喰う鬼なのだろう。目を凝らして見ると、鋭利な扇から何かを散布しているように見える。俺は直感で感じた、あの霧を吸ったら拙い、と。

そして上弦の式は、倒れているカナエさんに近づく。彼女の首を落とすつもりだ。

——桜の呼吸 壺ノ型 乱舞一閃——極。

——花の呼吸 式ノ型 御影梅。

俺は駆けながら刀を振るい、周囲に斬撃を放ち、霧飛ばし奴の頸を狙うが上弦は後方に跳び回避。

奴は、俺をニヤニヤと笑いながら眺め、俺はカナエさんの前に立ち刀を構える。

「おや、増援かな。でも君鬼殺隊？ 鬼殺隊の隊服を着て無いよね？」

「……貴様に教える義理はねえよ。そういうお前は、十二鬼月、上弦の式だな」

「わあ。オレのこと知ってるの？ 嬉しいなあ」

「いや、上弦の式って瞳に書いてるだろうが」

「それもそうだね」と、上弦の式は笑う。

……こいつ、笑っているが笑っていない。優しい声を出しているが、そこからは感情を感じない。だからなのか、先程からこの姿勢を崩さない。

「君は花の呼吸と、それに類似した呼吸を使うんだね。うーん、花柱彼女の弟子かな？」

「貴様に教えるか、悪鬼。お前はここで死ぬ」

「酷いなあ。でもオレ、今から彼女を救ってあげるんだ。邪魔しないで」

「は？救う？お前、頭逝かれてんじやねえの。傷つけてるのに救うとか、お前、狂ってるだろ」

「やっぱり酷いなあ君。オレじゃなかったら、今の言葉で傷ついてたよ。でもそっかそっか、君も救って欲しいってことだね、その言葉は気持ちの裏返しだ」

——血気術 枯園垂れ。

——花の呼吸 式ノ型 御影梅。

上弦の式は扇を振り、冷気の軌道にして鋭利な斬撃を繰り出すが、俺は周りに花の斬撃を放ち相殺させ、カナエさんを抱き後方に飛ばす。

カナエさんは、俺の見上げ眩く。

「……………けほつ……………楓、何で、来たの……………」

そうか。カナエさんは肺をやられたのか。

肺が機能しなくなってしまうえば、“呼吸”を使用することが難しくなる。それは鬼殺隊士にとつては致命傷だ。おそらく、今のカナエさんは、ぎりぎり使用できる“呼吸”で命を繋いでいるのだろう。それにきつと、奴との攻防があつた所為で立ち上がるのでさえ困難なのだ。

「……私の、ことはいいの……楓たちが、私の分まで、生きてくれれば……」

「——それは却下だ。俺は貴女を助ける、絶対に逃げない」

「……でも、今の楓、では——」

カナエさんは言葉を区切った。

おそらくカナエさんは『勝てないかも知れない、だから逃げて』と続けようとしたのだろう。

「大丈夫。俺は死なない」

俺はカナエさんを見て微笑み、カナエさんをゆつくりと地に横にして、攻撃範囲外まで避難させた。俺が隙を見せない限り、カナエさんは安全だろう。

俺は奴を睨むが、奴はニヤニヤ笑うだけだ。

「うーん。会話から察するに、君たちは家族かな？——そうだ、君たちは纏めて救ってあげよう」

「……………ふざけるな。お前は、ここで殺す！」

——血気術 蓮葉氷。

——花の呼吸 式ノ型 御影梅。

上弦の式は、鋭利な扇を俺の頸を目掛けて放ち、俺は踏み込み周囲に刀を振るい扇を相殺させる。先を思い出すと、この血気術には凍てついた血が霧状に散布されているはずなので、遠心力の応用で刀を振るい風撃で霧を飛ばす。

「今の攻撃を受け流したのは君が初めてだよ。君つてもしかして、柱でもあるの?」

——血気術 蔓蓮華。

——花の呼吸 五ノ型 徒の勺薬。

俺は、上弦の式が放った蔓状の氷を、九連撃で正確に弾き落とす。

「……………俺なんか柱なわけねえよ」

「へえ。オレの攻撃に応戦できてるから、柱だとも思ってたのに、残念」

「……………お前はその口を閉じやがれ。舌を切つてやろうか」

——桜の呼吸 壱ノ型 乱舞一閃——極。

——血気術 冬ざれ氷柱。

俺の一閃は奴の頸に届かず、無数の氷柱に阻まれる。

だが、ここまで予定通り。

——花の呼吸 肆ノ型 紅花衣。

俺はそこから飛び上がるように、下から上に捻る軌道で奴の頸を取ろうとするが——ガキンツ、と扇に阻まれる。間合いを取った筈なのに攻撃を弾かれた——こいつの反応速度は異常だ。

「隙ができたねえ」

上弦の式はニヤリと笑った。

——血気術 結晶ノ御子。

上弦の式は、腰くらしいの大きさの自身人形を五体創り出す。この人形はおそらく、強さも奴と同等だろう。

俺は人形と戦うも足を止められ、上弦は数歩歩いた所で立ち止まり、カナエさんを見ていた。——それに奴が居るのは、攻撃範囲内だ。

「予定を変更しよう。まず君は、オレが彼女を救ってあげるのを見ててね」
奴はニヤニヤと笑みを浮かべる。

「——やっぱり綺麗な子だなあ。もう少しで君を救ってあげられるね。後で、綺麗に食べてあげるからね」

——血気術 散り蓮華。

カナエさんに向けて、無数の氷の刃が放たれる。だが、あれは刃か……？それとも凍

る血気術？数が先程より異常だ。

——花の呼吸 陸ノ型 渦桃。

俺は体を捻りながら花の斬撃を放ち、その勢いに乗って奴の空中を飛び超え、氷の刃冷気より先にカナエさんの前に着地する。

カナエさんを護るには、上弦の式と人形、刃冷気を如何にかしなれば。——ならば、カナエさんの手前で——全て潰す。

だが、露見した型、「千本桜」で潰せるか？となったら、不安が残る——だから俺は、両手で柄を握り締め、刀を振るい禁手を解放する。

——桜の呼吸 終ノ型 千本桜・景蔵。

終ノ型は雨の刃であり、攻撃全てが倍。速さも殺傷力も攻撃範囲も斬撃数もだ——だ冷気が変わりに、両腕に負担が掛かり、動かすことが困難になる危険も伴う。

俺は刃冷気と人形を完全に破壊し、奴は致命傷を負いながらも扇で桜を弾きながら「ここまでオレを追い込むなんて、君が始めてかも」と余裕な表情。

しかも俺は、桜の呼吸、壱ノ型、乱舞一閃——極。の過度な使用で足がガタガタであり、体は切り傷だらけ、技の反動もあり、日輪刀の刃が半ばから折れた。だが、俺はまだ戦える。命の灯火が消えるまで戦う。

——次の瞬間、奴が眉を寄せる。

「……なるほど。君は、これも視野に入れてたんだね」

奴も気づいたようだ。——俺のもう一つの狙い。それは、昇ってくる陽を待つ。そう、鬼の弱点である日の光を。

「あはははは……柱ではない君にやられるとはね！それに、援軍の気配もあるなあ。——うーん。君たちを救いたい所だけど、君がまだ何か隠してるかも知れないしね」

奴は言った「お互い強くなったら、また殺し合いをしようね」と。

そして奴は、扇を振るい呟く。

——血気術 冬ざれ氷柱。

奴の前に無数の氷柱が落ち、姿が見えなくなる。

それを見て、俺は刀を落とし両膝を地面に突けて横に倒れると、カナエさんと目が合う。

「……何で、逃げなかった、のよ。バカ……」

「……貴女の為に命を張るのは、当たり前前、だろ」

満身創痍でも、俺たちは生き残ったのだ。

「——兄さん！カナエ姉さん！」

俺が瞳を閉じる前に映ったのは、腰から日輪刀を下げた、目許に涙を溜めた愛しの妹だ。その後ろにはしのぶさんと他の柱。

俺はカナヲを見ながら——「最初の頃より感情が豊かになったなあ」と思い、瞳を閉じたのだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

そして、この事項はすぐさま産屋敷邸に報せが届いた。

縁側に座り、産屋敷耀哉は報せを見ながら呟く。

「……そうか。カナエたちは一命を取り留めたんだね」

上弦と戦闘になり、生き残った。上弦は下弦の鬼を凌ぐ力量の持ち主。その顔触れは数百年変わらず、遭遇した柱、隊士は殺されていった。

そんな中、上弦を倒すことは困難だったが、二人は生き延びた。この一戦には、耐え難い価値がある。——上弦の式。という情報が。

「それに——」

そう言つて、耀哉はもう一人の名前を見やる。

——栗花落楓。彼は、上弦相手でも臆さなかつた。

「——凄い子だ、彼は」

情報によれば、彼は二年間、胡蝶カナエの弟子として活動していた。もしかしたら、彼の力量は『柱』に匹敵するかも知れない。でなければ、上弦と遭遇して、生き残れる確率は激減するのだから。

また、近々、柱合会議が開かれる。そこで、カナエか楓、どちらかを会議に召喚することになるだろう。産屋敷耀哉には、会議までにどちらかが目を覚ます確信があつた。

目覚め

「……………(ハ)は？」

瞳を開けると、白い天井で、俺はベットのの上に仰向けで布団をかけていた。

人の気配は無いが、ここは見慣れた場所——蝶屋敷の一室だ。

「……………そうか。上弦と戦闘後に気を失ったんだっけ」

上体を上げ体を見ると、額、片頬、両脇腹、右腕、右足には包帯が巻かれている。痛みが走らないということは、鎮痛剤が効いているのだろう。

「……………あの野郎。次は絶対に殺す」

俺は、奴を思い出しながら呟く。

「桜の呼吸 終ノ型 千本桜・景巖」が通らなかつたらやばかつたけど。

「……………でも、今の手札をほぼ見せたのは痛いよな」

はあ。と溜息を吐く。

きつとあの鬼が鬼殺隊士を殺す時、型を全て出させそれを分析し、甚振つて殺すのだろう。……………悪趣味にも程がある。まあ、そのお陰で助かった要素もあるのかも知れないが。

すると廊下から、誰かが近づいて来る音がする。音から察するに、これはカナヲか？
「兄さん、失礼します」

扉を開けたカナヲが両手でお盆を持っていた。その上には、水が入った桶と濡れたタオルがある。

カナヲは俺を見て目を丸くし、お盆を落とし、バシヤン、と水が飛び散る。

「兄さんツ！兄さんツ！目を覚ましてくれて良かった！」

カナヲは小走りで俺の胸に飛び込む。

「悪い、心配かけたな」

カナヲは「うん、約束を護ってくれてくれるって信じてたから」と言つて、俺の胸の中で頭を振った。

ああ、確かに約束したんだつた。——「最終選別から、必ず生きて帰ると」。上弦の式と対面したのは、最終選別から帰る途中だったか。

カナヲは顔を上げ、俺を見た。

「兄さん、どこか痛くない？」

「今の所は大丈夫だ。きつと鎮痛剤のお陰だな」

「そつか」と言つて、カナヲは花の笑みを浮かべた。

取り敢えず、カナヲに俺の怪我の状況を聞いた所、カナヲの答えはこうだった。

「兄さんの怪我は——右腕の筋の損傷、全身打撲、軽い凍傷、血管損傷、右足の骨折、だよ」

俺は絶句し、カナヲの言葉を聞いて思った。

「——俺、かなりの重傷じゃね？よく生きてたな……」
そう思った。

でも俺より——、

「カナエさんは、大丈夫なのか？」

カナエさんは肺をやられてので、きつと後遺症が残ってしまう。

「今は寝てるだけだから心配しないで。……でもカナエ姉さんは、肺胞を破壊されていたらから鬼殺隊士としての生命が——」

カナヲは、そこまで言って泣きそうになっていた。

そうか。『全集中の呼吸』が巧く使用ができなくなるから『花の呼吸』が使用不能なるのか。

「でも、日常生活を送る分には問題ないって」

俺は「そうか」と頷く。

生きていれば何とかかなる。その中で、何かを見出せば良い。カナエさんなら、それができるはずだ。

「きよたちも心配してる。早く顔を見せてあげないと」

“きよたち”とは、蝶屋敷で保護をした子だ。

この子たちの両親たちは、鬼に殺されてしまった。

すると、しのぶさんが姿を現し、部屋に入ってから扉を閉め、ニコニコ笑みを浮かべ俺の元まで歩み寄る。

「起きたんですね、楓」

俺は、んん？と、内心で首を傾げる。

姉御気質が無くなって、口調がいつもより優しい？んで、ニコニコ微笑んでる。

「(……しのぶさん、だよな?)」

——俺は「そうか」と納得した。おそらくしのぶさんは、カナエさんの想いを継ぐと決めているのだ。だから“胡蝶しのぶ”を殺し、“胡蝶カナエ”を演じる。きつと、そういうことなのだろう。てか、俺たちの生活に罅を入れた“上弦の弐”を滅殺したくなる。……絶対、アイツは俺が殺す。上弦の弐

「お陰さまでな。てか、俺ってどれくらい寝てたんだ?」

「三日、ですね。その間の御世話は、カナヲが」

「うん」と、カナヲは頷いた。

「それと、数日後に柱合会議があります」

——柱合会議。

それは、半年に一度、『柱たち』で行う会議のことである。

俺は「へえ、そうなんだ」と聞き流そうとしたが——、

「怪我もあり辛いと思いますが、準備をしないと下さいね、楓」

……待つて。聞き捨てないことを聞いたんだが？

「俺も出席？……も、もしかして、上弦の弐の情報、のこと？」

「はい。柱たちの前に出ると思うので、粗相ないように」

しのぶさんは、言葉が続ける。

「それに、私は『柱』になったので、私の顔合わせも含んでいます」

しのぶさんは、俺が眠っている間に『柱』になったそうだ。——お館様からは、『蟲柱』の称号を戴いたということ。

まあ確かに、しのぶさんの鬼殺の「毒」なら、『柱』に就任できてもおかしくない。

……でも俺は、もう「毒」の実験台になるのは勘弁だが。

「……まあうん、わかった。準備しとくよ」

「行きたくね——！」と、内心で叫び散らす俺。

俺の内心を読んだように、カナヲは苦笑、しのぶさんは「ふふ」と微笑んでいた。

柱合会議

今、俺の居る場所は鬼殺隊の本部である、産屋敷邸である。

この場までの道程は、隠の方に目隠しをされ、おぶって案内してもらった。そして、産屋敷邸に到着した所で、しのぶさんと合流したのだ。

柱合会議では、「柱たち」としのぶさんの顔合あはわせあを行い、その後俺が「上弦ノ式」についての情報を提示、次に通例会議、というする流れらしい。

「楓。では、行きましようか」

「そうだな」

俺は、しのぶさんの問いに頷く。

現在の俺は、松葉杖を突き、右腕には包帯を巻き、包帯で腕を吊るしている状態だ。

頬、額の傷は塞がったが、骨折や筋の損傷は柱合会議までに完治がでなかつた。俺の恰好、お館様や柱たちに怒られないよね？ そうだよね？



扉を開け、行燈に照らす室内に「八人の柱」が座っていた。全員、カナエさんから修

行中に教えてもらった人たちである。そして、もの凄いい威圧感。——『柱』が発する威圧感だ。

俺は頭を深く下げて、しのぶさんに続き入室し扉を閉める。てか、俺の恰好場違い過ぎない？大丈夫？……いや、その前に、俺正座できないよ。

「蟲柱、胡蝶しのぶです。よろしくお願いします」

「階級〃癸〃、栗花落楓です。よろしくお願いします」

……やべえやべえ。柱たちは「お前その格好はなんだ？」って思ってるよ、あの顔は。特に風柱！あの形相はやばすぎ「何だアその格好はア、殺すぞ！」って感じで見てるもん……。

その時、しのぶさんが助け舟を出す。

「皆さん。彼の怪我は、お館様も了承済みです」

しのぶさんは「彼は、上弦の弐との交戦で傷ついたんですよ」と、若干威圧感。

柱たちも「……そうか」って納得してくれた。……風柱は、しぶしぶ、って感じだったけど。んで、俺は部屋に隅で立っただけでもいらしい。

ともあれ、しのぶさんは指定された席に着席した。

「つーか、栗花落。お前、本当に上弦と戦ったのか？ド派手に階級が低すぎだろ？」

そう聞いたのは音柱。

「ま、まあそうですね。交戦したのは、最終選別の帰りですから」

「よもやよもや!」「オレは信じない信じない」「最終選別の帰りイ、本当かよオ?」「キヤー、上弦と戦いで生き残る!素敵ね!」「南無阿弥陀仏」との声が上がる。

まあ確かに、階級が低い奴が「上弦」と交戦して生き残るのは、些か信じられないかも知れない。俺でも半信半疑なるし。

「交戦したのは嘘じゃありませんよ、私が証人ですから。——それに彼は、胡蝶カナエの弟子ですから、これくらい当然です」

……しのぶさん、あんまり持ち上げないで。

俺、柱と対面するだけでも、胃痛案件なんです。

「よもや!胡蝶カナエに弟子が居ただと!?!初耳だ!」

「オレも聞いたことねエ。そんな素振り見せなかつたしなア」

「つーことはだ、栗花落。お前、「花の呼吸」の使い手か?」

……これって、柱合会議なんだよね?俺、何で質問されてるんだろ?

ともあれ、俺は口を開く。

「そうですね。俺は「花の呼吸」を使います」

「楓は、派生もさせたんですよね?」

え?何でしのぶさん知ってるの?

でもまあ、何処からから漏れたんだらうなあ。最終選別の後とかに。

「——『桜の呼吸』に派生させました」

「型はどうしたんだア」

そう、風柱が聞く。

「自分で創りました。派生させても、型がなかったら意味がありませんから」

「ほ——」「へえ」「よもや!？」と感嘆な声上がるが、俺が創った型の剣技は、ほぼ趣味なんだよね……。

その時、

「——お館様のお成りです」

そう誰かが眩き、鬼殺隊当主が姿を現す。

お館様は、最終選別で拝見した双子?の肩に手を添えながら部屋に入って瞬間、『柱たち』は腰を落とし頭垂れた。俺もそうしたいが、この怪我で自由が効かない。隅に立つだけだ。

「お館様におかれましても、ご壮健でなによりです。益々の御多幸を切にお祈り申し上げます」

「ありがとう、実弥」

風柱が座つたお館様にそう挨拶したが、さつきと別人じゃね。と思うくらい真面目だった。……てか、切り替え早すぎだろ。

「——君が、栗花落楓だね」

「お初にお目にかかります、お館様。このような恰好、お許してください」

俺は頭を下げる。

「構わないよ、事情が事情だからね」

お館様の声は、耳に凄く心地良い。何だか、優しい温もりでふわふわしてるようだ。

ともあれ、俺は顔を上げ、

「ありがとうございます」

そう言うと、お館様は微笑んだ。

「では、早速会議を始めようか。最初の議題は、各柱に通達したように、上弦の式についてだ。——楓、君たちが遭遇した、上弦の式についての仔細を報告してもらえるかな」

「わかりました」

俺は、回りを見渡してから口を開く。

「自分と花柱はあの夜、上弦の式と遭遇しました。上弦の式は、鋭利な対の扇を携える鬼で、冷気を操る血気術を使用し、その中には凍てついた血を霧状に撒き散らす血気術が

あります。これを吸ったら肺胞が破壊され、呼吸の使用が許されず、鬼殺隊士にとっては致命傷です」

俺は言葉が続ける。

「奴は、鬼殺隊士の剣技も見てるようにも思いました。あの鬼は、まず相手の力量を分析し、甚振って殺す、そう感じます。それに奴は、自分の分身を作れます。力量は、本体と同等と見て間違えないでしょう。最低でも、五体は生成可能と見て間違いありません」

俺は怒りを抑え込み、呟く。

「——それと奴は、女性を好んで襲います。奴の周囲には、殺された女性が多く転がっていましたが」

俺が両拳を握締めていたら、しのぶさんが「大丈夫ですから」と声をかけてくれた。無意識に殺気が洩れていたようだ。……申し訳ないです。

「——報告は以上です」

「ありがとう、楓。そうか……上弦の式は、氷の血気術を使うんだね」

上弦ノ式について知っている限りの情報を伝えると、柱たちは、対策を話し始める。

「肺を破壊する血気術とは厄介なことだ。やはり、速度で立ち回るべきか？」

「いや、ここは破壊力で勝負した方が確実だ。人形は、そのまま潰せばいい」

「相性を考えれば、宇髄？煉獄？悲鳴嶼さん？」

「ここは、私が前線に立ちましようか？楓の話だと、上弦の式は『女性に』執着してるようですし。元花柱の前に現れたのも『女性』だったから、と可能性も捨てきれませんか」

その時、音柱が俺を見る。

「栗花落は、よく奴を退けたな。聞いた所、かなり厄介な野郎だ」

「そうですね。俺の場合は——上弦の式を除き、全て潰しました」

ザワザワ、と戸惑うような声がかかる。

「その代償として、体がガタガタになってしまったんですが」

でもあの時、陽の保険が効いて幸いした。奴には致命傷を与えることができているが、これが無かったら、俺とカナエさんは死んでいたかも知れない。

その後は、暫く柱たちによる対策案が飛び交い、それができる限り出尽くした後、お館様が静かに頷いた。

「では各自、上弦の式の特徴を念頭に置いて、楓からの情報を無駄にしないように」

その言葉の次に、各柱たちは頭を下げ、俺も慌てて頭を下げた。

「それじゃあ、上弦の式についての議題は終わり。楓は下がっていいよ」

「御意。お先に失礼します」

俺は、隠の人たちに連れられ産屋敷邸を後にしたのだった。
こうして、俺の柱合会議が終了した。

継承

俺は隠の方に蝶屋敷の門の前に下ろしてもらうと、もう一人の隠の方から松葉杖を受け取り、立ち上がり松葉杖を突く。

「オレたちはここで失礼する」

「はい。ありがとうございます」

俺が頭を下げると、隠の方は手を振りこの場を後にする。

「あつ、楓様。お帰りなさい！」

「お帰りなさい！」

「柱合会議、お疲れ様でしたあ！」

そう言ったのは、門の前で待っていてくれた「なほ」たちだ。

だが、いつにも増して嬉しそうな気が？

「何か、嬉しいことでもあったのか？」

俺がそう言って首を傾げると、なほが——衝撃的言葉を発する。

「楓様！——カナエ様が、目を覚ましたんです！」

朗らかな声でそう言った。

俺は一瞬思考を停止させたが、その場で松葉杖を捨て去り走り出す。
その時、

「……楓様。右足を骨折してるんだよね？」

「楓様は、今怪我のことは忘れ去ってるんだよ、きつと」

「楓様とカナエ様、2人には特別なものを感じるしね！」

“なほたち”がそう言っていたらしいが、俺の耳には入らなかった。



「カナエさん！」

目を覚ましベット上で上体を起こし窓の外の花を眺めていたら、ガラガラと勢いよく扉が開いてから閉まり、包帯が巻かれた楓が姿を現す。それにしても酷い怪我だ。私を護る為、かなり無茶をしたのだろう。

私は微笑みながら、楓を見る。

「おはよう、楓」

「ああ、おはよう」

楓は、私の隣に腰を下ろす。

今までの経緯を聞くと、私は皆の頑張りに泣きそうになる。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
「そう、柱合会議でそんなことが……」

「ああ。お館様も心配してた」

楓は意を決したように――、

「カナエさんは肺がやられて、もう戦えないんだよな……」

「そう、ね。私は、もう戦えないわ」

私はもう戦えない。肺胞を何割か破壊され機能が低下し、今まで扱ってきた『花の呼吸』の使用ができなくなった。日常生活に支障はないと思うが、戦えない私は刀を置くことになるだろう。――でも、私には『後継者』が居る。

「でも、楓が私の剣を受け継いでくれたから後悔はないわ」

「ああ。花の呼吸は俺にとっては誇りだ。次の代まで、しっかり受け継げさせるから心配するな」

「楓、ありがとう」

私は楓に微笑む。

「……」――でももう、私の夢は叶えられそうにないわね」

――私の夢。鬼を斬らずに救う方法。

いつだったか、しのぶには「姉さん、そんなの夢物語よ」って言われたことがあった。私たち姉妹を助けられた悲鳴嶼さんも「正気の沙汰ではない」とも言われた。

理解されないことは重々承知だ。でも、私は諦め切れられない。——鬼も、嘗ては人だったんだから。そして、哀しい生き物なんだから。きつと、解り合える道があると思った。

「……鬼と仲良くする夢。だったか？」

私は頷く。

「——カナエさんの想いは、俺も受け継ぐよ」

「俺も?」

「そうだな。しのぶさんも受け継ぐと決めてる。でもその為にしのぶさんは、胡蝶しのぶ〃を殺し、胡蝶カナエ〃を演じているよ。——自分を殺して他人に成りきるのは、想像以上に神経を擦り減らすから、やっぱ無理して見えるよ」

「俺では、その覚悟に水を差せない」と楓は悲しい顔をする。

「そう。しのぶがそんなことを」

「ああ。押し付けになっちゃうかも知れないけど、カナエさん。どうか、胡蝶しのぶ〃を殺させないであげてくれ」

「——わかったわ。近直、しのぶと話してみる。心配しないで、きつと大丈夫だから」

私は両手の平で、パン、と手を叩く。

「暗い話はこので終わり！——それはそうと楓、怪我は大丈夫なの？」

右腕は安静になつてゐるようだが、右足は無理に動かしてゐるようにも見える。

でも楓は「へ？」としていた。

「——ツ?!?や、やばい、かなり痛い……」

楓が言うには、右足は骨折してゐるらしい。なので、楓はベツトの上に右足を伸ばした。

「ふふ。そんなになつても、私に会いたかつたのね」

私は冗談交じりにそう言うが——、

「そりやそうだろ。カナエさんは、俺たちの命の恩人で——大切な人だぞ」

……………楓、きつと無意識ね。タラシの才能があるんじゃないかしら。

最終選別で誰かを落としてゐるようにも思うんだけど、気のせいかしら？

「——私も楓は大切な人よ。じゃあ、怪我が直つたらどこか行きましょうか」

「そうだな。でもさすがに、ひと月は安静かもなあ。右腕の筋も、完治まで時間がかかり

そうだし」

「終ノ型の代償、だつたかしら？」

「まあな。あの野郎^{上弦の武}を退く為には、これしかなかつた」

「終ノ型は誰にも教えないけどな、危ないし」と、楓は苦笑。

その時、アオイが扉をノックして、私たちの返事を聞いてから「失礼します」と姿を現す。

「楓様、お客様です。真菰、と仰る方が屋敷の門の前に」

「え？マジで。……や、やばい、説教されるのかな」

楓は顔を青くして「大丈夫だよな？そうだよな？」と呟く。

えーと確か、真菰という方は、楓の同期の子だったかしら。

「じ、じゃあ、俺は行くな。カナエさん、お大事に」

楓が扉を出るとアオイが「楓様、松葉杖です」と杖を受け取っていた。

そして、入れか変わるように――、

「――姉、さん」

「――しのぶ」

自然と視線が合い、董色の瞳の目許に涙が浮かんでいた。

ああ、確かに。しのぶは無理をしてるように見えた。そして、扉が閉まる瞬間に楓が

「じゃ、お願いな」と呟いていた。ええ、わかったわ楓。後は、私に任せて頂戴。

桜の苦悩

松葉杖を突き門の前まで移動していたら、花柄の着物に、肩まで伸びた黒髪。蒼みを帯びた水晶のような瞳であり、側頭部には花柄の狐の面。つまり、真菰のことである。

「……か、かなり怒ってるように見えるのは気のせいだよね」

ともあれ、俺は真菰の元まで歩み寄る。

「ひ、久しぶりだな、真菰」

「うん、久しぶりだね」

ちよ、真菰さん。ニコニコ笑ってるのに、目が笑ってないよ。なんつーか「楓、何でそんなに重傷なのかな？」って感じで。

「か、髪伸びたな、真菰」

咄嗟に話題を考え、話を逸らす。

「気づいてくれたんだ、さすが楓。——で、その怪我はどうしたの?」

……うん、そうだよ。話題を逸らせる訳無いよね。俺、知ってた。

俺は観念して話し出す。

「真菰と別れた後、上弦の式と交戦して重傷を負ったんだ。——心配かけてごめん」

真菰は、俺に抱きつき両手を腰に回した。

「鱗滝さんに手紙がきた時、本当に驚いたんだからね。だって、お別れの挨拶をして1日も経過してなかったんだから」

「命の恩人が死んじやうなんて、嫌だよ……」と、真菰は涙声だ。

まあ確かに、「元柱」に手紙が届けられるのは当然か。

「……そうだよな、悪い。でも助けたい人が居て、その人の為に命を張ったんだよ」

真菰は見上げるように顔を上げる。

「やっぱりこう見ると」「真菰って美少女なんだよなあ」って改めて思う。

「……その人って、元花柱？」

「まあな。で、俺の師匠だ」

何で解ったんだ？と思ったが、俺の女性関係は最終選別の帰りに話したんだっけ。てか、真菰さん「ふくん」って同意するの止めて!?!何か、俺悪いことしたと思っちゃうから!!

「……兄さん。その女狐は、誰？」

俺と真菰に気づいたカナヲが、俺たちの元まで歩み寄りそう言った。……てか、カナヲさん。女狐って、真菰が女性で、狐の面をしてるからだよな？そうだよな？

真菰は俺からパツと離れ、一步後ろに下がった。

「そうきたかあ〜」

そう言って、真菰は苦笑。

「私は真菰っていうんだ、楓とは同期だよ。よろしくね、カナヲちゃん」

「……………」

黙り込むカナヲ。

やはり、他人と接点を持つのはまだ早いらしい。まあ俺としては、真菰とも仲良くなつて欲しいが。

真菰は「カナヲちゃん、ちよつと来て」と言つて、カナヲを呼び寄せ、何か話している。

「……………それって本当」

「ホントだよ。きつと、楓は喜ぶから」

「……………そう。じゃあ、さつきの話、私はいいよ」

……真菰さん。カナヲに何を吹き込んだの？てか、「さつきの話」ってなんのこと？そして、次の真菰の言葉で、俺は思考を停止するのだった。

「————楓。今日から私、蝶屋敷でお世話になります！」

「はい？」と俺は困惑。……てか、カナヲに話つてそのこと？ちなみに、しのぶさんには事前に鴉手紙を飛ばして許可を得ているらしい。

カナエさんにはまだらしいが、カナエさんならば『あらあら。家族が増えるのね、嬉しいわ』と、許可を出すだろう。それと、きよたちも話を聞いていて賛成ということ。

———そう。鱗滝さんの許可が無ければ、話を白紙できる。

「ま、真菰。鱗滝さんの許可は？」

真菰は、右手人差し指を口許に当てた。

「えっとね。泣き落としを使ったら、しぶしぶ領いてくれたよ」

「ちよつと待つて。俺、鱗滝さんに恨まれない？『儂の真菰を奪いおつて、栗花落楓め……』つて感じになつてないよね？そうだよね？」

「うくとね。鱗滝さんは『今度、楓を連れて来なさい。話したいことがある』だつて」
「待つて待つて、本当に待つて。俺、もしかしたら鱗元滝柱さんに半殺しにされちゃうから。てか、水の呼吸を使つてきたりしないよね？」

「楓、ガンバ」

俺は肩をガツクリと落とす。

……俺、鬼殺隊士になってから、怒涛な生活を送ってない？俺、今後色々な意味で大丈夫だよね？

「あ、それとね、楓。私の専属鍛冶屋も、蝶屋敷を訪れることになってるんだ」
「そ、そうか。わ、わかった」

俺は「もう諦めた」と思い、全てを投げ出したくなった。てかこれ、外堀埋められてたんじゃね。真菰はきつと、蝶屋敷に住むことは決まってた、と思う。

はあ。と俺が吐いた溜息は「頑張れ」と言っているように思えた。

日輪刀

真菰事件？から数日が経過し、俺と真菰は縁側に座り、蝶屋敷に彷徨い込んだ蝶を眺めていた。ちなみに、真菰部屋は蝶屋敷に空いていた一室だ。

『真菰ちゃん、楓。お客様よ』

カナエさんの言葉に、縁側に座っていた俺と真菰は首を傾げる。はて、俺たちに客？
「もしかして、刀かな？」

「ああ確かに、そろそろ予定日だったか」

俺は、この日に合わせるように手足の包帯を取ることができたが、激しい運動は厳禁である。

機能回復訓練ができるようになるまでは、後一週間くらいかかりそう。

「楓。私の肩に掴まって」

「いや、そこまでは……よろしくお願いします」

……俺は真菰の、むっ。という表情に負けました。

なので俺は、真菰の肩を借りて立ち上がり、鍛冶屋が座っている居間へ向かうのだった。



居間へ向かうと、ひよつとこの面をつけた2人の鍛冶屋が座布団に座っていたので、俺たちも対面になるように座る。

鍛冶屋の前には、風呂敷に包まれた長い箱。おそらく、日輪刀を格納している箱だろう。

「私は、真菰の刀を打った鋼鐵塚という」

「私は、栗花落殿の刀を打った鉄穴森といいます」

カナエさんたちの話によると、鍛冶屋の方は、かなり情熱的な鍛冶屋ばかりだという。——刀に対する愛情が、狂気に近いらしい。

鋼鐵塚さんと鉄穴森さんが風呂敷を取ると、そこからは長細い木箱が姿を見せ、取っ手を外すと箱の中には鞘に納められた日輪刀。

「さ。手に取ってみてくれ」

「どんな色に変化するか、楽しみですね」

——日輪刀は、別名“色代わりの刀”と呼ばれ、持つ者によって色を変えるらしい。だが、才が無ければ色が変わることはないという。

俺と真菰が刀の柄を握り日輪刀を鞘から抜くと、刀身が緩やかに色付けていく。

ミサンガは、俺の利き手に結ばれている。

ともあれ、俺はカナヲに声をかける。

「カナヲ。約束通り来たけど、どうかしたのか？」

「に、兄さん。わ、私に、桜の呼吸を教えてください」

カナヲは、緊張の面持ちで俺にそう言う。

「桜の呼吸を次の代に享受できるのは、かなり嬉しい。でも終ノ型は、俺だけが可能な剣技の為教えることはできない。なので、壹、弐ノ型だけ。ということになる。

「いいぞ。教えるよ」

俺が朗らかにそう言うと、カナヲが「……本当に、真菰の言う通りだった」と呟いていた。……なるほど。あの時の話はこれに関してのことだったのか。

ともあれ、俺は口を開く。

「俺が教えるのは、壹ノ型 乱舞一閃。弐ノ型 千本桜だ」

「あ、あの兄さん。乱舞一閃には——極があつたはず」

「よ、よく知ってるな。でもなあ……」

——極は乱発してはいけない技だ。最悪の例が、上弦の弐と交戦した俺の足だ。

俺が渋っていたら、カナヲが「教えて、兄さん……」と上目遣いで見詰める。……てか、これは真菰の入れ知恵に違いない。と、俺は思った。

「わ、わかった。——極。も教える。でも乱発はするなよ、いいな？」
「う、うん。よろしくお願ひします」

カナヲは、ペコリと頭を下げた。

こうして俺は、カナヲに “桜の呼吸” の継承するのだった。

誓い

——二週間後。　　道場　　

「いだだだだだ！カナエさん、ゆっくり倒して！」

「うふふふ。男の子だから大丈夫。さ、もつと倒すわよ」

そう言つて、俺の背に居るカナエさんは、両足を開いて座る俺の体を手につけようと押し倒す。

——そう。俺はカナエさんと一緒に機能回復訓練を行っているのだ。きよたちも『楓様のことは、カナエ様に一任することになってますから』ということらしい。

「ちよ、待つて待つて！変な方向に骨が曲がっちゃうからね！」

「大丈夫大丈夫。楓は、常中が習得できてるもの。それに、今日は最終訓練日じゃない」「それつてどういう理屈!?!」

俺は声を張り上げる。

ちなみに、機能回復訓練は三つある。まずは、今カナエさんから受けている体の解しから始まり、続いて『反射訓練』と呼ばれる葉湯のかけ合い勝負、それから『全身訓練』と呼ばれる鬼ごっこである。てかカナエさんは、『本当は肺を痛めてないんじゃない

？』つてくらい強い。勝負の全てが互角、それが現状である。

ともあれ、一通り解れた所で、「よしっ」とカナエさんが呟く。

「解すのはこれで終わり。じゃ、次に行こっか」

「……お、おう」

立ち上がり体を動かして見ると、八割程思うように動くようになっていた。やはり、コツコツと積み上げるのが機能回復訓練なんだなあ。と実感する俺である。

「そういえば楓。最近、カナヲが時間を開けているのだけど何か知ってる？」

「ああ。たぶん、桜の呼吸の修行だろうな。俺、型は一通り教えたから」
「なるほど。それで、カナヲには桜の呼吸の適性は？」

俺は「あつたな」と答える。

俺は終ノ型を教えなかったが、カナヲは自分だけの終ノ型を創るんじゃないか？つて思うのは、俺の気のせいだろうか？

「それにしても、義兄妹で『花の呼吸』を習得できるとは思ってなかったよ、師匠」

「そうね。呼吸には、様々な種類や派生があるものね」

俺は「まあな」と頷く。

カナエさんは「そういえば」と話題を変える。

「楓。今日の訓練が終わったら、街へ行きましょう。約束だもんね」

「そうするか。明日からは、任務が言い渡されるのかも知れないし」

「そうね」と言つて、カナエさんは微笑んだ。

てか、俺の階級は甲^{きのえ}まで上がつていた。屋敷で「……嘘だろ？」つて声を上げたのは当然であつた。まさか、上弦の弐と交戦しただけでここまで上がるなんて予想外過ぎる。

「それじゃあ、早くお出かけする為に訓練を終わらせましょう」

「そうだな」

このようにして俺とカナエさんは、機能回復訓練を終了させたのだった。



く下街く

「久しぶりに来たなあ」

下街は人通りが途切れることは無く、昼過ぎなのか、活気に満ち溢れていた。ちなみに、俺とカナエさんは着物姿である。

「そうね。楓は、ほぼずっとベットのの上だったものね。……でも、安静にしてたかは怪しいけど」

「俺、柱合会議以外安静にしていたから」

「……本当かしら、真菰ちゃんと逢引していたでしょ？」

「い、いや。眠れなかった夜、縁側で話してただけだから。決して逢引じゃないからね、本当だよ」

「まあ、私は別に構わないんだけど」

そつぽを向くカナエさん。

「……カナエさん、何か拗ねてる？」

「……拗ねてないわよ、タラシ楓」

カナエさんが見ているのは、俺の利き腕に結ばれたミサンガだ。カナエさんが言うには「ミサンガの色と結び位置の意味って知ってる、楓？」とのこと。

「わからん。カナエさんは解るの」の聞いた所、「教えないわよ、バカ」らしい。いや、何で俺怒られてんの？理不尽……。

「あら、カナエちゃんと楓じゃない。久しぶりね」

他愛も無い会話をしながら並び、赤い野点傘を通り過ぎようとした時、女性がひよっこりと顔を出したのだ。

「お久しぶりです、捺^なさん」

カナエさんが言った「捺さん」とは、この店の店主の名前である。

「お久しぶりです、おばさん」

俺がそう言う、「私はまだ二十代だよ」と苦笑。

ちなみに俺も、店主とは顔なじみでもあった。こここの団子屋には、よく買い出しに来ていたからである。

「どうかな？新商品ができたの、食べて行かない？」

「じゃあ、お言葉に甘えます。楓も、いいわよね？」

「構わないぞ」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

店内に入り、奥のテーブル席で対面に座る、俺とカナエさん。

ともあれ、新作のみたらし団子と緑茶を頼むと、捺さんは店の厨房へ向かった。

それから、程なくして運ばれてくるみたらし団子と緑茶。

「こうして見ると、世の中に鬼舞辻が潜んでるなんて考えられないよなあ」

俺は「平和だなあ」と呟く。

カナエさんは、クスッと笑った。

「そうね。鬼と共存できたら、この平和が続くのにな」

「そうだな」

そう呟いた所で「いただきます」と手を合わせ、俺たちは団子を口にす。

団子は、口の中に蕩けるような味で、口直しの緑茶がかなり合う。つまり、美味しい。ということだ。

「ねえ楓。楓は、鬼殺隊に入隊したことに後悔はない？」

カナエさんは「もしかしたら、あんなに重傷を負うことはなかったのよ」と続け、目を伏せる。そしてカナエさんの視線は、店内に入って来た家族連れ。

まあ確かに——普通に仕事に就いて、恋人を作り、幸せに暮らす。と、俺には別の道もあつたのかも知れない。

でも俺は——、

「全くない。——それに、俺は知ってしまったしな。世の中には『悪鬼』が居ることに」

カナエさん「……そっか」と頷く。

「楓。私と約束して、絶対に死なないって」

「大丈夫だ。鬼舞辻の頸を捕るまで、絶対に俺は死なない」

——そう、誓いを立てた。

初任務

「なあ鴉さんよ。こんな所に鬼が居るのか?」

鬼殺隊の隊服に袖を通し、蝶羽織りを上から羽織っている俺は鴉にそう聞く。

ちなみに鬼殺隊の隊服だが、通気性が良く濡れにくく燃えにくい上、特別な繊維で作られているので、下級の鬼の攻撃に耐えうる強度を備えている。そしてその背には、鬼殺隊が掲げる『悪鬼滅殺』の“滅”の文字が刻まれている代物である。

「居ル居ル!この森に潜入シテイタ鬼殺隊士が、十名殉職シテイル!ダカラ、階級ノ高イ楓ガ呼バレタンダ!」

鴉がそう言った。

そして、俺が今居る場所は町外れの森の中だ。鴉の情報によると、森に入った町の子供が帰って来ず、捜索の出た大人たちも森から帰って来なくなつたそうだ。……てか、殉職している情報を聞くと、どれだけ頑張つても手に届く命だけしか護ることはできないと、改めて実感してしまい歯痒くなる。

「階級が高いつていつてもなあ。俺、弱いし」

「嘘ツケ!上弦ト交戦シテ生キテイル楓ハ、弱い訳ガナイダロウ!ソレニ楓ハ、元花柱ノ

弟子ダロウ！」

「いやまあ、そうかも知れないけど」

歩いていたら、俺の目線の先に古びた小屋が映る。

長年放置されていたのか、所々が罅割れ瓦礫が朽ち果てていた。誰も寄り付かなく、近づくことでさえ躊躇する小屋。

「……人間？」

小屋の中からは人の気配がする。上弦の式と交戦した俺は、人間と鬼。その気配の違いが読み取れるようになっていく。

俺は小屋に近づき、ギイイイ。と扉を開けると、そこには蹲っている子供。おそらく、森から帰還しなくなった子だろう。——でも何で？ 帰らなくなった多数大人は？ 何故、鬼殺隊士は殉職した？

俺は子供の前で膝を曲げて、目線を合わせる。

「お前、町の子供か？」

「う、うん。……で、でも、僕帰れない」

「何でだ？」と俺が聞こうとした時、小屋を囲ように鬼の気配。

俺は溜息を吐き「なるほどな」と頷く。町の子供は誘き寄せる餌で、助けに来た人たちは食糧血肉ということだ。

小屋内部の窓から外をざっと見て、鬼の数は五十体前後。森に入った鬼殺隊士、多数の大人たちは、子供を見つけてから囲まれ、たぶん喰われたんだろう。民間人となれば、格好の餌だ。

でもおかしい、鬼は群れないはず……。

「大丈夫だ、絶対助ける」

俺は言葉が続ける。

「坊主、知ってることでいい。怪物は何か言ってたか？」

「……怪物は『我は大人の方が好物。大人の方が血肉になる』って言ってた」

確かに、子供が帰らなければ、捜索にかかるのは大人たちだ。

その大人が鬼の狙いになる。ということなんだろう。で、その大人は、今は俺。ということになる。

「そうか。俺が今からその怪物を退治してくるから、そこから動くなよ」

「だ、ダメだよ。ここに来た黒い人も、そう言ってから戻って来なかった……」

「心配すんな、俺は死なないから」

そう言ってから、俺は桜色の日輪刀を鞘から抜き、小屋から出て行く。



外に出て回りを見回すと、そこには「ぐうううう！」「がああああ！」と、鬼たちが小屋を囲み、涎を垂らし唸り声を上げている。

……いやその前に、こいつら死んでるよな？ 生気も無いし、目が死んでる。……もしかしてこいつら、同族に殺されてから血気術で操られるのか？ 本体は一体だけ。とか？

——そうすれば辻褃が合う。あれだ、本体が鬼共を操って、鬼共で人間を殺してから喰っているのだろう。

——桜の呼吸 弐ノ型 千本桜。

俺は刀を振り、無数の刃で鬼共を斬りつけ殲滅するが、まだ半分以上は残っている。もう一度広範囲で殲滅したいが、千本桜は隙ができてしまう剣技でもあるので、無暗に乱発することは危険だ。

——花の呼吸 五ノ型 徒の勺薬。

俺は花の九連撃で、迫ってくる鬼の頸を確実に落とす。

背後から襲ってきた鬼には、俺が振り向く動作と一緒に足蹴りを入れ、体勢を崩させてから刀を振るい頸を跳ばし、別方向から跳びかかって来た鬼には、遠心力の応用で体を回し、その勢いで刀を振り頸を跳ばす。

——花の呼吸 陸ノ型 渦桃。

左右から襲って来た鬼に、俺は地面を蹴り、空中で体を捻りながら、花の斬撃で頸を跳

ばす。

そして、着地した俺を取り囲むように襲ってくる鬼共。

——花の呼吸 式ノ型 御影梅。

自身の周囲に花の斬撃を放ち、襲ってくる鬼の頸を跳ばす。

——血気術 土砂際涯。

——血気術 土槍。

その声と同時に、俺を中心とする地面が盛り上がり、俺は体勢を崩す。

そして、そこを狙うように鋭い土の槍が正面から襲いかかる。

——花の呼吸 陸ノ型 渦桃。

俺は飛ばさせながらも空で体を捻り、周囲に斬撃を放ち槍を弾く。だが、右頬は鋭利な槍が掠り傷を作る。

着地した時、襲いかかって来た鬼共は“花の呼吸 肆ノ型 紅羽衣”で頸を跳ばす。

「(……あれが本体か。でも、血気術を使用するとか聞いてないけど)」

俺は溜息を吐き、刀を持ち直し、鬼共を見据えて構えた。



「ぎゃああああ！」

刀を振るい鬼の頸を跳ばすと断末魔が上がり、体を霧状に変化させこの世から消え去る。だが、俺は警戒心を解くこと無く前を見据える。

あれから半刻一時間が経過し、鬼の数は残り八体と追い詰めることができていた。——血気術が襲ってくるというオマケ付きだが。

——桜の呼吸 式ノ型 千本桜。

——血気術 土防壁。

刀を振るい、刃の雨で鬼共は斬り裂かれて消滅するが、本体の鬼は地面を持ち上げ、千本桜の刃の雨防ぐ。

——血気術 土力鎖。

本体の鬼の体から無数の土の鎖が飛び出し、それは刃を絡め取って日輪刀を引き手放さそうとする。

俺は「チッ」と舌打ちをする。

「(……いや待てよ。奪い去るとしているということは、その遠心力を利用できるのでは?)」

そう考え俺は——、

——桜の呼吸 壺ノ型 乱舞一閃。

俺は奴の引く力を利用して、爆発的に加速して鎖を破壊し、鬼の頸に刃を振るう。

——血気術 土鉄。

突然、地面から土の柱が奴の正面に飛び出す。

それが壁になり、俺の一閃は奴の頸を霞めるだけだ。

——血気術 土爪。

鬼の尖った爪が更に伸び、爪が変色した。俺は直感で感じた、この爪には毒が仕込まれている、と。

俺はそれをギリギリまで引きつけ、爪を躲す。

——桜の呼吸 壺ノ型 乱舞一閃。

そして、至近距離で一閃。

これだけ近ければ、奴の頸に届く。

「ぎゃあああああ！」

——奴は、断末魔を上げ頸を跳ばす。

「……我は、あのお方に認め——」

そう最後に口にし、奴は霧となつてこの世を去つた。

——それにしても、奴の瞳に刻まれていたのは、下弦の陸？ だったような。まあ、十二鬼月がこんな小癩な手を使うとは思えない。俺の勘違いだろう。

俺は日輪刀を鞘に納め、右頬を触つたが、意外と傷が深い。これはきつと、傷が残つ

てしまう確率があつた。

運命

眠った子供を背負い森から出ると、水柱と遭遇した。鴉が大量の鬼を確認した時、増援を呼んでいてくれたらしい。てか、柱が援軍として駆け付けてくれるなんて予想外である。

「……栗花落、鬼はどうしたんだ？」

「倒しました。面倒な鬼でしたけど」

富岡さんは目を丸くしたが、すぐにいつもの面持ちに戻る。

「……そうか。さすが、元花柱の弟子と言った所か」

「……鴉も言っていましたけど、俺、鬼殺隊でどういう評価なんですか？」

「……（柱）候補だ」

「富岡さん、主語がないんですが。何の候補なんですか？」

「……柱」

俺は内心で「嘘でしょ？」と呟き、富岡さんは言葉が続ける。

「……（栗花落は柱になる素質を十分兼ね備えてる、だから柱候補なんだ。柱代理の）オレとは違う」

「まあ、俺と富岡さんは違う人間ですけど」

「……そうじゃない」

富岡さんは、ムス。としながら呟く。

……俺、富岡さんと言葉の食い違いをしてるように思えるんだが。

「そ、それより、子供を早く町に戻してあげましょう」

「……ああ」



〈町〉

「鬼は斬りました。森の中は安全になりましたが、無闇に近づかないようにして下さい」

「……ありがとうございます。鬼狩り様」

子供を返すと、そう言うってから村長が頭を下げる。

——その時、他の子供たちが俺の袖を掴む。

「お兄ちゃん！お父さんたちは!？」

「鬼狩り様なんだから、お父さんたちも助けてくれたんでしょ!？」

俺は空を見上げ目を閉じる。

「(……そうか。この子のたちの親は、鬼に喰われたのか)」

村長も「あなた達、鬼狩り様に迷惑よ!」と言っているが、子供たちは聞く耳を持たない。

だから俺は、子供たちを見て――、

「――お父さんたちは帰って来ない。鬼に喰われたんだ」

俺の言葉で、この場が静寂に包まれる。

最初に口火を切ったのは、子供たちだった。

「……お父さんたちは、死んじやったの。もう帰って来ないの?」

「嘘だよね? 助けてくれたんでしょ?」

俺は頭を振り、

「いや、俺が来た時にはもう喰われていた」

「……――ツ!?……な、何で、何で早く来てくれなかったの!? お兄ちゃんが早く来ていれば、お父さんは死ななかつた!」

「…………お、お兄ちゃんは何人殺しだツ! 僕たちのお父さんを殺した、人殺しだツ!」

子供たちは、俺を責めるようにそう言った。

――人殺し。見方によれば、俺はそう見えるのだろう。確かに、俺がもつと早く

来ていれば、お前たちの親は死んでいなかったも知れない。

でも、『俺が来るまでの間に、鬼を斬りに来た同士も喰われて死んだんだぞ』と、言い返したいが、言い返した所で話は平行線を辿るだけだ。

……そうだよな、子供たちは誰かの所為にしなければ、最悪壊れてしまう。

「……そうだな。見方によつては、俺は『人殺し』かもな」

「うう。返して、僕たちのお父さんを返してッ！」

そこからは、子供たちから俺の罵倒の嵐。

鬼殺隊士はこのような運命を通ると聞いていたが、やっぱり堪える……。

「村長。自分はここで」

俺は罵倒を無視し、村長に頭を下げ、この場を去った。

その時——『逃げるなッ、人殺しッ！』という声が、耳に残った。



く 帰り道く

「……栗花落。お前は、鬼を狩る度に罵倒を受けるのか？」

そう言ったのは、木々を跳ぶ富岡さん。

「わかりません。——でも、俺が早く来れば隊士は殉職しなかったかも知れませんが、子

供の親も助けられていたのかも知れません。やはり、全部俺が悪いんでしょうか？」

俺も木々を跳びながら呟く。

「……（粟花落、お前だけが悪いんじゃない。鬼殺隊全体の責任でもあるんだ。オレたち鬼殺隊は、大勢の命を護る立場に居るが、護れない命があるのは百も承知。だから）重く考えるな」

俺は苦笑する。

富岡さんは、相変わらず言葉が足りない。でも、勇気づけたくれたことは解る。

「富岡さんは言葉が足りませんよ。そんなんじゃない、〃柱たち〃から嫌われますよ」

「……オレは嫌われてない」

富岡さんはそう呟き、俺は苦笑した。

——俺は初任務を無事にやり遂げたが、心にシコリを残した結果になった。

桜柱

「産屋敷邸。とある一室」

初任務から数日後。俺は手紙で産屋敷邸に呼ばれ、屋敷の一室で片膝をつき頭を垂れていた。

お館様は寄り添う双子に手伝ってもらい、対面に座った所で、お館様が口を開く。

「楓。召集に応じてくれて感謝するよ」

俺は顔を上げ、

「はっ。お館様におかれましても、ご壮健でなによりです。益々の御多幸を切にお祈り申し上げます」

「ありがとうございます、楓」

そう言つて、お館様は微笑んだ。

「——今日はお話があると聞いて参上しましたが、どのような内容でしょうか？」

「そうだね。今日付けで、楓を——柱に任命したいんだ」

お館様は「条件も揃つてるからね」と呟く。

そして——柱。鬼殺隊の幹部、組織の中^核になる人間。でも俺が、柱に相応しい人間

か?と聞かれたら、素直に『はい』とは答えられない。

「……柱、ですか。なぜ、自分なんでしょう?」

お館様は微笑んだ。

「要因としては沢山あるけど、強いて言えば、楓の中に眠る、心の強さ、かな」

「……心の強さ、ですか。自分に、そんなのあるとは思えません」

「楓は持つてるよ。そしてその筆頭は——真菰とカナエ。じゃないかな」

お館様は、そう断言する。……いや、お館様。何で俺の友好関係を知ってるの?俺の個人情報が筒抜けとかないよね?

——閑話休題。

でも柱か……。俺には荷が重い気がする。

「……お館様。考える時間を戴いても宜しいですか?」

「そうだね。良い返事を期待してるよ、楓」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

〈蝶屋敷、道場〉

俺は裸足で道場に立ち、真剣で素振りをしている。

俺にとって刀を握っている時間は、無に近い状態になれるからだ。考えごとも、一時

的になら頭の隅に追いやることができる。ちなみに、今日は非番な為着物姿である。

「あ、楓。自主練？」

道場にひよっこ顔を覗かせたのは、花柄の着物に、肩まで伸びた黒髪。蒼みを帯びた水晶のような瞳であり、側頭部には花柄の狐の面。つまり、真菰だ。真菰も今日は非番の為、着物姿。

「まあな。ちよつと無心になりたくて、刀を振ってた」

「無心に？」

真菰は、俺の隣に座り眩く。

俺も刀を鞘に戻し、その場で座り、刀を自身の隣に置く。

「ああ。お館様の誘いに、ちよつと迷ってたな」

俺が「柱」の件を真菰に話すと、真菰は「……凄い」と言つて目を丸くしていた。

それにしても、蝶屋敷は魔狂の巣窟か？つて言いたくなる。元柱、現柱、柱候補、水の剣士、花の剣士。……一箇所に戦力が固まり過ぎだろ。

「鬼殺隊の「柱」は、俺には重いんだよ」

柱となれば、下の隊士の命を預かる立場にもなる、俺にそんな度量があるとは思えない。い。

「……それに初任務で、何が正しいことなのか解らなくなつたんだ」

今でも子供たちの「人殺しッ！」という言葉が、耳に残っている。俺が溜息を吐くと、真菰がゆっくり話し始める。

「——楓は、立ち止まったままでいいの？楓の望むことはなに？」

「……俺の望みは、鬼も人間も静かに暮らせる世界を創りたい」

「でも、夢物語だろ」と言つて、俺は苦笑する。

すると真菰は「ふふ。答えは出てるじゃん」と笑つた。

「夢物語でもいいじゃん。——でも、その道を貫き進むのは、想像以上に辛いことだと思う。壁にぶつかつたり、手を汚す覚悟を伴うかもしれない……それでも、進むしかないんだよ、楓」

「それ、カナエたちとの夢なんですよ？」と、真菰は首を傾げる。

俺は頷き、呟く。

「……………そうだな」

「そつか。なら、そこに私も入れてよ。でも、責任はとつてね、楓」

そういう真菰の瞳には、強い意思の炎が灯つているように見えた。真菰は、揺るがない信念を持つて鬼狩りとして活動しているのだろう。きつと今の俺には、それが欠落していたものかも知れない。

「……………あと私は、どんなことがあつても楓の味方だから。それだけは覚えといて」

真菰は、花の笑みを浮かべた。

「あ、ああ」

俺は戸惑うような声を上げる。

そして俺は真菰に、男ならウジウジするな。つて、間接的に言われた気もするんだが。後、若干横暴だよ。とも思った。——でもそうだな、俺は自分の信じた道を進む。

「——ありがとうな、真菰。俺は望みを叶える為に進むよ、お館様の話を受ける」
「それでこそ楓だね。柱」になつた報告は、一番最初にお願ひ」

俺は苦笑した。

「わかつたよ。じゃ、俺は席を外すな」

俺は刀を手に取り、靴を履き道場を後にした。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

夕方、産屋敷邸へ

俺は隠の方に目隠しをしてもらい、再び産屋敷邸の一室に訪れていた。

片膝をつけた俺と対面で座るお館様は、俺の表情見て「吹っ切れたんだね」と言つて微笑んだ。

「——お館様。先程の話ですが、お受けすることに決めました」

俺は「柱になります」と言つて頷く。

「しつかり聴き届けたよ、楓。それじゃあ、近い内に臨時会議を開こう。そこで『新たな柱』として楓を紹介する。それでいいかい？」

え？会議で紹介するの？俺、〃柱たち〃と対面するのは、胃痛案件なんですけど……。

まあでも、俺は頷き、

「わかりました、お館様」

「うん。それでね、楓は——『桜柱』に任命する。これからは、この名を胸に刻んで精進するように」

「御意」

俺は頭を下げた。

——このようにして、新たな〃柱〃である『桜柱』が誕生したのだ。

悪鬼滅殺

〔産屋敷邸、庭〕

その日鴉は、柱たちに産屋敷邸に召集を告げ、柱たちは『柱合会議の日程以外で召集するとは、何事か』と考えながら産屋敷邸に向かった。

「なんだア。柱が勢揃いとか、鬼に動きでもあったのかア？」

そう言ったのは、風柱・不死川実弥。

その表情は「重要案件なんだよなア」と言つて、毒づいている。

「南無……私は、鴉に呼ばれ馳せ参じた」

岩柱・悲鳴嶼行瞑は、数珠をじやらじやらと擦り合わせ、両瞳から涙を流し呟く。『各柱』も「悲鳴嶼さんと同じです」と答える。

その時「お館様のお成りです」と声がかかり、耀哉が双子と一緒に姿を現し、ザツと柱たちは片膝をつき頭を下げる。ともあれ、風柱がいつものように挨拶を交わし、言葉が続ける。

「お館様。本日はどういった御用件で、柱たちに召集を掛けたのでしょうか？」

「そうだね。今日の会議は、鬼に関しての話じゃないんだ」

「え?」と柱たちは内心で呟く。

鬼の情報ではなかったら、何の為に臨時会議を設けたのか?と、柱たちは疑問を膨らませる。

「実はね。つい先日、新たな『柱』を任命したんだ。この会議は、その『柱』との顔合わせ。と思つて欲しい」

「……して、お館様。その『柱』とは、どのような人物なんでしょうか?」

炎柱がそう呟き、音柱が「オレは派手好きの奴なら嬉しいぜ!」と続く。

耀哉は「皆も一度会ったことがあるんだよ」と言つて微笑む。柱たちは「一度会ったことがある?」と内心で首を傾げる。

「出ておいで」

耀哉がそう呟くと、屋敷の角から——隊服に刀を腰に差した「栗花落楓」が姿を現し『柱たち』の前で片膝をつく。

柱たちの反応は「お前、柱合会議の時の!」「胡蝶カナエの弟子か!」「柱候補か!」「嘘?」「上弦の弐」の情報を開示していた子だよね?」「ふふ。驚いて驚いてる」と、様々な反応だ。

「この度、お館様から『桜柱』の名を戴いた栗花落楓と申します。よろしくお願いします」
そう言つてから、楓は一礼する。

だが、『柱』への任命に不満を抱いたのは、風柱・不死川実弥だ。

「……不躰ですがお館様。栗花落楓の実力は如何ほど？自分は、力量が無ければ賛成できません」

「ふふ。そういうと思っていたよ、実弥。——だから楓に、事前に言っておいたんだ」
会議の前に耀哉は、楓に「手合せをするかも知れない。楓、その準備はしておいて」と、そう言っていたのだ。その問いに楓は「問題ありません、お館様」と了承していた。

「不死川さん、それは『真剣で手合せ』でしょうか？自分は木刀でも構いませんが」
楓の言葉に、実弥は額に青筋を浮かべる。

実弥は「真剣に決まってるだろオが！」と声を荒げた。

「——お前の実力を見せろ」

「——わかりました」

真剣での手合わせは、寸止めか、武器を弾く、で決着という方針で決まった。



く中庭く

向かい合う楓と実弥。やはり、一同が興味を持つのは楓の実力だ。

楓は、約二カ月で柱に上り詰め、上弦の式と交戦し、胡蝶カナエの弟子であり、呼吸

を派生させ型を創った。という肩書きがあるので、興味を示されるのは必然であった。

「じゃあ、このコインが落ちたら戦闘開始でいいですか？」

「はい」

「ああ」

しのぶ、楓、実弥がそう言うてから、コインが高く弾かれ、地面に触れて硬く音を立てると同時に、楓と実弥は抜剣し技を繰り出した。

——風の呼吸 壺ノ方 塵旋風・削ぎ。

——花の呼吸 式ノ型 御影梅。

螺旋状に巻き起こる旋風を纏いながら実弥は楓に突撃するが、花の斬撃を周囲に描き、それを相殺する。そして、ガキンツ！と凄まじい刀の衝突音と爆風が舞い上がり、両者は後方に跳び、間合いを取る。

——花の呼吸 五ノ型 徒の勺葉。

——風の呼吸 参ノ型 晴嵐風樹。

楓は高速で九連撃を放つが、実弥は自身を取り囲むような風の剣技で、花の斬撃を弾き落とす。

そして、実弥は踏み込み切り上げるが、それに反応した楓は刀を衝突させる。

「いい反応だア」

「どつせつ」

楓は刀を弾くと、

——花の呼吸 陸ノ型 渦桃。

そのまま跳ぶように、体を捻りながら刀を振るう。

しかし実弥は、それを素早い体捌きで回避。

——風の呼吸 陸ノ型 黒風烟嵐。

空気を引き裂き、斬り上げられた斬風の刃が楓を襲いかかる。着地した楓は咄嗟に一歩引き斬撃を回避するが、凄まじい風で吹き飛ばされる。だが楓は、抜群の体のバネで空中で体勢を立て直す。

そして、着地したと同時に剣技を繰り出す。

——桜の呼吸 壺ノ型 乱舞一閃。

——風の呼吸 捌ノ型 初烈風斬り。

楓は桜の閃光になり、実弥の刀を飛ばす為一閃を放つが、実弥は閃光とすれ違いざまに剣技を繰り出し、一閃を弾き落とす。その衝突で楓と実弥は体勢を崩すが、二人はすぐさま振り向き体勢を整え刀を振るい、ガキンツ！と甲高い音が響き、刀の鏝競り合い。

「——不死川さん、守り硬すぎだろ。俺の剣技が通る気がしないんだが」

「——確かに、栗花落は『柱』に匹敵する力量を持つてるなア。しかもこいつ、まだ何

か隠してやがるなア」

楓と実弥、お互いが心中を呟く。

そして楓と実弥が距離を取り、楓は納刀し、柄に右掌を添え実弥を見据え、実弥も刀を構える。

——桜の呼吸 壱ノ型 乱舞「そこまでだ！」

——風の呼吸 壱ノ型 塵旋「そこまでだ！」

楓の前に抜剣した義勇が、実弥の前には抜剣した杏寿郎が割って入る。

「……なんだア、煉獄。勝手に止めんじやねエ」

「……富岡さん。何で止めるんですか？」

不機嫌になりました。という表情で義勇と杏寿郎を見る、楓と実弥。

「止める！不死川、周りを見回して見ろっ！」

「……お前たち、ここが何処だか忘れてないか？」

杏寿郎と義勇の言葉で、楓と実弥は周り見渡すと、一部の庭は更地に変えられ、その周りの木々は吹き飛び、耀哉を守るように抜剣している柱たち。だが、耀哉はここにこ微笑んでいるが。

「(……………力の加減を誤った)」

「(……………お館様のお屋敷だっことを忘れてたぜエ)」

冷汗を流す楓と実弥。

ともあれ、楓は柄から手を放し、実弥は納刀する。だが、柱たちの責める視線が痛い。そして二人は「……やっちゃまった」と同調していたのだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

〈数分前、柱 side〉

「あの実力は本物だな！オレは派手に歓迎するぜ！」

そう言ったのは、音柱・宇髄天元。

それに続き、炎柱・煉獄杏寿郎が呟く。

「よもやよもやだ！オレには、『栗花落楓』が『胡蝶カナエ』に見えるぞ！」

「それはそうでしょう。楓は、『元花柱・胡蝶カナエ』の正式な後継者です」

そう。蟲柱・胡蝶しのぶが言うように、楓は呼吸だけでは無く、カナエの剣技も受け継いでいる。なので、『栗花落楓』が『胡蝶カナエ』のように映るのは必然だった。

その後も「キュンキュンしちゃうわ」と、恋柱・甘露寺蜜璃が呟き、「実力は認めてやる。だが甘露寺を誑かせるような輩なら殺す」と、蛇柱・伊黒小芭内が続いた。

「僕はすぐ忘れちゃうし、何でもいいや」

「……（栗花落は柱代理のオレと違い、柱としての力量を持つてる。だからオレは）認め

る」

「柱が増えることに感謝を……南無阿弥陀仏」

霞柱・時透無一郎。水柱・富岡義勇。岩柱・悲鳴嶼行冥。と続く。そして柱たちは、
 栗花落楓”を正式に認めたのだ。

「あの人たちを止めなくていいの？」

無一郎がそう呟く。そう、花と風の余波で周囲の地や木々が吹き飛ばされているのだ。

柱たちは顔を引き攣らせて『あれは拙い、お館様の安全確保を』と思い、抜刀したのだった。

——閑話休題。

そしてこれが、柱顔合わせの一幕になったのだった。

約束

↳ 蝶屋敷、居間↳

俺は現在、蝶と花の着物を身に纏う二人の少女に正座をさせられていた。

その二人の少女は俺の前に立ち、腰脇に左右の手を当て『怒ってます』という表情である。

「柱に就任し僅かな期間で、お館様のお屋敷を破壊するとはどういうことなの？」

「手合わせをするな。と言わないけど、限度つてもものがあるんじゃないかな？」

「……すいません。反省してます」

俺は真菰とカナエさんの問いに、精神誠意を込めて頭を下げる。

臨時会議終了後、修繕費の話になり『風柱』・『桜柱』で半分ずつ持つことになったのだ。

修繕費は蝶屋敷に請求され、俺の生活結費料から引き落とすらしい。なので、俺が自由に

使える金はほぼ皆無、ということだ。てか「本当かなあ〜」って二人で言わないで、マジで反省してます。

「楓って、こんなに戦闘狂だったかしら？」

く下街く

身支度を整えた俺たちは、横に並んで歩く。

「で、二人はどんな着物を買おうとしてるんだ？」

「うーん。私は向日葵柄の着物が見たいなあ。売ってたら嬉しんだけど」

「私は紫陽花柄かしら」

ふむ。真菰が向日葵で、カナエさんが紫陽花。

俺は内心で想像してみたが、かなり似合うと思った。てか、元が美人だし、二人に似合わない服はないよな。と思う俺である。

街の中を見て回っていたら、女性が集まっている店を見つける。きっと、目的の店なのだろう。

「……着物屋、あそこだよな？」

「混雑してるねえ」

「最近、できたばかりらしいわよ」

俺、真菰、カナエさんと呟く。

てか、俺も入るの？という疑問が浮上する。明らかに場違いで居心地が悪い気がするんだが。

「離れて待つてるから、二人で行って来いよ」

「いや、楓も一緒に入るんだよ。やっぱり、男性からの意見って必要だと思っただよ」
真菰は俺の右袖を掴み「逃がさないからね」という視線を向ける。

カナエさんも「さ、行きましよう」と言っつて、強引？に俺を引つ張るのだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

～着物店～

店の内部に入ると、店内には様々な着物が陳列されていた。

「見て見て、着物だけじゃなく浴衣もあるよー」

「本当ねっ。試着して見るのもいいかもね」

「……頼むから、少し落ち着いてくれ」

俺は二人の眩きに、げんなりしながら答える。

そう、周りの女性たちから微笑ましい視線が注がれているのだ。でも、殺伐とした「鬼殺隊」という組織に籍を置いているのだ。はしゃぐのは何となくわかる。

「お客様。そんなに気になるなら、試着してもよろしいですよ」

「本当ですかっ」と眩く、真菰とカナエさん。

「俺のことは気にしなくていいぞ。ゆっくり見て来い」

俺がそう言っつと、真菰とカナエは、目的の着物を持つておばさんについて行っつた。

いや、旦那じゃないから。と、内心で呟く俺。

それにしても、向日葵と紫陽花の浴衣がもの凄く合っていて、一輪の花のようである。「あー、うん。別嬪さんだな。似合ってる似合ってる」

真菰とカナエさんは「照れ隠しかな？」と呟き、クスつと笑う。

「他にも着て見るか？」聞いたのだが、真菰とカナエさんは、この着物で満足したようだ。ともあれ、俺が一時退出してから真菰たちは着替え、化粧を落とすらしい。

——閑話休題。

決定した着物を包装してもらい、真菰とカナエさんがそれを受け取ってから、俺がおばさんに代金を払う。

「じゃあ、おばさん。ありがとうございます」

「気に入って貰えてよかったよ。お兄さんも、彼女たちを大切にな」

「命に変えても護るんで安心して下さい」

おばさんは「そうかそうか」と言っただけにこにここと微笑んだ。
それから着物店を出て、一息つける店に入る。



くとある店

テーブル席に座り、俺が口を開く。

「気分転換はできたか？」

「うん。新しい着物も手に入ったし、満足だよ」

「むふふ〜」と笑う真菰。

「そうね。これからも頑張れそうだよ」

カナエさんがそう呟く。

「そうだよな、蝶屋敷は怪我人が搬送されてくる重大拠点でもある。基本、ゆつくりで
きる時間はない。」

「楓は柱になったから、今まで以上に忙しくなるんでしよう？」

「私が柱を担っていた時は、警備地区も広くなるし、基本忙しかったわ」

「柱の任務は常に死と隣り合わせだ。十二鬼月と対面することになってもおかしくな
い。」

「だろうな。まあ、無理がないように頑張るよ。それに、簡単には死なないから心配する
な」

「俺だけで上弦に遭遇するのだけは勘弁して欲しけど。でも、きつと逃げることはない
だろう。」

「じゃあ、約束しよう。鬼舞辻を倒しても、生き残るって」

「そうね。約束しましょう、絶対生き残るって」

「そうだな。約束だ」

真菰、カナエさん、俺と呟き。——そう、約束をしたのだった。

番外編

帰省

「……なあ真菰。俺、帰っていいかな」

俺がそう呟く。

今俺と真菰は、鱗滝さんに顔を見せる為、故郷である狭霧山に向かっているのだ。なんで俺と一緒に居るかと言うと、鱗滝さんからの手紙で『楓も一緒に顔を見せに来なさい、話したいことがある』ということだ。

「ダメだよ。もう、鱗滝さんに鴉を飛ばしちやっただから、観念してっ」

真菰は、頬を膨らませて呟く。

俺、鱗滝さんから半殺しにされないよね。客観的に見れば、俺が鱗滝さんの元から真菰を引き抜いた。ということでもあるんだし。

「大丈夫だよ、楓っ。きつと、近況報告だけだと思っし」

真菰はそう言うが、俺は「きつとそれだけじゃないよなあ……」と内心で呟く。

そんなことを話しながら山を登っていると、ある小屋が目に入る。——鱗滝さんが住まう小屋だ。

「楓は柱に就任したと、真菰の文にあった。お館様からは何柱の称号を戴いたんだ？」

「やはり花柱か？」と、鱗滝さんは続けた。

「——いえ、桜柱の名を戴きました」

“花”ではなく、“桜”の称号になったのは、おそらく俺の派生の為だろう。

そして、鱗滝さんの気配が変わる。

「——だが、柱に就任したからと言って、真菰を預けられると決まったわけではない」

俺は「……避けて通れなかったか」と思いながら内心で溜息を吐く。いや、覚悟はしていたけどさ。

「楓よ。もし真菰が病床に伏せた時、お前は どうする？」

「そうなった場合、俺の最優先事項は真菰の看病。となるでしょう」

俺は間髪入れずに答える。

鱗滝さんは面を食らったよう見えたが、俺の気のせいかな？

「……それは、全てを投げ打つてもか？」

「例外を除けば、全てを捨てる覚悟はあります」

「地位や名誉も捨てるか？」

「——捨てますね。彼女の安全が第一ですから」

——その時、声上がる。

「う、鱗滝さんも楓もストッププっ！私、かなり恥ずかしいよ……」

鱗滝さんの両膝の上に座っていた真菰は、顔を茹でダコのように真っ赤にしていた。まあ、本人の前でする話じゃない気がするし。

でも、鱗滝さんは弟子は、異形の鬼の存在もあり、最終選別から帰って来なかった方が圧倒的に多い。

そして、真菰の前に指導を施して二人の弟子、その二人は、鱗滝さんの弟子の中でも抜きん出た才能を有していたと聞いたが——その片割れは、最終選別で帰らぬ人となつてしまった。だからこそ、鱗滝さんは真菰を最終選別に送り出すことを渋っていた。後に真菰の口から俺は聞いた。

なので俺は、鱗滝さんが過保護になる理由も解る気がする。

「真菰よ。儂にとつては重要なことなのだ、分つてくれ」

鱗滝さんの言葉に、真菰は「ううう」と小さくなり若干涙目である。

ともあれ、鱗滝さんは言葉を続ける。

「及第点、としておこう」

「……及第点、ですか？」

「そうだ。儂は、完全に許したわけではない」

鱗滝さんはそう呟く。

きつと、今の状況を暫く様子見。ということなのだろう。

「わかりました。完全に認めてもらえるように精進します」

「期待してるぞ、楓」

そう言つて、鱗滝さんが面の中で笑つた気配がした。

この日は、鱗滝さんと近況報告をし、昼食を御馳走になつた。帰り際に「——いつでも帰つて来なさい、歓迎する」と言つてもらえた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

く帰り道、道中く

「俺一応、鱗滝さんに認められた、のか？」

「でも、及第点だしなあ」と、俺は付け加える。

真菰は笑みを浮かべ、

「大丈夫大丈夫。時が経過すれば、完全に認めてくれるつて」

「そうだな」

俺もそう呟き、今日のやり取りを振り返る。ともあれ、俺と真菰は、今日の出来事を話しながら蝶屋敷を目指して帰路に着く。

このようして、俺と真菰、鱗滝さんとの会合が幕を閉じたのだった。

夢の道

夢

「……鬼の気配?」

任務が終わり蝶屋敷を目指して帰還している途中、俺は鬼の気配を感じ取った。

木々を跳び超えていたら「彌豆子!」という声が聞こえてくる。気配を辿ると、その声の主は人間だ。俺は加速し、少年の前で雪をザザツ蹴るようにして停止し、右手で日輪刀を抜き放つ。

「大丈夫か?」

「あ、貴方は!」

「鬼を狩る剣士だ。あれは、お前の妹か?」

「は、はい。彌豆子は、妹は体調がおかしいんです」

俺は「そうか」と空を仰ぐ。

「——妹は鬼になった」

「お、鬼!」

少年は「鬼」という言葉に驚愕していた。

それもそうだ。鬼の存在など、日常生活では認知されていないのだから。

「ッウ——！」

鬼化した妹は、俺と兄に牙を剥いて威嚇している。

俺の力量を感じ取ったのか、体も大柄になっていった。なので俺は加速し、背後に回って鬼の両腕を組み、左手を使用し拘束する。

「ま、待って下さい!?!……い、妹は、禰豆子は鬼じゃ……」

「妹は鬼だ、現実を見るんだ」

俺の言葉を聞いた少年はガクリと項垂れる。

「い、妹を殺すんですか!?!」

「……殺す。鬼は人を喰う」

「ッ!? や、やめてください! 妹は、まだ誰も殺していない!」

「それは目覚めたばかりだからだ。これから腹を満たす為に人を喰う。鬼は、そうして力を増す」

「禰豆子は他の鬼とは違う! 人を喰ったりしない!」

「……人を喰わない鬼か。それは夢物語だな」

——鬼が人を喰わないなど有り得ない。

鬼は人を喰う、だから殺す。鬼殺隊士としては当然だ。……——でも、俺が掲げるの

も夢も、夢物語でもあるのだ。

そして俺は「悪い」と呟き、左腕で首を固定し、右腕を振り上げ、刀を右肩から突き刺さるように固定する。

少年は座り込み、両手を前にして頭を垂れた。

「……ど、どうか妹を離してくれないでしょうか。……妹には誰も殺させません……人間に戻す方法も、必ず見つけます……お願いします……」

「……断る、妹はここで殺す」

「や、止めてください！オレが妹を人間に戻します！だから——」

顔を上げ、泣きながらに懇願する少年。

俺はそれを無視し、妹を突き刺す。妹は「ギャア——！」と声を上げる。妹

「止めろおとおツツ！」

少年は反射的に石を投げ俺の行動を遮る。そして立ち上がり傍らに置いていた斧を持ち、木々に隠れながら俺に向かって来るが、俺は刀の柄で背後を叩き気絶させる。そして途中で投げたと思われる斧が、空中で回転し俺の隣接する木に刺さる。

その時、気を緩めてしまった俺に妹は右蹴りを放ち、俺は体勢を崩してしまった。妹が移動したその先には、少年が気絶をしている。

「——喰われる」

そう俺は思ったのだが、妹の行動は「喰う」ではなく「護る」だった。

その時、少年の『禰豆子は他の鬼とは違う！人を喰ったりしない！』という言葉が蘇る。

「……飢餓状態でも護る、か。まるで、俺が掲げている夢が現実になったかのような」

妹は俺に跳びかかろうとするが、俺は背後に回り後首を軽く叩き気絶させ、ゆっくり横たえる。

「富岡さん。そんな所で隠れてないで出て来てくださいよ」

俺がそう言うと、富岡さんが隣接した木々を分けて姿を見せる。

「……なぜ殺さなかった？小僧の妹は鬼だぞ」

「一連の流れを見てたはずです。そしてこれが、俺の答えです」

富岡さんは、少年たちと俺を交互に見る。

「……胡蝶カナエの夢、か」

——胡蝶カナエの夢。

それは、人間と鬼が垣根を跳び超え、仲良くする夢だ。その夢の一環を、少年と鬼の妹は見せてくれた気がした。

「そうですね。——富岡さんは、これを見てどう思いました？」

「……通常の鬼とは何かが違う——オレも賭けてみたい、とも」

「……そうですか。でもそうすると俺と富岡さん、立派な隊律違反ですよね」

鬼を逃がす柱など、前代未聞だろう。

すると、富岡さんが口を開く。

「……でもいいのか？オレは兎も角、栗花落は、胡蝶姉と真菰の許可が必要なはずだ」

「……あー、そうですね。俺、鬼の形相で怒られそうです。でも、賭けたくなっただんですよ。今の光景はまるで、俺の夢そのものでしたから」

富岡さんは「……そうか」と頷いた。それから、富岡さんがお館様に文を送り、俺が鱗滝さんに文を送るのだった。

これから

「——置き去りにしてごめんね、炭治郎……」

闇の中で、母さんが呟いた。

——そして、オレは意識を覚醒させる。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「うう……」

オレはぐぐもった声を上げる。オレは意識を失っていたのか？ 一体どうして？

オレは頭の回らない中、辺りを見回すと、すぐ隣に意識を失った禰豆子が横たわっていた。禰豆子は、口に竹製の枷を噛んでいて、家に置いてあった羽織に包まれていること以外変わったことはない。

「——起きたか」

オレが声を発した方に顔を向けると、蝶羽織りを羽織った青年がオレを見ていた。

……そうか。この人は禰豆子を殺さないでくれたのか。

「……はい。オレはこれからどうすれば良いでしょうか？」

一年半後。蝶屋敷、居間へ

「――楓は柱なのに、鬼を見逃して、もしもの時は腹を切るってどういうことか説明できるかしら？」

「――鱗滝さんと義勇さんもなんて聞いてないよ、私。ちゃんと説明してね？」

着物姿のカナエさんと真菰は俺の前に立ち、両腕を組んでそう呟き、俺は対面で正座をしながら冷汗が止まらない。……てか、カナエさんと真菰の背に、阿修羅像が浮かんでいるように錯覚するんだが。ちなみに俺も着物姿です、はい。

「えーとですね。黙秘権――」

俺の『黙秘権を行使する』という言葉を最後まで紡ぐことができなかつた。いやだつて、カナエさんと真菰の「んッ！」っていう怒気？が、怖すぎたからだ。

余談だが、カナエさんはリハビリで、少しの間なら『全集中の呼吸』の使用が可能だ。さすが元柱だなあ。と俺は思った。

「わ、わかつた。一から説明するな」

俺はあの日の出来事を鮮明に語つた。

カナエさんと真菰は、俺の話を聞き逃さないように、耳を傾けて聞いてくれた。



「……なるほどね。それを見て、富岡君と楓は賭けて見たくなったのね」
「それに、鬼が人間を護るなんて聞いたことないもんね」

カナエさんと真菰は、正座をしてる俺と対面に座り眩く。

俺はびくびくしながら「そ、そうだろう？」と、同意を求めるように眩く。……何か俺、カナエさんと真菰に、尻に敷かれてるように思えるんだが、気のせいだよな？

「炭治郎、だっけ。その子は今、狭霧山に？」

「ああ。鬼殺隊に入隊する為に、鱗滝さんと共に修行を行ってるはずだ」

最終選別に送り出す修行期間は、大凡二年が目安だ。きつと今頃は、最後の修行、と
いった所だろう。

「じゃあ、私の弟弟子になるんだねっ」

嬉しそうに眩く真菰。

ちなみに、真菰の階級は甲きのえまで上がっている。でも、俺から見たら『柱に匹敵する力量は持つてるよな』と思うけど。

「それじゃあ、三人で鱗滝さんの元を訪ねましょう、私、鬼の禰豆子と兄の炭治郎を見てみたいし」

「名案だね、カナエ。私も久しぶりに顔を見せられるし、一石二鳥だよ」

「ま、待って待って。俺抜きで話が進んでない？」

「……楓は反対なの？」

「……私たち、久しぶりのお出掛になるんだよ」

上目遣いで、俺を見つめる真菰とカナエさん。

だが俺は、最後の言い訳を試みる。

「ちよ、蝶屋敷はどうするんだよ？」

「アオイたちだけで回ってるのだから、私たちが居なくても平気なはずだけど」

「……やっぱり、楓は私たちとお出掛するのは反対なの？」

「ぐっ」と息を詰める俺。どうやら退路は塞がれていたらしい。なので、俺の返答は一つしかない。

「わ、わかった。今度の非番の日を合わせて、狭霧山に行こう」

こうして俺、真菰、カナエさんは、今度の非番の日を合わせて狭霧山に向かうことに決まったのだ。

「栗花落楓だ。よろしくな、炭治郎」

「は、はい！よろしくお願ひしますっ」

炭治郎は生まれつき鼻が良い。それこそ、人の感情が読み取れてしまう程だ。

その炭治郎が栗花落楓から嗅ぎ取った匂いは、桜のように優しい匂いだ。だがその匂いの中には、慈悲の念が伴ったの匂いも含まれている。

炭治郎は、師の鱗滝から聞いたことがあった。鬼狩りでありながらも、鬼に慈悲の念を抱き、鬼を滅する鬼殺隊士がいることを。その人物は、栗花落楓のことを差していたのだろう、と。

「楓さんは、なぜここに？」

楓は「修行の頻度が気になってな」と言葉にしようとしたが、先程の光景を思い出しながら、「いや、修行の話は時間を開けてからだな」と思い、話を切り返すことにした。

「息抜き相手にどうかな？と思ってな」

楓は「ちよつと休憩しよう」と呟くと、炭治郎は「は、はい」と頷いた。

それから、炭治郎と楓は近場の切り倒された丸太に座り、世間話をした。

楓の話は、炭治郎にとって心を攪るものだらけだった。この世には、塩で構成された水が流れていることや、世界には外国というものがあり、それが点在していることなど。まるでこのひと時は、鬼の存在など忘れてしまう程だ。

その時、炭治郎がポツリと呟く。

「……オレ、強くなれるんでしょか？」

炭治郎が言うには、宍色の髪をして狐の面をしている青年に稽古をつけてもらっているが、まったく成果が出ない。と言う悩みだった。

それを聞いた楓は「ちよつと違うかも知れないけど」と内心で呟いてから、話し出す。

「これは俺の持論なんだけどな、これだけは譲れないもの」を心の中に作るんだ」
僅かに沈黙が流れて、炭治郎は言葉を紡ぐ。

「……譲れないもの、ですか？例えば、どんな？」

「例えば、人々を守る誓いとか、鬼に対する怒りでもいいと思う」

楓は「取り敢えず、何でもいいんだ」と言つて言葉が続ける。

「想いを抱くことで、劇的に強くなれるみたいなことは起こらないけど。——その想いは窮地に陥った時、心の支え、折れない芯になる」

「俺の場合は、それをバネにして強くなった経験もある」と付け加え、楓は笑った。それを聞いた炭治郎は「じゃあ、楓はなにを心に刻んでいるのだろう」と気になった。

「楓さんの想いって、何なんでしょか？」

楓は「そうだなあ」と頷き、話し出す。

「俺はな、人々を護りたいという想いもあるけど、それとは別に、ある人たちの笑顔も護

りたいんだ」

「ある人の笑顔、ですか」

「まあな。でもさすがに、名前までは教えられないけどな」

そう言つて、楓は苦笑した。

でも確かに、炭治郎はそう言つた折れない心こころを一度も考えてこなかつたし、漠然に修行の反復だけを行っていた気がする。

炭治郎は、力を付けてどうするか？何をしたいか？という目的も必要なんじゃないかと思つた。

「よしつ、俺も修行を見てあげるよ」

「よ、よろしくお願いします」

そう言うのと、楓と炭治郎は立ち上がり、——想い強さを抱き、刀の柄を握り抜刀したのでつた。

ひととき

「ただいま帰りました」

そう言つて、楓と炭治郎は小屋の扉を開けると、中からは食欲を擽る匂いが流れてくる。

それを鼻にした炭治郎は喉を「ごく」と鳴らし、楓は「お、揚げ豆腐か」と嬉しそうな表情だ。

「鍛錬終わったんだ。ご飯できてるよ」

「たくさん作ったから、一杯食べてね」

真菰とカナエがそう言うと、炭治郎は「はいッ!」と頷き、表情を固くしてる。まあ確かに、いきなり美女が目に入り、ご飯をどうぞ。と言われたら当然の反応かも知れない。

炭治郎は疑問符を浮かべながら、口を開く。

「楓さんのお知り合いですか?」

「うーん、何て言えばいいんだろう?……友達?家族?恋人?お嫁さん?」

そう言つて、真菰は疑問符を浮かべる。

炭治郎は「姉弟子の真菰さんに負けないように頑張ります」と強く頷いて、次いで炭治郎は楓とカナエを見る。

「楓さんとカナエさんも、水の呼吸の使い手ですか？」

楓は、咀嚼していた揚げ豆腐を飲み込んでから口を開く。

「俺は花の呼吸だ。水の呼吸の派生だな」

そう言うてから、楓は揚げ豆腐を箸で掴み口にする。

「私も花の呼吸よ」

カナエは全集中の呼吸が僅かに使用することができるので、僅かな時間だけ花の呼吸の使用が可能だ。

呼吸の話題が出ると、最終選抜の話題になるのは必然だった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「藤が狂い咲いている山の中で、七日間生き残る、ですか」

「それが最終選別の合格内容だ。でもその試験では、何人もの受験者が挑戦し、散っていく厳しい試験でもある」

楓は、考え深いように呟く。

きつと、自身の選別時を思い返しているのだろう。

「じゃあ、この場に居る皆さんも？」

「私は何とか生き残れた、つてところかしら」

「私も合格したけど、楓が助けてくれなかったら死んじゃった。あの時は、本当に楓に感謝だよ」

「俺も何とか生き残れた感じだ」

その時「冗談はダメだよ」と、真菰が指摘し頬を膨らませる。

楓は、困ったように頷くと、口を開く。

「……まあ、俺は無傷で合格した」

炭治郎は目を丸くした。

「む、無傷で合格ですか？」

「そうだな。でも、修行の二年間は『現柱^{花柱}』に鍛えてもらい、正式な後継者になったからな。たぶん、そこが違ったんだろう」

「せ、正式な後継者ですか……」

「そ。俺はその人から、剣技も呼吸も立ち回りも挫学も個性も、全部教えてもらった」

「育手が弟子を取り、剣技や呼吸を教え、一人前の剣士として送り出すのが『後継者』だが、『正式な後継者』は育手と弟子が心をさらけ出し、衣・食・住を共にし、修行は

二人三脚で行うのだ。

——閑話休題。

楓が「ここまでする『育手』は初めて聞くだろ?」と炭治郎に問いかけると、カナエが楓の左脇腹を突く。

「もう、炭治郎君が頷くのわかってて問いかけないの」
カナエは言葉が続ける。

「炭治郎君、私が楓の育手師匠なの」

「じ、じゃあ、『現柱』って言うのは、胡蝶カナエさん?」

「今は引退してるけどね。ちなみに鬼殺隊では、花柱の名を載いてたわ。——今は私の後継者として、楓が柱の任についているわね」

「ああ。今は、俺が『桜柱』として任についてる」

炭治郎は硬直した。さすがに『元柱』花柱『現柱』桜柱がこの場に居るなんて、想定外過ぎる。

「じゃあ、真菰さんも柱?」

「ううん。私は甲隊士きのえだよ。柱の一つ下の位だね」

そう言つて、真菰は苦笑した。

よく考えて見れば、この場には鬼殺隊のほぼ最高位の人たちしか居ない。元柱である、鱗滝左近次、胡蝶カナエ。現柱、栗花落楓。甲隊士きのえ、鱗滝真菰。

なので「オレ、場違いじゃないよね」と、炭治郎が思ってしまったの当然なのかも知

れない。

「ところでお前たち、今日は蝶屋敷に帰るのか？もう遅いし、泊まっても構わないぞ」
鱗滝が、楓たち問いかけた。

「そうですね。明日は、ここから警備地区に飛びます」

「私も、朝一で出れば問題ないかなあ」

「私も大丈夫かな。でも、明日は調剤の研究があるから、早めに出る必要はあるけど」

楓、真菰、カナエと呟く。

「(……えっ!?楓さんたちって、一緒に住んでるの!?てか、年頃の男女が一つ屋根の下つて、間違えとか起こらないよね!?そ、それに、きよ、今日は真菰さんたちと一緒に。何か緊張するんだけど……)」

炭治郎は、内心で驚きと困惑を隠せない。

ともあれ、こうして鱗滝の小屋に楓たちが一泊することに決まったのだ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

お風呂をもらい、就寝の支度をして布団を敷くが、六人が眠るには詰める必要があった。

「俺は入り口で寝ようか？よく、警備中に野宿してるし」

楓は風が通らない場所ならば、眠ることは可能だ。

「楓は、私たちの間で眠れば万事解決だよ」

「もう家族のようなものだし、気にしなくていいのに」

キョトン顔の、真菰とカナエ。

「……俺男。真菰とカナエさんは女。どういう意味か解るだろ？」

真菰とカナエは「へ？わかんないよ」と首を傾げる。

いや、楓が言葉を端折り過ぎたのが原因なのかも知れないが。

すると、寝床に就いた鱗滝が、

「——楓たちはもう寝なさい。明日早いんだろう」

寝床に就いた炭治郎と禰豆子も、

「——楓さん、頑張って下さい！」

「ウー」

と言葉を発し、眠りに就いてしまった。

楓が助けを求めようとした鱗滝と炭治郎は、既に夢の中。完全に退路が断たれるのであった。

楓は、はあ。と盛大に溜息を吐き、覚悟を決めたのだった。

「……じゃあ、お邪魔するわ」

覚悟を決めた楓はのろのろと移動し、真菰とカナエの間に挟まれるように仰向けになり、布団をかけるのだった。

「……………落ち着かないんだが」

楓が目線だけで回りを見渡すと、全員が就寝中だ。しかも、真菰とカナエが左右から抱き付くというオマケ付きである。楓は「……………これ、完全に寝不足になるな」と思いながら、長い息を吐き目を閉じたのだった。

下弦の参

「三ヶ月後、ある任務」

俺は今、鬼殺隊の隊服に袖を通し腰に日輪刀を下げ、周りの木々を足場に使用し跳び去るように移動している。

それから、俺が不意に眩く。

「真菰が揚げた、揚げ豆腐を食いたい」

「ソコハ、蝶屋敷ノ皆ジヤナインダナ」

「まあな。てか、真菰が作る揚げ豆腐が別格すぎたのがいけない。あれは美味すぎる」

「……自慢力？」

俺の右肩に乗る鴉は呆れ顔である。

「違うわっ！」

俺は声を上げてから、意識を切り返る。

先日、任務に向かった鬼殺隊士十五名と音信不通になったが、その一人が満身創痍になりながらも鴉を飛ばし、産屋敷邸に報せを送ったと、任務に行く前にお館様から聞いて耳に入れたのだ。

俺が「かなり強い鬼だろうな」と呟くと、鴉が話し出す。

「オレの予想デハ、十二鬼月ガ潜在可能性ガ考エラレル」

俺は「だろうなあ」と言つて、溜息を吐く。

「……今回ノ任務ハ、何時モト異ナル筈だ。気ヲ付ケロヨ、楓」

「……わかつてるよ」

「……分カツテルナライイ」

鴉の言葉を聞いてから、俺は速度を上げて任務先に向かうのだった。

——時刻は夕刻を迎える時間帯だ。後数刻も経過すれば、鬼の活動時間である夜に突入する。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
く夜く

任務先に到着し、俺の目に入ったのは地獄絵図、と言うに相応しい悲惨な光景であった。

鬼殺隊士の屍が転がり落ちており、その隊士の殆んどが四肢を欠損している。流れた血液も土に馴染み、黒く変色していた。

「……酷いな」

俺は日輪刀を抜き、道中を歩いていく。

——その時、一人の隊士がのろのろと俺に近寄って来る。おそらく、満身創痕になりながらも産屋敷邸に鴉を飛ばした隊士で間違えないだろう。

「……桜……柱、様。救援に、駆け付けて……」

「ああ。お前の鴉のお陰でな」

「……そう、ですか。……よかった」

次の瞬間、ドスツ、と鈍い音が耳に届くと、隊士の口から血を流し前向きに倒れる。背中には、彼が所有していたと思われる日輪刀が刺されている。

「おやおや、まだ生きてたんですね。鬼殺隊士は、ゴキブリのようにしぶといです」

目線の先にいる鬼は、華奢長身で袴の上に羽織を纏っている風貌だ。だが、奴から放つ雰囲気は鋭利な刃を沸騰させた。

そして鬼の腰には、鬼殺隊士の日輪刀が四本吊り下げられている。

「……お前、鬼殺隊士を馬鹿にしすぎだ」

俺の視線に気づいたのか、鬼は腰に手をやり、刀の鞘を擦る。

「ああ、これですか。私が鬼殺隊士を殺した時に集める日輪刀ですよ」

鬼は「鬼殺隊士の日輪刀は、色々な色があつて面白いですよね」と付け加え言葉を続ける。

そして、鬼が眼球を回転させ刻まれた文字を見せつける。そこに刻まれていたのは――
 下弦の参。

「――君は柱なんですよね、桜柱は桜色の日輪刀なんですか？」

「……知りたいなら、俺を殺してみろ」

俺は刀を鞘から抜き構え、

――桜の呼吸 壹ノ型 乱舞一閃。

俺は加速して一閃を放つが、それは鬼が手にした二つの日輪刀を交差して受け止め、ガキンツと音が響き刀の鏝去り合いが起こる。

「……予想以上に速いですね、さすが柱と言った所でしょうか」

鬼は「平隊士とは格が違います」と言つて笑うが、俺も「お前も予想以上に速いんだよ」と内心で毒付く。――そう。俺は今の一閃で頸を落とすつもりでいたのだ。

「……お前に褒められても嬉しくねえよ」

俺と奴は刀を弾き距離を取り、剣技を繰り出す。

――血鬼術 千本の刃。

――桜の呼吸 貳ノ型 千本桜。

奴の背後から無数の剣が放たれ、俺が振った刀が無数の桜を成し、刃が衝突した爆風で回りに砂埃が舞う。

——血鬼術 死屍の刃。

——花の呼吸 式ノ型 御影梅。

周囲を護るように花の斬撃を放ち、四方から迫ってきていた刃を弾き飛ばすと、鬼に一瞬だけ隙ができる。

——花の呼吸 五ノ型 徒の勺薬。

俺は鬼が怯んだ一瞬を狙い、九連撃は、肩、胴、足、腕、手の甲。隙ができる部位を的確に斬り裂く。その勢いで、両手、腰に携える日輪刀を周囲に弾き飛ばそうとしたが、両手に携える日輪刀だけを弾くことができなかつた。

——閑話休題。

俺の予想では、鬼の血気術は虚空から剣を放つ類のものだろう。

血気術を発動するには、若干の隙ができてしまうので、自身の身を護る為に意地でも携える日輪刀を手放すことをしなかつたのだ。もし、日輪刀が地に落ちれば、桜の呼吸 壹ノ型 乱舞一閃”で頸を刎ねられることが解っているのだ。

「……さすが柱ですね。私の技が通用する気配がない」

鬼が言うのは、最初に繰り出した無数の剣で、鬼殺隊士を初見殺しにしていたらしい。

……でもそうか、あれの初見対応は甲隊士程の実力が伴わなければ、対応は難しいだろう。

「……勝手に言つてろ、悪鬼が」

鬼は直線的な右手に携える日輪刀で突きを放つが、俺は足に踏ん張りを入れ、下から上に捻るような斬撃、*“花の呼吸 肆ノ型 紅羽衣”*で弾き空を跳び、鬼の左手に携え振りかぶる日輪刀は *“花の呼吸 陸ノ型 渦桃”*で、空で体を捻りながら弾く。

鬼は目を丸くした、先程の攻防で殺すことができたと確信していたのだろう。——それもそのはずだ、奴の腕は伸び切っていて、間合いが柄空きだ。

俺は着地したと同時に、剣技を繰り出す。

——桜の呼吸 壺ノ型 乱舞一閃。

一閃し、鬼の頸を落とし通り過ぎると、地に、ボタ、という音が鳴る。

俺が納刀し振り向くと、鬼は頸だけの状態になり、体は灰に変えていた所だった。完全に消滅するのは時間の問題だろう。

「……さすが柱です。私は、傷一つも付けることはできませんでした」

「いや、羽織で見えていないだけで、俺の両手首は傷だらけだぞ」

俺は羽織を捲り、両腕を晒す。

「——お前の剣、見事だった」

鬼は驚愕したように目を丸くする。

あれだけ罵られたのに、俺の言葉が称賛なんて誰が想像できるだろう。

「鴉さんよ。詳しい道案内は頼んだぞ」

鴉は「了解ダ！了解ダ！」と鳴いた。

てか、現状を見ると十二鬼月の確率が高い。てことは、柱案件になるよなあ。……色々と無事に済んでくれたらいいんだけど。ともあれ、俺は那田蜘蛛山に急いだのだつた。

那田蜘蛛山

那田蜘蛛山に到着すると、凄まじい刺激臭が鼻を突く。

「……かなり臭いな」

そう呟いてから、俺は生存者を搜索する為、木々に飛び移り山の中に入って行く。

跳んでいたら微かの人の気配を感じたが、発生源はぶら下げられた白い繭の中からだ。だが、死臭が混じっていることは、全ての繭が手遅れだろう。

「(……どうか安らかに)」

俺は心中で手を合わせ呟き、先を急いだ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

俺が木々と跳んでいると、猪頭の鬼殺隊士が約二メートルを超える鬼に首を掴まれて
いる所を発見する。

——閑話休題。

猪頭の鬼殺隊士は、猪の口から鮮血を流していた。おそらく、頭を潰されるのも時間
の問題だろう。

なので俺は、跳んでいる最中で刀の柄に右掌を添え、

——桜の呼吸 壱ノ型 乱舞一閃。

一閃し、猪頭が掴まれて腕を斬り落とすと「グワアアアッ！」と雄叫びを上げ、俺は地に落ちた猪頭の鬼殺隊士を見るが、呼吸も安定しているので死んではいないだろう。

——花の呼吸 肆ノ型 紅羽衣。

俺は抜刀したついでに踏み込み、勢い良く下から上に跳びようにして花の斬撃を描き鬼の体を一刀両断すると、鬼は力尽きたように鬼は仰向けに倒れる。

その時、起き上がった猪頭の鬼殺隊士が、俺に刀を突き付け咄く。

「——オレと戦え、蝶羽織り！」

「……はい？」

思わず首を傾げてしまう。

だが、猪頭の鬼殺隊士は話し始める。

「お前は、あの十二鬼月を倒した！そのお前を倒せば、オレの方が強い！」

見るからに、猪頭の鬼殺隊士は重傷である。

なので、どうしてその結論に至ったんだ？としか言いようがない。てか、あれが十二鬼月とか弱過ぎる。それに、瞳には数字が刻まれていなかったし。

「……傷が治ったら何時でも手合わせをしてやる。——まあ、俺が生きてたらの話だが」

そう言うってから加速し、猪頭の後方に回り首筋を柔らかく叩き意識を落とす。

「後は、隠の人に頼むか」

俺はそう呟いてから納刀し、この場を小走りで後にした。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

鬼の気配がする方向に走っていたら、その先で刀を構え対峙している富岡さんとしのぶさんの姿が映る。そして、富岡さんが地に倒れている——竈門炭治郎、竈門禰豆子を護っていた。

俺は「柱に露見したか。たぶん柱合会議、いや柱合裁判だなあ」と思いながら、ザザツと急停止して富岡さんの隣に立ち抜剣し刀を構える。

「あら、楓も隊律違反に加担するんですか？富岡さんが庇っているのは、鬼、ですよ」
「そうだな。俺と富岡さんが庇っているのは鬼だ」

俺がそう言うのと、しのぶさんは「……なぜ庇うんですか」と言って青筋を浮かべる。
でも確かに、事情を知らないしのぶさんから見たら、鬼は滅殺する対象だ。

「……栗花落。ここはオレが受け持つ、炭治郎たちを任せる」

「……わかりました」

俺は納刀し、箱を背負い気絶した炭治郎を背におぶりこの場から走り出す。走って

いる途中で足を止める。これは——カナヲの気配だ。

カナヲは木々を分けて姿を現し、禰豆子が入った箱だけに向けて抜剣し振り下ろすが、俺も咄嗟に抜剣し、ガキンツと音が響き、それを受け止める。

「……兄さん。隊士が背負っている箱からは、鬼の気配がする」

「わかつてる。これには事情があるんだ」

俺は「悪い」と言ってから瞬時に移動し、気絶している炭治郎たちを安全な場所に下ろしてから元の場所に戻る。

「……どんな事情？兄さんは、鬼に慈悲をかけ過ぎ」

カナヲは後方に刀を回し、

「——私はしのぶ姉さんに、鬼を滅するように頼まれた」

——桜の呼吸 壺ノ型 乱舞一閃。

——桜の呼吸 壺ノ型 乱舞一閃。

俺は炭治郎に迫ると思われる一閃を、自身の一閃で相殺させると、ガキンツと甲高い音と共に刀の鏗競り合いになる。

そして、カナヲは眉を寄せる。

「……兄さん、私と戦うなんて正気？」

カナヲは「隊員同士の戦闘は、隊律違反になるんだよ」と言い、首を傾げる。

「……わかっている。でも、この先には通せない」

そこからは、俺とカナヲは無数の斬撃の応酬であり、隙を全く与えなかった。

——花の呼吸 五ノ型 徒の勺薬。

——花の呼吸 五ノ型 徒の勺薬。

俺とカナヲの九連撃は、互いが正確に刀を打ち合い、相殺する。

そして、お互いに決定打を与えないのが現状だ。

「……兄さん、そこをどいて」

「……断る」

俺がそう言ったら、カナヲは「……兄さんの分ならず屋！」と呟き、刀を振るう。

——桜の呼吸 弐ノ型 千本桜。

——花の呼吸 弐ノ型 御影梅。

的確に急所に振り注ぐ刃は、俺が周囲に放った花の斬撃で弾き飛ばす。

やはり経験の差が見えてきたのか、カナヲは呼吸が乱れ両肩を揺らしていた。

「……やっぱり強いね、兄さん」

「俺はカナヲの義兄だしな。簡単には負けない」

その時、鴉が空中を旋回し、口を開く。

「カアアアア！ 伝令！ 伝令！ 炭治郎、及び、鬼の禰豆子ヲ拘束！ 本部へ連レテ帰ルベシ

！」

それから、鴉が炭治郎と禰豆子の特徴を復唱していた。ともあれ、俺は日輪刀を納刀し息を吐く。取り敢えず、この場は収まったと見てもいいだろう。

だが、鴉が言葉をつけ加えた。

「加エテ、水柱、桜柱モ連行セヨ！カアアアア！」

カナヲも納刀し、口を開く。

「……兄さん。命令により、ご同行を」

「……わかつてる」

俺は「抵抗の意思ない」と言つて、炭治郎を背負いカナヲに連行されて行つたのだつた。

柱合裁判

——柱合裁判。

それは、お館様編成と柱たちが集合し、裁判に掛けられた者の審議を問うものだ。

裁判に掛けられていいる竈門炭治郎は、鬼を連れながら鬼殺を行っていたなど、鬼殺隊の名を穢していると同義であり、重大な隊律違反と言うに他ならない。

当然、柱たちからの反応は厳しかった。

「裁判の必要などないだろう！鬼を庇うなど明らかな隊律違反！我らのみで対処可能！鬼もろとも斬首する！」

「ならばオレが派手に頸を斬つてやろう。誰よりも派手な血飛沫を見せてやるぜ。もう派手派手だ」

この場で処刑を主張するのは、炎柱・煉獄杏寿郎。音柱・宇髄天元。

「しかし、柱が二人も隊律違反をすることはな。大体、拘束もしてない様にオレは頭痛がしてくるんだが、そんな柱二人はどう処分するどう責任を取らせるどんな目に合わせてやろうか」

蛇柱・伊黒小芭内が木の枝の上に寝転びながら、ネチネチと毒を吐く。また、岩柱・悲

鳴嶼行冥も処刑に賛成。

「大人しくついて着てくれましたし、処罰は後で考えましょう。それよりも私は、坊やの方から話を聞きたいですよ」

蟲柱・胡蝶しのぶがそう呟き、取り敢えず話を聞く姿勢だ。

炭治郎は、うつ伏せで倒れながら言葉を発しようとするが、口の中が乾いて言葉が詰まってしまう。

「水を飲んだ方がいいですね」

そう言うてからのしのぶが片膝を突き、炭治郎の口許に小さな瓢箪で鎮痛薬が入れ混じった水を差し出すと、炭治郎はそれを啜ってから口を開く。

「オレの妹は鬼になりました。でも、人は喰ったことは無いんです！今までも、これから、人を傷つけることは絶対にしません！」

炭治郎は強く意見する。

「くだらない妄言を吐き散らすな。そもそも身内なら庇って当たり前、言うこと全て信用できない、オレは信用しない」

「あああ……鬼に取り憑かれているのだ。早くこの哀れな子供を殺して解き放つてあげよう」

だが、小芭内、行冥は否定の意思だ。

「聞いて下さい！ 禰豆子が鬼になったのは二年以上前のことで、その間、禰豆子は人を喰ったりしていない！」

「話が地味に回ってるぞアホが、人を喰ってないことを、これからも喰わないこと。口先ではなく、ド派手に証明して見せろ」

音柱・宇髄天元がそう呟き、恋柱・甘露寺蜜璃は『お館様の意見を聞いてから』と主張し、霞柱・時透無一郎は無関心だ。

反論を述べるにしても、桜柱・栗花落楓。水柱・富岡義勇。彼ら言葉では、強要力は無しに等しいだろう。彼らは、柱の任に就いているのに隊律違反を犯したのだから。

「妹はオレと一緒に戦えます！ 鬼殺隊として人を守る為に戦えるんです！ だから——」
「オイオイ、何だか面白いことになってやがるなア」

隠の制止を無視して、禰豆子が入った箱を片手に現れたのは、風柱・不死川実弥だ。
「鬼を連れた馬鹿隊士そいつかい。一体全体どういうつもりだア」

実弥は殺気を露にし、日輪刀に手を掛け抜き放つ。

「鬼が何だつて坊主ウ。鬼殺隊として人を守る為に戦えるウ？ そんなことはなア、ありえねエんだよ馬鹿がア！」

実弥は禰豆子が入った箱を貫こうとするが——その直後、ガキンツ、と凄まじい甲高い金属音が響き、抜剣し割って入った楓がそれを受け止めていた。

「……栗花落イ。貴様、隊律違反を犯したのに鬼を庇うってかア——さすがはア、異端の柱筆頭だなア」

——異端の柱。

そう。楓は鬼を滅する時、ある鬼を除き、鬼に慈悲を掛けているからである。

鬼は人を喰らう生き物であり、容赦なく滅するのが鬼殺隊の心理。だからこそ実弥は、楓の鬼殺の仕方に納得をしていないのだ。

「……不死川さん、勝手はしないで下さい。この場は、お館様の意見が最優先です」

——お館様。その言葉聞いて実弥は眉を寄せ「チツ！」と苛立ちを覚える。

確かに、お館様の了承も無く、独断で違反隊士を罰するのは問題になる。なので、楓と実弥は納刀しこの場を収めた。

「お館様のお成りです！」

産屋敷耀哉の到着を告げられると、柱たちはその場で片膝を突け、頭を下げる。

炭治郎は「どういうことだ？」と疑問符を浮かべていたので、禰豆子の箱を奪還した楓が、炭治郎の隣で「頭を下げて、炭治郎」と優しく諭すと、炭治郎は急いで片膝を突き頭を下げる。

「よく来たね、私の可愛い剣士たち。今日はとてもいい天気だね。空は青いのかな？」

襖を開け到着した耀哉がそう眩き、双子の手を取り歩む。

「顔ぶれが変わらずに半年に一度の柱合会議を迎えられたこと嬉しく思うよ」

耀哉がそう呟き、双子に手を貸してもらって座布団の上に座る。

そうして始まった柱合裁判だが、やはりと言うべきか穏やかと言えるものでは無かった。

炭治郎・禰豆子を容認する耀哉に、行冥、小芭内、杏寿郎、天元、実弥が反対意見を述べる。

「では、手紙を」

「はい」

そう言つて、双子の一人が手紙を読み始める。

「こちらの手紙は、元柱である鱗滝左近次様から頂いたものです。一部抜粋して読み上げます」

その内容は、二年間の歳月が経過しても禰豆子は人を喰つてないと言う内容だ。

そして、次の内容に柱たちに驚愕が走る――、

「――もし禰豆子が人に襲いかかった場合は、竈門炭治郎、鱗滝左近次、水柱・富岡義勇、同門の鱗滝真菰、元花柱・胡蝶カナエ、桜柱・栗花落楓が腹を切つてお詫び致します」

だが、反対意見を提示したのは、風柱・不死川実弥だ。

「切腹するから何だと言うのか。死にたいなら勝手に死に腐れよ。何の保証にもなりは

しません」

「不死川の言う通りです。人を喰い殺せば取り返しがつかない！殺された人は戻らない！」

炎柱・煉獄杏寿郎が同意する。

それに対して、耀哉が口を開く。

「確かにそうだね。でも、人を襲わないと言う保証ができない、証明ができない」

耀哉は手紙を持ち、言葉が続ける。

「それに、禰豆子が二年以上もの間人を喰わずにいるという事実があり、禰豆子の為に六人の命が懸けられている。これを否定する為には、否定する側もそれ以上のものを差し出さねばならない」

実弥と杏寿郎は押し黙ってしまった。

更に、炭治郎が無惨と遭遇した事実も告げ、炭治郎が無惨へ繋がる手掛かりになるかも知れないという考えを見せた。

「……わかりません、お館様。人間ならば生かしておいてもいいが、鬼は駄目です！承知できない！」

実弥は日輪刀を抜き放ち、自身の左腕の皮膚を切る。

「お館様……！証明しますよ、オレが。鬼という者の醜さを！」

実弥は楓の傍にあつた禰豆子が入る箱を奪取し、それを転がした上に自身の血を垂らし落とす。

——実弥は稀血であり、鬼を狂酔させることができる程血が特殊なのだ。

「オイ鬼！飯の時間だぞ、喰らいつけ！」

「不死川、日なたでは駄目だ。日陰に行かなければ、鬼は出て来ない」

小芭内の言葉を聞き、実弥は箱を掴む。

「——お館様、失礼仕る」

実弥は箱を持ち屋敷内の日陰に行き、箱を落とし何回か箱ごと禰豆子を突き刺す。強引に扉を開けると、中からは額に汗を吹かせ涎を流しながら禰豆子が現れ、実弥の腕から流れる血を見ている。

炭治郎は動こうとするが、

「——炭治郎。柱たちに認めてもらう為には、禰豆子が人を襲わないかの証明が必要だ。だから、この場は抑えろ」

「——ッ?!?!…わ、わかりました」

炭治郎は、楓の言葉を聞きその場で踏み止まる。内心で「禰豆子！耐えてくれ！」と強く想いながら。

その炭治郎の想いが届いたように、禰豆子はそっぽを向き、実弥の血を拒否。——こ

うして禰豆子は、人を襲わないことの証明が成されたのだ。

だが、柱たちが認めても、隊士の中には鬼の存在を良しとしない者も居るだろう。

なので、耀哉は炭治郎に「十二鬼月を倒しておいで、そうすれば炭治郎の言葉の意味も変わると」言つて、それを聞いた炭治郎は「禰豆子と共に鬼舞辻無惨を倒し、悲しみの連鎖を断ち切る！」と豪語したが、耀哉に「今は無理だから、まずは十二鬼月を倒してからだね」と言われて恥ずかしさで顔を赤く染めてしまつていた。

「しかし意外だね。カナエと真菰が、禰豆子と接点があつたとは」

耀哉の問いは、楓に向けられたものだ。

「非番の日に出掛けたことがありまして、その時に接触し食を囲んだんです」

楓の言葉に、ザワザワと声が上がった。

それもそうだろう、鬼と食を囲むなど鬼殺隊ではあり得ないことなのだから。

「……なるほど。その時の接触で、禰豆子が人を喰わないことは確認済みだったんだね」

「そんな所です」

この時しのぶが「切腹の話と言ひ、今の話は聞いてないんですけど、楓」と青筋を浮かべ、楓は「話すのを忘れてた」と冷汗を流すのだった。

ともあれ、耀哉が柱たちの強さを炭治郎に諭すと、柱合裁判が終わりを迎えた。

「でしたら、竈門君たちは私たちの屋敷でお預かりしましょう。いいですよね、楓」

「いいんじゃないか。俺も話したいことはあるし」

しのぶは頷き両手で手を叩き隠を呼ぶと、隠たちは炭治郎と禰豆子を連れてこの場を去るが、炭治郎は逆らうように戻って来て実弥に頭突きをしたと言っていた。

でもそれは、無一郎の手痛い一撃を受けてから、再び隠に連れて行かれ炭治郎の姿が見えなくなつた所で、本筋である柱合会議が行われたのだつた。

再会と運命

柱合裁判を終えて、処分を免れた炭治郎と禰豆子は、治療の為蝶屋敷に運ばれていた。そこには、那田蜘蛛山で共に戦った善逸と伊之助も入院しており、三人は感動の再会を遂げる。

「善逸—」

炭治郎が声を上げると、善逸は「ギャー—っ！（汚い音声）」と声を上げる。

「大丈夫か!? 怪我したのか!? 山に入つて来てくれたんだな……!?」

「た、炭治郎……」

そう言つて善逸は、ベットの横に歩み寄つた、炭治郎を背負っている隠の人に抱きつく。

……まあ、鼻水を垂らすオマケ付きだが。

「炭治郎、聞いてくれよ—っ。臭い蜘蛛に刺されるし、毒で痛い痛かつたんだよ—っ。さつきから、女の子にガミガミ怒られるし最悪だよ—っ」

すると、アオイがギロツと善逸を睨みつけた。

炭治郎は「善逸、静かにしような」と呟き、苦笑する。

「伊之助は？村田さんは見なかったか？」

隠の人が善逸に「ちよつと離れるよ……オレ関係ない……」と言っているが、気にせず話しを続ける炭治郎と善逸。

「村田つて人は知らんけど、伊之助なら隣で寝てるよ」

「あつホントだ！思いつ切りいた！気付かなかった」

炭治郎は善逸の隣のベットで寝ている伊之助を見て眩き、隠の人の背から乱雑に下り、猪之助が寝ているベットの横で両膝を落としベットのの上に手を置く。

「伊之助！無事でよかった……！ごめんな、助けに行けなくて……！」

「……イイヨ、気ニシナイデ」

そう言った伊之助の声はガラガラだ。

善逸の話によると、伊之助の喉は潰れていて、最後は自身の大声が引き金になったとか。ともあれ、善逸は隠の人から離れた。

善逸は炭治郎を見て、

「それより炭治郎は見たっ!？」

善逸には、蝶屋敷に運ばれて喜ばしいことがある。

「蝶屋敷の三大美人っ！」

善逸の言う蝶屋敷の三大美人とは、——鱗滝真菰。——胡蝶カナエ。——胡蝶しの

ぶ。のことである。

「でだ！オレが一番推してるのは、胡蝶カナエさんっ！あの柔らかい笑顔に、絹のような肌っ！綺麗な指っ！あ———！（汚い音声）マジであの人女神だわ！オレ、ここに入院できて幸せっ！結婚したいねっ！うん！」

このように、熱く語る善逸。

そして、善逸は体をくねくねさせた。

「いやね！真菰さんとしてのぶさんも、もちろん可愛いよ！屋敷で助けたくれた時、ホント天使かと錯覚したもん！でもさあ、最後は自分の好みってやつが勝ちちゃってさ！ホントに天使と女神って居るんだな！」

善逸に振り向いていた炭治郎も「そうなのかなあ」と頷いた。

そして、あの日の出来事を思い出した炭治郎から、善逸にとつては爆弾発言が落とされる。

「でも善逸、胡蝶カナエさんを推すのはいいけど、あの方は———人妻、だと思っぞ」
善逸の方向に振り向いた炭治郎がそう呟き、「そもそも、女性を邪の気持ちで見たらダメぞ」と、優しく指摘する。

善逸は「はい？」というように、口をあんどりと開ける。

「え!?マジで!?炭治郎、どこでその情報を聞いたんだッ!？」

「正確な情報とは言い切れないんだけど、オレは胡蝶カナエさんの旦那さんに会ってる」
「会ってるの炭治郎!? 誰っ!? 誰なんだっ!？」

善逸は、炭治郎に迫る勢いで呟く。

「オレの予想では——桜柱・栗花落楓さん」

炭治郎が「それに、楓さんはカナエさんの正式な後継者なんだって」と、善逸に止めを刺す。

そう。正式な後継者とは、弟子と育手の親密度が全く違うのだ。楓とカナエには、切っても切れない『絆』が存在している。

「は——ッ! (汚い音声) 柱とか勝ち目ないじゃんっ! だっって柱とか化け物じゃんっ!」

善逸は、ハッ、と何かを思い出す。

「柱っ聞いたらさ、炭治郎。お前、裁判に掛けられたんだろ? よく無事だったな」

「ああ。師匠、兄弟子、カナエさん、楓さん、真菰さんがオレたちのこと庇ってくれて、どうにか無事だったんだ」

炭治郎はあの時を思い出し、泣きそうになっってしまう。

彌豆子の為に、命をかけてくれるとは思っていなかったのだ。同時に、自分たちの不甲斐無さを痛感してしまった。

「えっと、炭治郎の同期だっけ？」

「は、はい！我妻善逸！雷の呼吸使いです！」

善逸は、表情を硬くして呟く。

でも楓は「炭治郎もそうだけど、年も近いんだし何時もの口調でいいんだけどなあ」と思いつつ苦笑する。

ともあれ、楓も自己紹介をする。

「俺は栗花落楓。花の呼吸使いで、鬼殺隊の桜柱の任に就いてる。よろしくな、善逸」

「は、はい！よろしくお願ひします！」

善逸は「あの〜」と言いにくくそうに、気になることを楓に聞く。

「胡蝶カナエさんの旦那さんって、楓さんなんですか？」

その時、炭治郎が追撃に掛かる。

「確か、真菰さんですよね？」

「まあな。カナエさんと真菰は俺の奥さんだ。一応、鬼殺隊では非公認で通してるから他言無用な」

といつても、蝶屋敷の住人には露見しているんだが。

そして楓たちは、これが運命を動かす出会いになるとは思ってもいなかった。

家族

　蝶屋敷、居間（台所）

「できたぞー。持って行つてくれ」

「皆、たくさん食べてね」

「どんどんおかわりしてね」

　そう呟くのは、楓、カナエ、真菰だ。

　きよたちが「はいっ！わかりましたっ！」と返事をし、お盆に料理を乗せテーブル席に運んで行く。

「美味しいですっ！」

「柱の人たちからご飯を頂けるなんて光栄ですっ！」

　テーブル席に座り、運ばれた食事を箸で取り、白飯とおかず焼きシヤケを咀嚼し飲み込んだ炭治郎、善逸が嬉しそうに呟く。ちなみに、伊之助は喉が潰れてしまっているの、病室のベツトの上だ。

「……楓様、真菰様、カナエ様。夜食は私たちが作りましたのに」

　炭治郎の隣の席に座り、ご飯を口にしていたアオイがそう言った。

そうなのだ、アオイが夜食を作ろうと居間に入ったら、既に準備が進められていたのだ。

確かに、蝶屋敷では手の空いた人がご飯を作るという習慣があるが、階級の高い人たちに任せるなんて恐れ多かつた。

「いいんですよ、アオイ。姉さんたちは、好きで台所に立っているんですから」

「……兄さんと姉さんたちは仲良し、だもんね」

アオイの隣に座るしのぶと、その隣に座るカナヲがそう言った。

ともあれ、楓たちは「新婚生活の代わりでもある」と言つて、台所に立っている時が多々あつたりする。

その成果もあるのか、楓たちの料理の味は、料亭と遜色ない美味しさだ。

「そうだな。それに俺たちは忙しくて時間が取れない日が多々あるから、集まった時は共同で作業したくてな」

でも楓は、最初の頃は失敗が多くて、カナエと真菰に料理を教わりながら作っていたが。

その間しのぶたちの「イチヤイチャするなら、お部屋でお願いします」と、指摘があつたのは言うまでも無いだろう。

ともあれ、楓たちも席に着き、目の前にある箸を取つて「いただきます」と音頭を取つ

のだ。それを破る隊士は、きつい説教が待っていたりする。現在その対象は、楓でもあつたりするんだが。

そして、炭治郎と善逸は目を丸くする。

「(……嘘でしょ。満身創痍になつても、オレは『下弦の伍』を倒せなかつたのに。富岡さんもそうだけど、柱は強さの次元が違うよなあ)」

「(……十二鬼月は単独で滅つするつて、柱つて化け物の集まりだなあ)」

このようにして夜食を摂り終わり、各自で食器を片付け部屋に戻るのだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

く蝶屋敷 とある一室く

楓は現在、対面で正座をしながら座るカナエに説教を受けていた。ちなみに、楓たちは着物姿である。

「楓。私たちに心配をかけないようにするのは分かるわ。でも、そういう傷はちゃんと治療をしないと、化膿する可能性も捨てきれないの」

カナエは「その場の応急措置だけじゃダメなのよ」と呟いてから溜息を吐き、楓は「(……)めんなさい」と言つて、肩を小さくしている。

近場で足を楽にして座り、説教を見ていた真菰は苦笑してから助け舟を出す。

「その辺でいいんじゃない、カナエ。楓、反省してるようだし」

カナエは頷き「次は楓、怪我はちゃんと見せるように」と、釘を刺してこの場を収めた。

そして、必然のように柱合裁判の話になった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「彌豆子、容認されてよかったわね」

「私たちは柱合裁判に参加できなかったから、少し心配でもあったんだ」

カナエ、真菰はそう呟く。

まあ確かに、判決を待つだけ。という立場では、不安に駆られるのは当然だろう。

「そうだよな。でも、巧く事が運んでよかったよ。皆のお陰だな」

楓が言う通り、個人だけの力では成し遂げられなかった事項だったのだ。

ともあれ、楓は今後のことに話を切り替える。

「風呂まで時間があるし、ちよつと散歩しないか」

「賛成っ」

「気分転換にいいわね」

楓たちは帯剣してから部屋から出て、廊下を歩き、玄関で靴に履き替えてから外に出

る。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

楓たちが到着した場所は、蝶屋敷から僅かに離れた丘の上だ。——この場所は、楓とカナエが鍛錬で使用した場所でもある。そして、この場所から見える月は綺麗に輝いていた。

「こんな場所があつたんだ。私、初めて知つたよ」

輝く月を見ながら、真菰が嬉しそうに呟く。

「俺とカナエさんも、偶々見つけたって感じだからなあ」

楓とカナエは鍛錬終了時、この場でよく月明かりを見たものだ。

「そうね。——それに、この場で鍛錬していた弟子が『柱』に就任できるとは思つていなかったわ」

カナエは、考え深く呟く。

そう。楓とカナエはこの場所で『正式の後継者』としての儀式も行ったのだから。

すると、真菰が首を傾げた。

「そんな特別な場所、私に教えてよかつたの?」

「構わない。真菰はお嫁さんであり家族、だろ」

楓が言うそれは、カナエも同じ気持ちだ。

そして楓たちは、この時間を大切にしようとして心に仕舞った。鬼殺隊に籍を置いている限り、何時自身の灯火^命が消えてもおかしくないからだ。

ちなみに、前線から離れたカナエにも言えることだ。

彼女の剣技^柱の強さ、僅かな時間〃全集中の呼吸〃の使用が可能だと言うことは、小さな任務なら舞い込む可能性も捨て切れないからだ。

「月を眺めていると、この世に鬼が存在するなんて考えられないわね」

「そうだな」

「うん、そうだね」

カナエの問いに、楓と真菰は頷いた。

月を眺め数分が経過し「じゃあ、帰るか」と楓が言って、蝶屋敷に帰ることになった時、真菰が楓にとっては爆弾発言を落とす。

「お風呂は三人で入ろうか。家族、なんだし」

「ふふ。私は構わないけど」

真菰とカナエに見られた楓は、顔を真っ赤に染めた。

「……………いや、俺の理性が持たないから無理だな」

楓は、恥ずかしさを悟られないように呟くのだった。まあ、顔を真っ赤に染めていた

ので、無意味だったのかも知れないが。

——閑話休題。

楓たちは横一列に歩き、楽しく談笑しながら蝶屋敷に戻るのだった。

継子

警備が終わり、楓が早朝に蝶屋敷に帰還すると道場の方で物音がした。

楓が顔を覗かせると、額に汗を滲ませ、カナヲが真剣で素振りをしていた。

「……に、兄さん。お帰りなさい」

カナヲは驚いた顔をして、真剣を後方に回し隠す。

「ただいま。カナヲ、一人で鍛錬か？」

楓が「炭治郎たちは一緒じゃないのか？」と問いかけると、カナヲは恥ずかしそうに顔を俯けた。

どうやら、炭治郎たちには隠れて鍛錬をしていたらしい。

「……えつと、皆と鍛錬するのは恥ずかしくて」

「やつぱりそうか」と内心で頷く楓。

だから楓は「じゃあ」と提案する。

「俺もこれから待機だし、一緒に鍛錬するか」

楓とカナヲは同系統の呼吸を使用しているし、剣技の師はカナエだ。

お互いに共通する物があると思うので、相手としては適任だろう。

「……うん」

楓は、靴を脱いでからその場で一礼し道場に上がり、カナヲを対面に立ち、帯剣していた真剣を抜き構える。

次いでカナヲも構え、お互いが加速し刀を打ち付け刀の鏝競り合い。力量が伴えば、これだけで相手の強さが解ってしまうのだ。

「強くなったな、カナヲ」

カナヲの力量は、那田蜘蛛山で刀を合わせた時よりも増している。

だがカナヲは、「うんん」と頭を左右に揺らす。

「……まだ、兄さんや姉さんたちには程遠いよ」

「いや、カナヲは十分強いぞ」

まあ確かに、元柱、現柱、準柱、と比べてしまつては、カナヲがそう思つてしまつても仕方がないかも知れない。

その前に、柱を基準にするのは些か無謀な気もするが。

——閑話休題。

そして、無数の剣撃を打ち合う、楓とカナヲ。

刀を弾き間合いを取ると、型を繰り返す。

——桜の呼吸 壺ノ型 乱舞一閃。

——桜の呼吸 壱ノ型 乱舞一閃。

だが、加速して繰り出した一閃は刀の鏝競り合いになる。

——花の呼吸 肆ノ型 紅花衣。

楓は刀を弾きその勢いで体を捻り、下から上へ刀を振るう。

——花の呼吸 弐ノ型 御影梅。

カナヲは周囲に自身を守る斬撃を放ち、楓の斬撃を受け止めると、ガキンツ、と甲高い金属音が響き、楓とカナヲは距離を取る。

「カナヲ、型を使っていく内に無駄な動きが混じってる。——鋭く、速く、そして体感を意識して剣技を繰り出すんだ」

「……は、はいっ！」

楓とカナヲは道場の中を縦横無尽に動き、刀の合わせ金属音を響かせる。

この攻防も、見る人が見れば高水準な剣技だ。

——花の呼吸 五ノ型 徒の勺薬。

——花の呼吸 弐ノ型 御影梅。

カナヲが高速の九連撃を、腕、足、手の甲、と動きを止めることが出来る部位に放つが、楓は周囲に花の斬撃を放ち、九連撃を弾き落とす。

だが先程とは違い、カナヲの無駄な動きが無くなり、剣技には鋭さが増している。

「その感覚を忘れるな。後、もし『徒の勺薬』から『乱舞一閃』に持ち込む場合は、踏み込みを忘れるなよ。これがあると無いとでは技の繋ぎがだいぶ違ってくる」

「……………う、うんっ！」

楓の言葉に、カナヲは嬉しそうに頷いた。

ともあれ、楓が現在の刻時間を確認すると、約一時間剣を交えていた。なので楓が「終わりにするか」と言うと、カナヲが「……………うん」と返答し、納刀する。

「そういえば、炭治郎たちの機能回復訓練の進行状況はどうだ？」

「……………今、機能回復訓練に参加してるのは、炭治郎だけになってる。善逸と伊之助は不貞腐れて不参加」

楓は「善逸と伊之助は、カナヲの強さに打ちのめされたんだろうなあ」と内心で呟く。ちなみに、現在のカナヲの力量は、甲格きのえの実力と見ていいだろう。

でも、炭治郎たちが『全集中・常中』を会得出来れば、今の状況をから抜け出せる切っ掛けになるはずだ。

「そうか。でも、真菰たちが上手く焚き付けるだろ」

きつと、真菰たちなら上手いこと誘導し、善逸と伊之助のやる気を引き出すはずだ。だから楓は、カナヲに指示を送る。

「カナヲ、機能回復訓練で絶対手を抜くなよ。——カナヲもその訓練の中で、自分の長所

を磨き、短所を克服するんだ」

「時間は有効活用しないとな」と言つて、楓は笑う。

カナヲは頷き、

「……任せて兄さん。私、絶対に負けないから」

カナヲの瞳に、メラメラと炎が見えるのは気のせいだろうか。

楓はぎこちなく「そ、そうか」と頷き、内心で「……もしかしたら、炭治郎たちは一勝も上げることとはできないかもな」と、思うのだった。

「……ところで、兄さんは継子をとらないの？」

カナヲが言う継子とは、柱が直接修行をつけ、自身の後継となる弟子を育成する制度だ。

その稽古は厳しい物ばかりなので、逃げ出す隊士が後を絶えない。そして楓は、柱に就任してから一度も継子を取った経験が無い。

「……継子かあ」

楓は深く呟く。

それに継子は、柱が見込みのある隊士を直接選別する。という仮定もあるのだ。

カナヲはもじもじと体を動かし、

「……わ、私、桜柱の継子に立候補したいんだけど、ダメかなあ」

確かに、カナヲの呼吸は楓と同系統であり、剣技の力量も申し分ない。——継子の件は満たしていると見ていいだろう。

「ダメじゃない、こっちからお願ひするよ。——でも俺は、柱の任で教える時間が取れないかも知れない。それでも大丈夫か？」

「……う、うん。大丈夫だよ、兄さん」

だが、楓が不在の場合でも、蝶屋敷にはカナエが居るので指導を受けることは可能である。ある意味カナヲは、楓とカナエの継子、とも言える。

こうして楓の継子は、義妹のカナヲに決定したのだった。

無限列車

無限列車

楓がカナヲを継子に取ってから数日が経過し、現在楓は、とある任務に赴いていた。

その任務とは「無限列車」と呼ばれる汽車で、短期間の内に四十人以上の行方不明者が出ており、尚且つ、「無限列車」の調査に当たっていた数人の鬼殺隊士の消息も絶つた、という内容だ。

そして、この任務に当たっているのは、楓だけではないのだ。

「うまいーうまいーうまいー！」

ある人物の手に握られているのは箸であり、駅弁の食材を一口食べる毎に、うまい！と威勢良く告げる。ちなみに、目の前に積まれた駅弁の数が半端じゃない。

その人物の隣に座る楓が、持参した残りのおにぎりを口に入れ咀嚼し、飲み込んでから口を開く。

「煉獄さん。よく食いますね」

楓が言った、煉獄。とは、炎柱・煉獄杏寿郎のことである。

「うむー腹が減っては戦ができないと、いししえ古から言われているからな！栗花落はそれだけ

で足りるのか!?もつと腹を満たさないと、力が出ないぞ!」

「いや、俺はこれだけで十分です。食べ過ぎたら体が重くなってしまうすしね」

杏寿郎は「そうなのか!」と呟くと、再び駅弁を食すのを再開する。

その時、楓が数週間前に目にした一行が目映る。——竈門炭治郎、嘴平伊之助、我妻善逸だ。

こちらに歩み寄り、先頭を立つ炭治郎は「楓さんと、煉獄さんですよ?」と言つて、確認をする。

「炭治郎。煉獄さんが駅弁を食べ終わるまで、話は待つてくれ」

楓がそう言うと、炭治郎は「わ、わかりました」と頷く。

なので、炭治郎が杏寿郎の隣に、伊之助と善逸はその横の席に腰を下ろし、背に隠していた刀を取り出し座席の下に隠す。

駅弁を完食した杏寿郎が、パチン、と勢い良く手を合わせてから「ごちそうさま!」と呟き、空になった駅弁は少ししてやって来た女性販売員の手のよつて回収されて行った。

「さて、溝口少年!オレに何用か!」

「いえ、オレは竈門です。実は、炎柱の煉獄さんにお聞きしたいことがあつて」

炭治郎が杏寿郎に尋ねたかったのは、竈門家に代々受け継がれている「ヒノカミ神楽

“ のことだ。

“ ヒノカミ神楽” は、なぜ鬼殺の呼吸として竈門家に伝わっていたのか、そして何の呼吸なのか、手掛かりだけでも掴みかけた。

そこで、まず炭治郎が相談したのは、蟲柱・胡蝶しのぶだった。だが、彼女は眉を下げ「詳しくはわからないの」と言う回答だった。ただ一つわかつていることは、火の呼吸というものは存在しない。でも、“火”は無いが“炎”の呼吸は存在とのこと。

ならば、炎の呼吸の使い手に聞けば何か解るのでは。ということになり、胡蝶しのぶが煉獄杏寿郎に連絡をつけて貰ったのだ。これが、炭治郎が“無限列車”に赴いた経緯だ。

杏寿郎は、炭治郎の話を相槌を打って聞いていたが、聞き終えると「うむ、そういうことか！」力強く頷き、

「だが知らん！ “ヒノカミ神楽” と言う言葉も初耳だ！ 竈門少年が父から受け継いだ神楽を戦いに活かしたのは実にめでたいが、この話はこれでお終いだな！」

炭治郎は「ええ、もう少し何か……」と慌てていたが、杏寿郎は別の話題に話を切り替えていく。

「炎の呼吸は歴史が古い。そして、炎と水の剣士はどの時代も必ず柱に入っていた。――炎・水・風・岩・雷が基本の呼吸だ。他の呼吸はそれらから枝分かれして出来たもの。」

良い例が、栗花落の桜の呼吸だな」

杏寿郎は「栗花落は、『花』から『桜』に派生させるとは大した者だ！」と言って、大きく笑った。

「竈門少年、君の刀は何色だ？」

「えっと、オレの刀は黒刀です」

「黒刀か！それはきついな！」

「きついんですか？」

「うむ！黒刀の剣士が柱になったのを見たことがない！更には、どの系統の呼吸を極まればいいのか解らないと聞く！」

炭治郎は「そうなのか……」と肩を落とすと同時に、ガタンと地面が揺れ、列車が動き出す。

「だが、オレが鍛えてやろう！竈門少年、オレの継子になるといい！面倒を見てやろう！」

炭治郎は内心で「面倒見が良い人なんだなあ」と呟く。

ともあれ、杏寿郎は楓の方を向く。

「そういえば、栗花落は継子を取ったそうじゃないか！どんな人物なんだ？」

炭治郎、善逸は「楓さんの継子、凄く気になる」と内心で呟く。

楓は、義妹を思い浮かべながら、口を開く。

「基本は無口ですが、実力は確かです」

「ふむ。では、呼吸は花の呼吸か？」

「そうですね、花と桜です」

楓が「俺の剣技はほぼ模倣できてますよ」と呟くと、炭治郎たち（伊之助は除く）は目を丸くする。

楓の剣技をほぼ模倣が出来ると言うことは、既に実力が柱に近い。ということでもあるからだ。

「紋逸！オレ外に出て走るから！どっちが速いか競争する！」

「いや、危険だつて！馬鹿にも程があるだろ！」

炭治郎、杏寿郎、楓が横の席を見る。

そして、善逸が伊之助の頭を叩くも、伊之助には効果がない。

「危険だぞ！いつ鬼が出て来るかわからないんだ！」

杏寿郎がそう言ったら、善逸が「——え？」と呟き、顔を青くした。

伊之助も先程の興奮を抑え、善逸と同じく杏寿郎を見る。

「……嘘でしょ、鬼が出るんですかこの汽車!?!」

「出る！」

「出んのかい！嫌ア——ツ！鬼の所に移動してるんじゃないなくて、ここに出るの嫌ア——ッ！オレ、降りる！」

「短期間の内に、この汽車で四十人以上の人が行方不明になつてゐる！数名の鬼殺隊員を送り込んだが、全員消息を絶つた！だから、柱であるオレと栗花落が来た！」

「はア——ッ！なるほどね！降ります！」

善逸は、恐怖から涙を流し「柱が二人も派遣とか、絶対十二鬼月案件だよね——ツ！」と、内心でも叫び散らす。

そこへふらりと車掌の男が現れ、杏寿郎、楓は己の切符を差し出した。

「切符……拝見……致します」

炭治郎は見慣れない光景に首を傾げた。

「何ですか？」

「車掌さんが、切符を確認して切り込みを入れてくれるんだ」

丁寧な楓の説明に、炭治郎は楓たちに習うように切符を差し出した所で、匂いで何かを察する。

切符からは、何だか嫌な匂いがしたのだ。だが、切符は切り込みが入られる。善逸と伊之助も同じように入れられた所で、この車両での切符の確認作業は終了した。

「……拝見しました」

車掌の言葉を聞く者は居ない。

——そう、車両に居た全ての人間が眠りに就いてしまったのだから。車掌はそれを確認してから、次の車両へ移動して行った。

信じる心

楓が瞳を開けると、ある家の門の前に立ち尽くしてした。

「……俺の家、か？」

楓の眩きが、風と共に消え去っていく。

そう。楓が目にしたのは——楓が以前、両親と暮らしていた家だったのだ。

そして次の瞬間、楓は目を丸くする。

「——ほら楓、早くお家に入りなさい。風邪を引いてしまうわよ」

そう言ったのは、楓が幼い時に町の流行り病で亡くなった母だ。——そう。母が家の

玄関の扉の前に立って、こちらを向き手を振っていたのだ。

母の隣に居る父も、

「楓。今日は、母さんの揚げ豆腐らしいぞ」

楓の父は、笑みを浮かべてそう言った。——その笑顔は、楓の笑みと瓜二つだ。

楓は「そうか」と納得した。楓の両親は既に他界している筈だし、楓本人は、この町
為に身売りをされているのだ。——だからこれは、夢だと。

でも、脱出方法は？ 血気術だとすれば、日の光を浴びるのが手っ取り早いのだが、こ



先頭車両に到着すると、先頭の車両の上に佇んでいた魘夢は気安く声を掛ける。

「あれえ、起きたの。おはよう、まだ寝てて良かったのに」

ひらひらと手を振る魘夢の姿に、炭治郎が眉を寄せ、楓が魘夢に話し掛ける。

「……なぜお前は、関係の無い人たちを巻き込んだ？」

「聞いてないの？あの子たちはもう先がない。だから、オレが夢を見せる約束をしたんだ」

「……それから、精神を破壊してから喰う、ということか」

魘夢は「そうそう、夢心地だろう」と笑う。

それを聞いた炭治郎は、青筋を浮かべ日輪刀を抜く。

「お前！人の想いに漬け込むな！」

——水の呼吸 拾ノ型 生々流転。

炭治郎の周りに青き龍の姿が漂うようになり、炭治郎は走り出す。

それは勢いを付けると大きくなり、魘夢に牙を向ける。

「気が早いなあ」

魘夢は、炭治郎に向けて左手の甲を差し出す。

——血気術 強制昏倒催眠の囁き。

楓は、魘夢の左手の甲についてた口が開く前に、

——桜の呼吸 壱ノ型 乱舞一閃。

楓が抜刀した刀を横に傾けて加速し、一閃で魘夢に左腕を斬り飛ばしたのだ。

頸を取れたら一番良かったが、死角になっていた為左腕を斬り飛ばすのが限界だった。だが——攻撃はまだ残っている。

「オレたちの想いを、利用するなアアアアッ！」

炭治郎の刀が魘夢の頸を飛ばすが、斬った手応えが無い。

頸だけになった魘夢は口を開く。

「あの方が、*“柱”*に加えて、*“耳飾りの君”*を殺せって言った気持ち、凄くわかったよ。存在自体が何かこう、とにかく癩に障って来る感じ」

炭治郎は「死なない」と呟きながら目を丸くする。

「うふふふ。素敵だねその顔、そういう顔を見たかったんだよ。——でもそうだよね、なぜ頸を斬ったのに死なないのか。それはね、それがもう本体では無くなっていたからだよ。今喋っているこれもそうさ、頭の形をしているだけで頭じゃない。君たちがすやすやと眠っている間に、オレはこの汽車と融合した！」

魘夢は、楓と炭治郎を見ながらニタニタと笑う。

「この汽車全てが、オレの血肉であり骨となった。つまり、この汽車の乗客二百人余りが

オレの体を更に強化する餌。そして人質。ねえ、守りきれぬ？君たちだけで、この汽車から端から端までうじゃうじゃとしている人間全てを——オレに「おあずけ」させられるかなあ？」

魘夢は「うふふ」と言つて、列車の屋根に溶け込んで消える。

魘夢の言葉に弾かれるように、楓と炭治郎は列車内へ戻つた。そこで目にしたのは、天井や椅子の端から肉塊のようなものが盛り上がり、乗客を包み込もうと蠢いているのだ。

——花の呼吸 五ノ型・改 徒の勺薬。

楓が放つた十八連撃が肉塊に直撃し、肉塊を灰に還す。

——水の呼吸 参ノ型 流流舞い。

炭治郎は水流に身を任せて流れるように、狭い通路や座席の間を移動しながら肉塊を斬り灰に還す。——この型を放つただけでこの車両の肉塊は消え去つたが、時期に再生するだろう。

そこへ、後方車両から誰かがやつて来る気配を捉える。この気配は、杏寿郎のものだ。

杏寿郎の到着と同時に車両が揺れ、目の前には杏寿郎の姿。

「ここまで来るまでに斬撃を入れて来たので鬼の再生にも時間がかかると思うが、余裕はない、手短かに話す。この汽車は八両編成だ！なので、栗花落とオレで四両づつ守る。

竈門少年たちは、鬼の頸を探せ！」

杏寿郎の言葉は簡潔だった。

それから、楓は刀を握り直し口を開く。

「炭治郎。車両の乗客は、煉獄さんと俺に任せろ。炭治郎は、善逸たちと協力して鬼の頸を落とせ」

「わかりました。まずは、善逸たちと合流します」

「うむ！急所を探りながら戦おう、君たちも気合いを入れろ！」

そう強く言うと、杏寿郎は凄まじい勢いで後方車両に向かい、炭治郎は善逸たちと合流する為走り出し、楓は納刀し、右掌を添える。

——桜の呼吸 壺ノ型 乱舞一閃。

凄まじい勢いで前方に加速し、姿が見えなくなる。

そう、一人では出来ないことは仲間がいれば出来る。そう信じて各自は行動を起こしたのだ。

上弦の参

楓は加速し跳び込んだ各車内で、蠢く肉塊へ向かって刀を振るう。

——花の呼吸 五ノ型・改 徒の勺薬。

——桜の呼吸 壺ノ型 乱舞一閃。

——花の呼吸 肆ノ型 紅花衣。

技を放ち、ボタボタと肉塊を斬るが、すぐに車両に吸収されてしまう。

その時、凄まじい断末魔が車両全体を揺らした。

現在の魘夢の体は列車そのものだ。彼がのた打ち回ればその分、列車全体も跳ねるのだ。

このままでは、列車が脱線して乗客の命が失われてしまう。なので、楓は車両の窓から外へ飛び出し、刀を振るう。

——桜の呼吸 式ノ型 千本桜。

楓が放ったのは、無数の桜の斬撃だ。

桜の斬撃は前方車両^四の頭上^兩に降り注ぎ、斬撃の重力で動きを停止させる。だが桜の無数の雨で、列車頭上のへこみ具合が凄まじい。

ことに成功したのだ。

「よくやった。取り敢えず止血は出来たが、激しい行動は厳禁だ。傷口が開く」

楓の話聞いた善逸は安堵の息を吐き、後方から現れた人影が大きな声を上げる。

「ふむ。竈門少年は、全集中・常中で止血ができるようだな、感心感心！常中は柱への第一歩だからな！柱までは、一万歩あるかも知れないがな！」

炭治郎は「はい、頑張ります」と呟き、杏寿郎は言葉を続ける。

「それに呼吸を極まれば様々なことが出来るようになる。何でも出来るわけではないが、昨日の自分より確実に強い自分になれる！」

また杏寿郎の話によると、後方車両四の乗客は無事だ。

楓も「前方は無事です」と返すと、杏寿郎は「うむ！」と頷く。

「皆無事だ！怪我人は大勢だが、命に別状は無い！竈門少年たちはもう無理はせず——」

杏寿郎の言葉を遮るように、ドオン、と地面を抉る凄まじい衝撃音が響く。

杏寿郎の数メートル前に着地したのは、右瞳に「上弦」、左瞳に「参」と刻んでいる鬼。——十二鬼月、上弦の参だ。

上弦がどうしてここに？という疑問が上がるが、それ以上に、この場の圧迫感が凄まじい。

そして上弦の参は、炭治郎たち目掛けて加速する。

——炎の呼吸 式ノ型 昇り炎天。

——花の呼吸 肆ノ型 紅花衣。

楓と杏寿郎は瞬時に抜剣し、型を繰り出す。

杏寿郎は円を描くように炎の斬撃を、楓は下から上に描く花の斬撃を放ち、炭治郎たちに迫っていた上弦の参の両腕を切断し吹き飛ばした。

上弦の参は、ズサアア、と後退する。そして、両腕もすぐに再生させる。——さすが上弦と言うべきか、再生速度が異常だ。

「なぜ手負いの者から狙うのか、理解できない」
「話の邪魔になると思った。オレとお前たちの」

そう言うてから上弦の参は、杏寿郎の問いに「なぜ当たり前のことを聞いた？」と疑問符を浮かべる。

楓は刀を構え、口を開く。

「善逸。炭治郎を安全な場所に連れて、伊之助と共に残りの乗客の誘導を任せる。——俺と煉獄さんで、上弦の参を討つ」

「黄色い少年。上弦の参はオレと栗花落が討つので、乗客の避難は任せました！」
「……分かりました。煉獄さんも楓さんも、無茶はしないで下さい」

善逸は頷き、炭治郎を背に乗せ立ち上がりこの場から離れて行くこうとするが、上弦の

参は地を踏み加速し、善逸に右手拳を振るう。

そして楓は、左腰方向に刀を回す。

——桜の呼吸 壱ノ型 乱舞一閃——極。

爆発的に楓は加速し、上弦の参の右腕を切断するが、直後に再生。

楓は上弦の参を見据え、鋭い視線を送る。

「……お前の相手は、俺と煉獄さんだ。他所見するな」

上弦の参は後退するが、杏寿郎が型を構える。

——炎の呼吸 壱ノ型 不知火。

杏寿郎は一気に間合いを詰め上弦の参の頸を落とそうとするが、上弦の参はさらりと

回避する。

杏寿郎はその勢いに乗って加速し、楓の隣に立つ。

「……なぜお前たちは、弱者を庇う。——オレからしたら、弱者は見たら虫唾が走る」

だから嫌いだと、上弦の参はそう呟く。

「やはり、オレたちと君は物事の価値基準が違うようだ」

杏寿郎がそう呟くと、上弦の参はある提案をする。

「そうか。では、素晴らしい提案をしよう——お前たち、鬼にならないか？」

「ならない。オレは炎柱・煉獄杏寿郎だ」

「悪いが俺もお断りだ。俺は桜柱・栗花落楓だ」

しかし、上弦の参の提案を、楓と杏寿郎は間髪入れず拒否。

鬼になってしまつては、帰る場所に帰れなくなつてしまう。

「オレは猗窩座——見れば解る、お前たちの強さ。その闘気、練り上げられている。至高の領域に近い。しかし、なぜお前たちが至高の領域に踏み入れないのか教えてやろう」

猗窩座は、右手人差し指で楓と杏寿郎を差す。

「人間だからだ。老いるからだ。死ぬからだ。——だが鬼になれば、百年でも二百年でも鍛錬し続けられる、強くなれる」

杏寿郎は、猗窩座に鋭い視線を送る。

「老いることも、死ぬことも、人間という儂い生き物の美しさだ。老いるからこそ、死ぬからこそ、堪らなく愛おしく尊いのだ。——強さというものは、肉体に対してのみ使う言葉ではない」

「そう、強さとは人の気持ちでもある。お前も人間だったころは、人の心を持ち、誰かを愛したはずだ。——猗窩座、その心はどこに置いてきた？」

楓と杏寿郎がそう呟くと、猗窩座の額に青筋が浮かぶ。

「結論は見えている。——君とオレたちの価値基準が違う、如何なる場合も、オレと栗花落は鬼にはならない」

「……………そうか」

猗窩座は落胆したように眉を下げるが、次第に不敵な笑みを浮かべる。

猗窩座が型のような姿勢を作った途端に、空気の重圧が増した。——それは殺気。これから始まるのは、命を賭けた殺し合いだ。

強き者

——術式展開 破壊殺・羅針。

「鬼にならないなら殺す」

猗窩座は足元に雪結晶の陣を出現させると、凄まじい速度で楓と杏寿郎に迫る。

——炎の呼吸 壺ノ型 不知火。

——桜の呼吸 壺ノ型 乱舞一閃——極。

型を繰り出し、杏寿郎が地上から迫り、楓は地を踏み込んで空に躍り出る。楓と杏寿郎は地と空から猗窩座の頸を狙ったのだ。

地を踏み跳び上がった猗窩座は、楓の一閃を拳で往なすと、着地した瞬間に杏寿郎の一撃を弾き飛ばす。その圧倒的な実力は、下弦の力量を遥かに上回る。

そして猗窩座は、興奮で頬を緩めながら地を踏み跳んだ。

「今まで殺してきた柱たちの中に、炎・桜はいなかったな。そして、オレの誘いに頷く者もいなかった。なぜだろうな？ 同じく武の道を極める者として理解しかねる。選ばれた者しか鬼にはなれないというのに。——素晴らしき才能を持つ者が醜く衰えてゆく。オレはつらい、耐えられない、死んでくれ杏寿郎、楓。若く強いまま」

——破壊殺・空式・乱。

——炎の呼吸 肆ノ型 盛炎のうねり。

——花の呼吸 弐ノ型 御影梅。

猗窩座が拳を虚空に打つと、打撃は直線的に杏寿郎と楓を襲う。

初弾の打撃は杏寿郎が炎の斬撃で相殺させ、遅れて襲う打撃は、楓が周囲に放った花の斬撃が相殺させる。——呼吸の二重防御だ。

——花の呼吸 五ノ型・改 徒の勺薬。

楓は花の十八連撃で猗窩座の急所を狙い放ったが、猗窩座は空中で身を捻り体勢を整え、花の斬撃を拳で弾き落とし着地する。——柔軟さ、強さ、反射速度。どれを取っても通常の鬼の比ではない。

「こんなにも美しい花の斬撃は初めてだぞ、楓！——やはり、お前は鬼になるべきだ！」
猗窩座は楽しそうに、嬉しそうに声を上げる。——まるでそれは、自身の好敵手を見つけたように。

楓は、その言葉を聞き額に青筋を浮かべる。

「——なるわけないだろッ」

楓は声を荒げ、刀を構えた。

——桜の呼吸 弐ノ型 千本桜。

刀を振るうと、無数の桜の斬撃が猗窩座の頭上から降り注ぐが、猗窩座は致命傷になる斬撃だけを拳で弾き飛ばす。

「鬼になれば、この斬撃の致命傷以外は掠り傷みみたいなものだ」

猗窩座は「その証拠にほらな」と言つて、瞬く間に傷が治る部位を指差す。——そう。楓の斬撃で傷付いた部位が、鬼の回復力で塞がっていたのだ。こうなつては、距離を取つて攻防をしていたらジリ貧だ。——近距離で戦うしかない。

楓が杏寿郎と目を合わせると、杏寿郎も「承知」と視線で頷いていた。

楓と杏寿郎は猗窩座と間合いを詰め鋭い剣技を繰り出すが、猗窩座は喜々とした表情でそれを拳で往なすか、弾き落としている。

そして、猗窩座と一瞬一瞬の攻防は、少しでも反応が遅れば致命傷になる。

「杏寿郎、楓、素晴らしい剣技だ！だが、鬼にならなければこの剣技も失われていくのだ！お前たちは悲しくないのか！」

「悲しい感情などない！オレの心意の炎は、きつと誰かが受け継いでくれる！」

そう言つた杏寿郎の顔は、剣技の速度に慣れた猗窩座の拳が徐々に掠り、額、頬、左目が打たれ赤い鮮血を流している。

「猗窩座、お前の物差しで見るな。俺たちは、自身の信念の為に腕を磨いてるんだ」

そう言つた楓も、杏寿郎と同じく、額、頬から鮮血を流し、右脇腹の骨が折られてい

に決めた？ 鬼が強い生き物なら、人間は強くなれる生き物だ。だから、鬼殺隊員は人間の身で鬼と戦えている。その事実が否定できない癖に、勝手なことばかり言うな」

楓は「惨めだぞ、お前」と続けると、猗窩座の額に青筋が浮かぶ。

「……そうか。楓、ならばお前は強い人間だと言うんだな？」

楓は「俺は強くなかない」と言って頭を振る。

「俺は弱い人間だ。ただ強くあろうという想いで、懸命に上を目指しているだけだ」

楓の脳裏に過るのは、蝶屋敷に住まう皆だ。——彼女たちの助けがなければ、今ここに楓は居ないのだから。

そんな楓の言葉を、杏寿郎は静かに聞いていた。

そしてこう思った「自身より年下の子が、このような想いを抱いて鬼殺を行っていたなど、考えたこともなかった」と。

その時、杏寿郎は有る光景を思い浮かべる。それは、床に伏せていた母の姿だ。母は、病に侵されようと最期まで凜としていた。杏寿郎は、そんな母との会話を思い出したのだ。

ある日、日々の報告を母の部屋に訪れた時だ。母は唐突に『強き者』について問うてきたのだ。

そう、杏寿郎は強き者なのだ。しかし、当時の杏寿郎は言葉に詰まってしまった。当

然だつたのかも知れない、杏寿郎は、自身が強者だと漠然にしか受け止めていなかったのだ。

そんな杏寿郎に母は、凜とした眼差しでこう言ったのだ。

『強き者は、弱き人を助ける為です。——生まれついて多くの才に恵まれた者は、その力を世の人たちの為に使わねばなりません。天から賜りし力で、人を傷つけること、私腹を肥やすことは許されません。——弱き人を助けることは、強く生まれた者の責務です。責任を持つて果たさなければならぬ使命なのです。——決して、忘れることなきように』

杏寿郎が母の想いを聞いて数日後に、母は天に昇った。

最後まで凜々しく、静かに息を引き取つたのだ。

そして楓の今の想いは、決して芽を摘ませたらいけない。——自身の使命として、責務として、個人の想いとして。

「——母上。オレは今、次世代を担う子と共に戦っています。決して、この芽を摘ませたりはしません。それが、オレの使命です——」

杏寿郎は刀を握り締め、心を燃やした。それは闘気となり空気を揺らす程だ。

そして、杏寿郎は型を構える。

——炎の呼吸 奥義 玖ノ型・煉獄。

杏寿郎の覇氣に一瞬押されたのか、猗窩座の反応が遅れた。次いで、凄まじい直線的な加速に爆風と土煙。

土煙りが晴れると、そこに映ったのは猗窩座の頸は斬れていないものの、両腕と体の半分以上が削がれていた。しかし、距離を取った猗窩座はすぐさま体を再生させようとする。

追撃を加えたいが、杏寿郎は技の反動で動くことが叶わない。そして、猗窩座が体の再生を完了させたなら最後、動けない杏寿郎は、猗窩座の手によって殺されるだろう。

右腕だけを再生し終えた猗窩座は、片足だけを踏み込み、杏寿郎の腹目掛けて拳を振るった。

決着

楓が杏寿郎に迫る猗窩座の右腕を斬り飛ばすには、自身と距離が開き過ぎている為、乱舞一閃——極。〃以上の速度が必要であり、右腕を正確に斬り落とす必要がある。

楓は猗窩座の右腕を斬り落とすことだけに集中し、他の物は全て削ぎ落とす。

すると、猗窩座と杏寿郎の姿が——透明に見え、筋肉と血管の通りが浮き出て見える。——今の楓の瞳には、猗窩座の右腕を斬る為の正確な位置、そこまでの最短の道程が見えているのだ。

楓は、刀を左腰方向に回す。

——桜の呼吸 壱ノ型 乱舞一閃——終。

この技の速度は〃乱舞一閃——極。〃の速度の6倍であり、遠心力を利用し一閃の威力は2倍だ。——だが、片足の骨折は必須なのだ。

そして楓は爆発的に加速し、杏寿郎の腹部に迫る猗窩座の右腕を斬り落とす。

——花の呼吸 肆ノ型 紅花衣。

楓はそのまま刀を下から上に斬り上げ、花の斬撃で猗窩座の頸を狙うが、猗窩座はそれを寸前の所で後退し回避。そして猗窩座は「チツ」と舌打ちし、内心で冷汗を流した。

猗窩座の雪の羅針盤は、相手の鬨気を察知し、攻撃の予測、回避に応用しているのだ。だが最初の一閃だけ、楓からは鬨気が感じられなかった。もし最初に頸を狙われていたら、鬨気を察知することが出来ずに頸を刎ねられていたのかも知れない。

その時、猗窩座の表情から焦りが見て取れた。――夜明けの気配だ。列車の向こう側から、徐々に日が昇り始めているのだ。

だが、猗窩座自身の再生はほぼ完了しているし、現在の楓と杏寿郎は満身創痍だ。何かしらの攻撃を与えられれば殺せるだろう。

でも、殺すことに固執しすぎると己の身を滅ぼす。楓と杏寿郎が、まだ何かを企んでいるかも知れないのだ。

猗窩座は苦渋の決断の据え、口を開く。

「……杏寿郎、楓。次は殺す」

猗窩座は毒付き、体を翻した。――猗窩座は、森の奥へ、奥へと姿を消して行く。

完全に朝日が昇った所で、戦闘は終わりを告げた。

杏寿郎、楓は満身創痍な姿だが、命は繋げていた。

楓は右手で携えていた『亞鬼滅殺』と描かれた日輪刀を地に落とすと、グサ、と言う音と共に、刀が地に突き刺さった。

「……煉獄さん。生きてますか？」

杏寿郎は納刀し、口を開く。

「ああ、生きてるとも！先程は、死を覚悟したんだがな！」

わははは！と笑う杏寿郎。

楓は「元気だなあ、煉獄さん」と内心で呟く。てか、杏寿郎も楓と同様重傷なんだが。俺も死を覚悟しましたよ」

そう言ってから楓は苦笑し、折れてない手で右脇腹を抑え、両膝を地に突け背からゆっくりと仰向けに倒れる。先の一閃で折れた右足が悲鳴を上げ、肋骨が折れた右脇腹から激痛が走ったのだ。

「しかし、栗花落。栗花落は柱の中で、上弦と対峙する経験が二度もあるとはな！」

「……本当ですよ」

楓は内心で「もう、上弦と対峙するのは勘弁してくれ」と愚痴を吐く。

その時、「楓さんんんんっ！煉獄さんんんんっ！死んだらダメええええええっ！」「死ぬなよっ！蝶羽織りっ！目ん玉ギョロギョロっ！」と叫び声上がる。

善逸が炭治郎を背負い、伊之助が禰豆子の入った箱の紐を両肩から下げながら、楓たちの方へ走り寄る。

「良かった、善逸たちも無事か」

「黄色い少年、猪頭少年、竈門少年、よくやった。君たちのお陰で、オレたちが心置きな

く戦えたんだからな」

善逸は顔を青くし「そ、そんな重傷でも普通に喋れるって、柱って怖ッ！普通、喋るのは辛いはずだよねっ！」と、小言を呟いていた。

杏寿郎は、善逸の背に乗っている炭治郎を見た。

「——竈門少年。オレは君の妹を信じる、鬼殺隊の一員として認める。オレは、汽車の中であの少女が血を流しながら人間を守るのを見た。命をかけて鬼と戦い人を守る者は、誰が何と言おうと鬼殺隊の一員だ」

炭治郎は嬉しかった。認めてもらえたことが、本当に嬉しかった。禰豆子の頸を斬ろうとしていた筈の杏寿郎は、しっかりと炭治郎たちの行動を見てくれたのだ。

「……あ、ありがとうございます」

炭治郎はそう呟き、両瞳から涙を流す。

その時、遠くから黒い服に身を包んだ集団がこちらに走り寄る。——隠の人々だ。彼らの頭上には二羽の鴉が飛んでいた、楓と杏寿郎の鴉だ。

鴉たちは産屋敷邸に飛び、報告を上げていたらしい。お陰で、乗客の人々も怪我の治療が受けられるはずだ。

「隠の者たちが来てくれたようだ。我らも治療の為蝶屋敷に向かおう！」

杏寿郎がそう呟く。

ともあれ、隠の人々は楓を背に乗せ運び、杏寿郎には肩を貸し、善逸は炭治郎を背負い、伊之助が彌豆子が入った箱の紐を両肩に掛け直し、歩みを始めたのだった。

その時、向日葵の刺繍が所々にあしらってある着物を身に纏った真菰が入室する。その側頭部には花柄のお面がつけられている。

「あ、起きたんだね、楓」

真菰は。パタパタとベットの横まで歩み、そこにある椅子に腰を落とす。

「今さっきな。てか、もつと強い鎮痛剤ってないか？」

楓は「体中が激痛なんだが」と呟く。

だが真菰曰く「これ以上は副作用があるから無理かな。今も結構強い鎮痛剤を投与してるだよ」ということ。

楓は「そうか」と頷き、気になることを質問する。

「ところで、煉獄さんはどうしたんだ？」

「煉獄さんなら臨時柱合会議に参加しているよ、上弦の参の情報を提示してるはず」

杏寿郎は治療の後お館様（釋）に謁見し、臨時柱合会議の進言をお願いしたのだ。

杏寿郎は怪我が酷い中でも「うむ！この程度の怪我問題ない！オレより、栗花落の方が重傷なはずだ！」と言つて、平気そうだったとか。でも、左目が潰れ内臓機能が低下したことにより、柱からは引退とのこと。

「煉獄さんもそうだけど、楓が無事で良かった……。運ばれた時、私、血の気が引いたんだからね」

「死んでもおかしくなかった怪我だったからな。まあ、上弦と対峙して命があっただけでも幸運だろ」

真菰は「それはそうだけど」と言つて、若干顔を俯けていた。——でもそう、心配をかけてしまったのは間違えない。

楓も逆の立場だったら、同じように思つていただろう。

「俺の怪我だが、どれくらいで完治しそうだ?」

真菰が言うには、楓の主治医はカナエらしいので、カナエに聞いてみないと解らないとのことだ。でも、一カ月間は激しい運動は厳禁だろう。てか、柱の空席が二つになつてしまったのは痛手だ。新たな柱を就任させると言つても、実力が伴わなくてはならないのだ。

楓は口を開く。

「なあ真菰。真菰が柱に推薦されたらどうする?」

真菰は目を丸くする。

「わ、私が柱!? む、無理無理! 私、弱いし!」

真菰は両手を前に出し左右に振る。

だが、真菰も柱の条件である「甲隊士きのえであり」「鬼を五十体以上倒す」「十二鬼月の頸を落とす」を満たしているんだが。

楓の予想だが、お館様籙から声成が掛かるのは時間の問題じゃないかと思つていたりする。柱水柱の重複という要素もあると思うが。

真菰が柱になった場合、蝶屋敷には元柱が一人、現柱が三人在住していることになる。……何て言うか、蝶屋敷は柱の巣窟なのだろうか？

真菰は「そういえば」と話題を変える。

「楓、上弦の参との戦闘で『乱舞一閃——終』を使ったでしょ」

「……使わない約束だったのにな、悪い」

真菰は左右に頭を振る。

「私は怒つてないよ。そこまで追い詰められたつてことなんでしょ？」

楓は「そうだな」と頷く。

真菰は「あれを早く完成させないと拙いね」と呟く。

「そうだな。早く完成させるか」

「じゃあ、カナエもこの場に呼ぼう。早く完成させちゃおう」

真菰は「じゃあ、呼んで来るね」と言つて、椅子から立ち上がり病室を後にした。

それから一刻が経過し、紫陽花の刺繍が所々にあしらつてある着物を身に纏つたカナエと合流し、あれを完成させるのだった。

思い

（病室）

楓が大怪我をしてから数日が経過し、楓は困った事項があった。カナエと真菰が過保護過ぎるのだ。いや確かに、上弦下弦と対峙して大怪我を負った経験は数え切れない程あるけど。

「楓。あーん」

真菰がベットの隣に備え付けられている椅子に座り、右手が携えているお椀の中に入っていた患者食を蓮華で掬い、楓の口許に移動させる。

「……いや、自分で食えるから」

楓は「右腕は骨折してないんだし」と真菰に言ったが、真菰は「ダメだよつ、楓は患者なんだからつ」と言ってから頬を膨らませる。

「楓。真菰ちゃんのご飯を食べたら私の方ね」

真菰と挟むように座っているカナエも、お椀から蓮華で患者食を掬う。

この光景を見ていた善逸は「キイイイイ——ツツ！（汚い音声）楓さん羨まし過ぎ——ツツ！（血涙）やっぱり、柱になればもてるのか!? そうなのか!?」って叫

んでいた。

ともあれ、楓は覚悟を決め、真菰が口許に運んだご飯を食べ、咀嚼し飲み込んだ。

「おいし〜?」

真菰は上目遣いで楓を見る。

「旨いぞ。てか、この飯、カナエさんと真菰が作ったのか?」

何と言うか、楓には懐かしい味なのだ。

「そうよ。楓のお母様の料理の味に近づけるように、真菰ちゃんと頑張ってるのよ」

楓は目を丸くする。

確かに楓は、口頭でどのような味だったのかを真菰とカナエに話したが、それが再現出来るとか予想外過ぎた。

「はい、あーん」

カナエがそう言うってから、楓はカナエが口許に持ってきた蓮華を口に運んで咀嚼する。

「どうかな? 結構力作のつもりなんだけど」

カナエがそう呟き、楓はご飯を飲み込んでから口を開く。

「旨いよ。……やっぱ、懐かしい味がするなあ」

楓は考え深く呟く。

まだ町に在住していた時、両親との暮らしを思い出したのだ。

「ど、どうしたの楓!？」

「だ、大丈夫? やつぱり、口に合わなかった?」

「だ、大丈夫だ。思い出からの涙だから」

そう。——思い出とご飯の味が、楓の涙線を刺激したのだ。

カナエと真菰は「そ、そっか」と安堵をする。

ともあれ、全ての飯を食べ終えた所で、楓が口を開く。内容は、猗窩座戦で目にした透き通った世界のことだ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「全てが透明に見えた。ってこと?」

真菰の問いに、楓は「ああ」と頷く。

「その世界に入った時、相手の動きの予測に、自身の攻撃、回避速度の上昇、相手の肺の動きや血管の流れ、筋肉の収縮が透けて鮮明に見えたんだ。——感覚としては、余分な物を全て削ぎ落とし、最小限の動作で最大限の力を出す感じだったな」

「……そっかあ。でも私、そんな世界があるなんて初めて聞いたよ」

「俺もそうだしな。今になって思うと、あの世界に入るには条件があるんだと思う」

楓は「例えば、生と死の狭間でのみ、透き通る世界」の道を掴み取れ、死の間際でも正確な呼吸と動きを崩さないのかな」と、続けるのだった。

「正確な動きと呼吸かあ。もしかしたら、楓が型を舞っていたことに繋がるのかしら？」
カナエがそう言った。

そう。楓は空いた時間を見つけたら、剣技の確認の為道場で花の呼吸桜の型を舞っていたのだ。

「どうだろうな。でも、正確な動きの要素にはなつたんじゃないか」
その時、診療室の方から声が響き渡る。



『富岡さん。前に姉さんに言われましたよね、〃怪我をしたらすぐに見せてね〃、と』

『……任務には支障はない。オレにとつては、鬼を一体でも倒すことが望ましい』

『鬼を倒すと言いますが、体が言うことを聞かなくなりましたら意味がありませんからね』

『……わかっている。だから、胡蝶に薬の依頼をした』

義勇は「薬を貰ったら任務に向かう」と、しのぶに仏頂面の面持ちで言うと、しのぶは額に青筋を浮かべる。

「ところで楓、今日はお風呂に入るんでしょう？」

「その怪我じゃ、一人じゃ無理よね」

「ひ、一人で大丈夫だ。問題ない」

楓はそう言ったが、医療に携わるカナエと真菰の前では無意味になる。

「本当に？お風呂に浸かったらダメな部位もあるんだよ」

「楓はきつと無茶しても浸かるでしょう？無理はダメよ」

真菰とカナエは「——一緒に入りましょう」と提案する。

まあ確かに、真菰とカナエは楓のお嫁さんなので、色々な意味で問題がないと言える。

「……——えーと。一緒に入らない選択肢は？」

「ないね」

「ないわね」

楓は嘆息した、これは絶対に勝てないと悟ったのだ。

「……はあ、襲われても文句は言うなよ」

「大丈夫だって、楓は理性のお化けだから」

「そうね。同じ部屋で寝ているのに襲って来ないのが良い例だわ」

楓は、音柱・宇髄天元に『栗花落、嫁の尻には敷かれるなよ』と言われていたが、既に敷かれていたのだった。

稽古

く蝶屋敷、道場。早朝く

あれから数週間が経過し、楓は炭治郎たちに稽古をつけていた。

「ごはアっ!？」

突撃しながら振るって来た伊之助の日輪刀は、楓の木刀にあっさりと言なされて隙が出来た部位に一撃を叩き込まれると、伊之助は悶絶したように蹲る。

楓は流れる動きで屈み、迫る炭治郎を背に乗せるようにして転がし、床に叩き付ける。
「ぐわアっ!？」

そして、炭治郎の後ろに居た善逸は型を構えている。

——雷の呼吸 壱ノ型 霹靂一閃。

——桜の呼吸 壱ノ型 乱舞一閃——極。

善逸の居合いの一閃と木刀を左腰に回した楓の一閃が衝突したが、楓の木刀が善逸の日輪刀を弾き飛ばし、善逸に関節技を掛け床に落とす。

「ぐっつ!？」

善逸は速さで圧倒できると考えたのだが、その速さも楓の方が一枚も二枚も上だ。

く夜、大部屋く

炭治郎たちの稽古を終えた楓は、蝶屋敷で夜食を摂り、就寝の支度をして自身の布団の上に座っていた。

「いつも思うけど、炭治郎君たちは楓の継子じゃないのよ」

カナエは「稽古厳し過ぎないかしら」と楓に指摘し、楓は「厳しいか？」と疑問符を浮かべる。楓とカナエが修行した期間、この稽古に近い内容が組み込まれていたはずなんだが。

そのことを話していたら、楓の隣に座っていた真菰が「楓が最終選別に無傷で受かった理由がわかってきたかも」と思いながら苦笑した。

「そういえば楓、傷の具合はどう？」

真菰が楓の右腕を擦りながら問い掛ける。

それに楓は——真菰が擦る右手に自身の右手を重ねる。

「問題ないぞ。まあでも、完全に完治するまであと数週間はかかりそうだけど」

楓は「完全完治まで任務は無理だな」と付け足す。

楓の隣に座るカナエは、楓の右肩に顔をコテンと預けた。

「それまでは過度な動きはしないこと、いいわね」

「大丈夫だって」

でもカナエと真菰は、楓の「大丈夫」は余り信用していない。

楓はどれだけ無理をしても「大丈夫」と言っ、怪我を放置してきた経験があるからだ。

「楓。完治したら愛を頂戴ね」

真菰の発言に楓は「わ、わかった」と返すのだった。——楓は未だに、愛情関連の耐性がないのだ。

するとカナエが、楓にとっては爆弾発言になる言葉を呟く。

「そうね。——そろそろ一人は欲しいわね」

「そうなれば私は引退かなあ」

真菰は便乗するように呟く。

「……いや、俺まだ十代だからね」

でも、この世界に鬼殺隊籍を置いている限り、年は関係無いのかも知れない。

それから、楓、真菰、カナエは顔を見合わせ笑い合ったのだった。

遊郭

傷が完全に癒え、範囲地区の警備を終えた楓は蝶屋敷に帰路に着いていた。

すると、楓の目の前に凄まじい速度で走って来た一人の男が立ち止まる。——その男とは、音柱・宇髄天元である。

「丁度いい。栗花落、お前も来い」

天元は「警備が終わって、これから待機だろ」と続けるが、天元の言葉に主語が無い為、楓は疑問符を浮かべる。

「宇髄さん。俺を何処に連れて行く気ですか？」

天元は、ニヤリと笑った。

「——鬼の棲む遊郭だよ」

——遊郭とは、男と女の見えと欲、愛憎渦巻く街。

夜になれば煌びやかな街通りとなり、遊女たちを目的に男性の足通りも増える。それに遊郭は、借金の返済で売られた幼い子供も居るのだ。そして、この街を鬼からしてみれば格好の餌場。そう、自身の好物となる餌が揃っているのだから。

でも、それはそれ。これはこれ、である。

「……俺、色々な意味で死にたくないんで拒否してもいいですか？てか、宇髄さんが居れば十分じゃないですか」

「もしかしたら上弦の可能性もあんのよ。だから、柱一人と隊士だけじゃ不安だろ」

楓は「……上弦」と呟き溜息を吐いた。

「……一緒にいきますよ。でも、真菰とカナエさんに鴉を飛ばしますけど、いいですか？」

「構わねえぞ。嫁たちに伝えるのは当然だ」

楓は「宇髄さんと任務に同行することになった。場所は——遊郭らしんだが、俺は絶対に遊んだりしないから。任務が終わったら、一直線に二人の元に帰る」という内容の手紙を二枚書き、鴉に手渡した。

「鴉さんよ。この手紙を、真菰とカナエさんに届けてくれ」

「承ツタ！楓、武運ヲ祈ル！」

そう言ってから、楓の鴉は飛び立った。

それから天元の元に走って来た、炭治郎、善逸、伊之助と合流し、途中にある藤の花の家紋の家に立ち寄る。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
 藤の花の家紋の家、二階部屋

この部屋に、炭治郎、善逸、伊之助、楓、天元は腰を下ろし、天元が口を開く。

「遊郭に潜入したら、まずオレの嫁を探せ。オレも、鬼の情報を探るから」

お茶やお菓子を食べていた善逸が「とんでもねえ話だ!」と声を上げる。

「ふざけないでいただきたい!自分の個人的な嫁探しに部下を使うとか!」

「はあ!?何を勘違いしてやがる!」

「いいや言わせてもらおう!アンタ見たいに奇妙奇天烈な奴はモテないでしょうとも!だがしかし!鬼殺隊員であるオレたちがアンタの嫁探しなんて!」

「馬鹿かテメエ!オレの嫁が遊郭に潜入して、鬼の情報収集に励んでんだよ!定期連絡が途絶えたから、オレも行くんだっての!」

天元の言葉を聞いた善逸は、体を硬直させた。

そして、それから口を開く。

「そういう妄想してらっしやるんでしょ?」

「クソガキが!——これが鴉經由で届いた手紙だ!」

天元が、届いていた手紙を善逸に投げる。

束で縛られている手紙の数は、かなりの分厚い。

「ギャアアアアア——！」

手紙を当てられた善逸は、叫び声を上げた。

「随分多いですね。かなり長い期間潜入されているんですか？」

炭治郎がそう聞くと、天元がさりりと口を開く。

「三人いるからな、嫁」

天元の言葉を聞いた善逸は、目を丸くし血走せる。

「三人!?嫁……三人!?テメツ……テメエ!何で嫁三人もいんだよ!ざっけんなよ!」

善逸の腹部を殴る天元。

「おっえっ」

善逸は声を上げる。

そして天元は、楓を見ながら口を開く。

「つーか善逸、栗花落も嫁二人いるだろうが」

「……し、知ってるけれども!なぜか楓さんは責められないんだよ!」

そう。楓、真菰、カナエは、善逸たちに分け隔階級関係て無く接無しているのだ。

だからなのかも知れない、善逸は楓を責められないのである。

すると、炭治郎が口を開く。

「あの……手紙で、来る時は極力目立たぬようにと何度も念押ししてあるんですが、具体

的にはどうするんですか?」

「そりやまあ、変装よ。不本意だが地味にな。お前らにはあることをして潜入してもらう——あ、栗花落は女装で決まりな。お前、客として入れないだろ」

楓は肩を落とす。解つてはいたが、精神的にクルものがあつた。

そう、楓は一度だけ単独潜入をしたことがあるのだ。その時は旅館の女将になり済ましていたが、男性客からの性的な悪戯が多々あつたのだ。

「既に怪しい店は三つに絞つてあるから、お前らはオレの嫁を探して情報を得る。——ときと屋の「須磨」。荻本屋の「まきを」。京極屋の「雛鶴」だ」

「嫁、もう死んでんじゃねえの?」

伊之助がそう呟くと、天元の右手拳が腹部に突き刺さる。

それから「ご入用の物をお持ち致しました」と言つて、襖が開けられる。どうやら天元が、女装用の品を見繕うように頼んでいたらしい。

ともあれ、各自が着物に着替え、再び集まる。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「……楓さんですよね?」

「……えっと、楓さんは男性ですよね?」

善逸、炭治郎は目を丸くして眩く。

そう。現在の楓は、気品のある着物を身に纏い、薄っすらと化粧を施しているのだ。何処からどう見ても、育ちの良いお嬢様である。

そして、天元が口を開く。

「へえ、女装で変わるもんなんだな。栗花落、お前顔だけで飯を食っていけるんじゃないか。つーか、声質を変えることが可能って胡蝶姉に聞いたんだが、本当なのか？」

「——本当ですよ」

再び目を丸くする炭治郎たち。

その声は、鈴を転がしたような可憐な声だったからだ。まあこの声質は、カナエと真菰の教育で身に付いたものでもあるんだが。ちなみに、潜入する時の名前は、炭子、猪子、善子、楓だ。

楓の名前は、何の捻りも入れなくても女の名前で通る。ということになったのだ。

潜入

くときと屋く

女装をした、炭治郎、善逸、伊之助、楓、変装をした天元が店内に入り、暖簾下に座る女将さんの前で話しかける。

「悪いな女将さん。この中から誰か貰ってくれねエか？」

そう呟くのは、変装した天元だ。

そして、女将の目が止まった場所には女装をした楓が立っていた。——そう、女将は即断即決をしたのだ。

「じゃあ、その美人さんを貰おうかしら」

女将は楓を指差す。

楓の内心は複雑だ。女装をしているとはいえ楓は男性だ。こうも簡単に決められたら、男の威厳が皆無。と思ってしまうのだ。

「女将さん目がいいね。こいつはオレの一押しだ」

天元がそう言うと、女将さんは袖口で口許を抑え「うふふ」と笑う。

「そりやそうよ。きつとこの子は、京極屋麻姫花魁と差を付ける切っ掛けになるもの」

ときと屋には鯉夏花魁こいなつという看板花魁がいるので、女将は、楓と鯉夏との魅了で他店を引き離そうと考えているのだ。

ちなみに蕨姫花魁わらびひめとは、ときと屋が利益の為に敵視している花魁である。

「お嬢さんの名前は？」

「楓。と申します」

楓は鈴を転がしたような声で答える。

女将は「声も合格ツ！」と気分が高揚している。そして楓は、内心でげんなりするのだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

く鯉夏花魁の部屋く

『鯉夏花魁、ご指名です』

「わかりました。すぐに向かいます」

遊女の問いに、楓の隣に座る鯉夏が答えた。

その声は凛々しく、男性を虜にする美声だ。

鯉夏が、楓を見てから口を開く。

「楓。行きますよ」

「はい、わかりました」

楓は鈴のような声で返事を返す。

見習いから始まった楓だが、礼儀や作法、立ち振る舞いが客から好評を得て、今では花魁の傍付きまで昇格したのだ。

楓は「……もう辞めたい」と内心で泣きごことを呟くが、誰一人耳を傾ける者は居ない。ともあれ、楓と鯉夏は立ち上がってから障子を開け、客間に移動するのだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

く客間く

客間に到着し襖を開けると、男性客が盃を啜りながら鯉夏を見る。

「鯉夏花魁っ！今日も別嬪さんだねえっ！」

楓は内心で「……うわっ。このオッサン酔ってるよ」と呟く。

それから鯉夏の接待が始まったが、鯉夏の隣に座る楓にとっては最早拷問だ。……男性が男性を接待するなんて、拷問以外に無いだろう。

「鯉夏花魁の傍付きかい？」

「あ、はい。楓、と申します」

楓は鈴のような声で対応するが、内心では「……もう無理。本当無理だから」と、涙

遊女は「えつとね」と言つて続ける。

「こないだなんだけど、須磨花魁が足抜けしたつて話よ」

楓は「須磨」という言葉を聞き、眉を寄せた。——「須磨」とは天元の嫁の名前なのだ。

その時、用事から帰つた鯉夏が襖を開く。

「噂話はよしなさい。本当に逃げきれかどうかなんて……誰にもわからないのよ」

遊女たちは「はあい」と返事を返す。

「鯉夏さん。須磨花魁が本当に足抜けしたんですか？」

鯉夏はビクツツと体を震わせた。

「どうしてそんなことを聞くんだい？」

「私、遊郭に来て知らないことばかりなんです。噂話でも、耳に入れておく必要があると思ひまして」

鯉夏は僅かに考え込んだ後、口を開く。

「そうね、楓も知つておいて損はないものね。——数日前にね、ときと屋には須磨花魁が居ただけど、忽然と姿を消してしまつたの。その後、須磨花魁の部屋から日記が見つかつて……そこには足抜けするつて書いてあつたそうなの。……でも、須磨ちゃん足抜けする子には見えなかつたわ、しつかりしてた子だつたもの」

楓は「なるほどな」と頷いた。

鬼は対象の人の足抜けを利用し、対象を逃亡させたいと思いつき、露見すること無く喰うことが出来るのだ。おそらく、日記は偽装だろう。でも、ここまで用意周到な鬼と考えれば、遊郭に棲み付く鬼は——上弦の鬼が濃厚だろう。となれば、遊郭で派手な殺し合いになるのかも知れない。

護衛

「だーかーら、オレが配属された場所に鬼がいんだよ」

定期連絡の為、とある店の屋根の上に集まっていた伊之助が鬼の姿を催すが、正確要領が得ない。

「いや……うんそれは、あの……ちよつと待つてくれ」

「こうか!?これならわかるか!」

「そろそろ、宇髓さんと善逸、楓さんが来ると思うから……」

対面に座っていた炭治郎が両手を突き出したが、伊之助は「こうなんだよ、オレにはわかってんだよ」と鬼の姿を催すが、炭治郎は「うんうん……」と頷いている。

「栗花落は来ると思うが、善逸は来ない」

天元は音も無く炭治郎たちの手前に現れる。

「……善逸が来ないって、どういうことですか?」

炭治郎が天元にそう聞くと、天元の隣に、ふわつと舞うように楓が姿を現す。

その姿は、薄く化粧を施し、相応な着物を纏い、蝶が刺繍されている羽織を羽織っている。——それは、ときと屋の花魁の姿だ。

「——善逸と連絡が途絶えてるんだろう」

天元は楓を見てから「来たか」と手を上げた。

「何か掴めたか？」

「掴めた。と言えるか解りませんが、善逸の気配が地下からしたんです」

天元は「……何？」と怪訝な表情をする。——楓は特定人物の気配が探れるのだ。

楓たちが善逸と連絡が途絶えたとき、楓は善逸の気配を探ったのだ。——そして楓は、善逸の気配を地下から掴み取った。だからこそ、この場に善逸が現れないことを解つてなのだ。

楓は「でも」と眉を下げる。

「……搜索しようにも、地下は広過ぎてわからないんです」

楓の気配察知は大雑把な所までしか掴まない。こんなにも広い遊郭の敷地となれば、場所を特定するのは無理なのだ。

だが、連絡が途絶えた善逸の気配が今もするならば、捕まった人たちはまだ喰われてないかも知れない、とも採れるのだ。その中にはきつと、天元の嫁たちも含まれているに違いない。

天元は「……地下ねエ」と言ってから、

「鬼が食糧を隠すには、派手に最高の場所だな」

「あと、これは調べてわかったことなんですが、遊郭から姿を消しているのはほぼ花魁なんです」

そう。楓が過去から現在まで消息を絶った人物を調べた所——若い女性であり美人、身請け人の存在が見えた人たちが主なのだ。

楓はこのことを天元に話し「でも」と続けた。

「これもそこまでの確証が持てないんですけどね」

「いいや。そこまで解れば十分だ」

天元は、伊之助、炭治郎を見てから口を開く。

「——お前ら手を貸せ、遊郭の地下を調べんぞ」

「はいっ！」

「オレに指図すんなっ！」

炭治郎と伊之助がそう言ってから頷いた。

天元は楓に問いかける。

「んで、栗花落。これからお前はとうすんだ？」

「鯉夏花魁の傍に居ようと思いません。実は今の条件に、鯉夏花魁は当て嵌まっているんですよ」

鯉夏は身請け人が決まったらしく、明日遊郭を出て行くのだ。きつと鬼は、それを

易々と見逃さないだろう。

このことを天元に話すと「なるほどな」と頷く。

「鯉夏花魁を鬼が襲うのは今夜つてなるのか。鯉夏花魁は、護衛兼囷つてわけか」

「……そうですね。囷にしてしまうのは、申し訳ない気持ちになります」

「ま、いいんじゃないかねえか。お前なら守り切るだろ。てか、オレも早く合流できるようにするからよ」

取り敢えず今後の予定は、天元、伊之助、炭治郎が地下^避の捜索^難。楓は、鯉夏の護衛。というところで締め括られた。



くときと屋。鯉夏花魁の部屋く

この部屋には現在、二人の花魁が対面に座っている。

「これから遊郭は戦闘の場に様変わりします。鯉夏さんは戦闘が終わるまで、身を隠して下さい」

鯉夏は目を瞬かせる。

「楓。これから遊郭が殺し合いの広場に変わるってこと?」

「そんなところですよ」

楓と鯉夏は立ち上がった。

楓が「さ、早く。私は大丈夫ですから」と言つて、「き、気をつけてね」と言つた鯉夏を押し入れに隠し、襖を閉めた。それから、楓は羽織で隠していた刀を右手で背から取り、左腰に吊り下げる。

そして一刻が経過した所で、部屋の襖が開かれる。そこに居たのは——蕨姫花魁の姿をした鬼だ。

「あら。あんたは、ときと屋の楓じゃない。鯉夏はどうしたのかしら？」

「鯉夏さんはこの場に居ませんわ。私が逃がしましたもの」

お淑やかに微笑む楓。——楓は花魁として、時間稼ぎに徹しているのだ。炭治郎たちが人々を避難させる時間は、一秒でも多い方が良い。

鬼の「堕姫」は「ふくん」と言いながら、楓が腰に吊り下げた刀を見る。

そして鬼の瞳に刻まれている数字は——上弦の陸。

「刀なんか持つちやつて、鯉夏を守る勇者気取りかしら」

「さあ。蕨姫花魁のご想像にお任せしますわ」

「……私を前にしてその余裕。あんた只者じゃないわね」

堕姫は自らの帯を、楓を四方から取り囲むように展開し、楓は右手でゆっくりと刀を引き抜く。

帯は手足のように蠢き、柱でもない限り防ぐのは不可能だろう。

「ふふ。私はただの人間、ですわよ」

左腕の着物袖を口許で抑え、楓はくすくすと笑う。

「あなたの態度、腹が立つわね。今まで美しい女は喰ってきたけど、あなたは甚振り殺したくなるよ」

「あら、お褒めに預かり光栄ですわ。……でも、私を殺せます?」

堕姫の表情に変わりはない。——それもそうだ、小娘一人なら帯の一撃で殺せるのだから。

「……もう目触りよ。死んで頂戴」

堕姫は、楓を帯で四方から包み込むように取り囲む。

後は、帯の中で肉体を斬り刻むだけである。——斬り刻むことが出来るなら、であるが。

——花の呼吸 式ノ型 御影梅。

楓は周囲に花の斬撃を放ち、四方から取り囲んでいた帯を斬り裂く。

堕姫は楓が携える日輪刀の鍔の部分、『亞鬼滅殺』の文字を見て目を丸くする。

「あ、あなた!?!鬼狩りの柱!?!」

楓は、いつもの声質に戻す。

「まあな。それにしても、上弦の陸だとは驚きだ」

楓は「下弦だとずっと思ってた」と呟くが、堕姫はそれどころじゃない。

——そう、楓の性別が男性だった。ということが衝撃なのだ。

「あ、あんた！男だったのね!？」

堕姫の悲鳴に似た声が響き渡ったのだった。

上弦の陸

「男の癖に、女に成りすまして花魁になるなんて！」

楓を見ながら憤慨する墮姫。

「悪いな。遊郭の潜入捜査に必要だったんだよ」

だが楓は、悪びれもせずを受け流す。

墮姫には許せなかった。——花魁の地に就けるのは、遊郭で存在を認められた遊女だけだからだ。

墮姫も花魁まで上り詰めるのに長い年月が掛かったのに——楓は数週間で昇り詰めていたのだ。

「お前に聞きたいことがある」

「な、何よ！」

「お前も鬼になる前は人としての感情があったはずだ。それをどこに置いてきた？」

「何よ！鬼狩りの癖に説教!？」

「説教のつもりはない。——鬼であっても、人間と共存する道もあったはずだ。なぜそれを選択しなかった？」

墮姫は「はッ！」と鼻で笑う。

「人間と鬼が共存？あんだ、どんな夢を見ちゃってるのよ」

墮姫は「あんた本当に鬼狩りの柱？」と続け、全方位から帯操り、楓に向かって襲い掛かる。

楓は後方に跳び、窓から出て外へ着地をする。

——花の呼吸 五ノ型・改 徒の勺薬。

楓は花の十八連撃で自身に襲い掛かる帯を斬り裂き、墮姫は帯を元に戻してから窓から飛び下り楓を対面に立つ。

そして墮姫は顔を響めてから舌打ちし、何処からか飛んできた帯が墮姫の内部に浸入させる。分身が切り離されているということは、炭治郎たちが捕まっていた人た^{避難}ちを救出してくれたのだろう。——だが分身を摂り入れたことで、髪色^{避難}が変化し、墮姫は本来の姿を現したのだ。

「——鬼にとつて人間はね、只の食糧。だから、鬼が人間と共存なんてあり得ないのよ」
墮姫は口許を吊り上げる。

「鬼は人間と違って、老ない、食う為の金も必要ない、死なない、何も失わない。そして強く美しい鬼は、何をしてもいいのよ……！」

「……そうか。もういい」

この楓の言葉で皮切りに、堕姫が無数の帯を交差させる。

——血気術 八重帯斬り。

帯が凄まじい速度で襲い掛かる。

——桜の呼吸 弐ノ型 千本桜。

楓が刀を振るうと周囲に斬撃の雨が落ち、帯を斬り落とし、堕姫を斬り裂く。

この光景を見て堕姫は唖然としていたが、それを気にせずに楓は左腰に刀を回す。

——桜の呼吸 壹ノ型 乱舞一閃。

楓は加速し、堕姫の頸をすれ違い様に斬り体を停止させ、堕姫に振り向く。

すると、天元が楓の隣に降り立つ。

「頸、斬ったんだな」

楓は「はい」と頷くが、

「でもおかしいです。上弦にしては——弱過ぎます」

上弦が、通常の「乱舞一閃」で頸を落とすなんて弱過ぎるのだ。

楓の長年の勤が、まだ何かあると告げている。

「オレもド派手に同意だ——本命は別にいるな」

「——ですね」

そう言うってから、楓は頷く。

ちなみに、現在の墮姫の状況は地に座り込み、斬られた頸を両手で持つている。

「よ、よくもアタシの頸を斬ったわね！ただじゃおかないんだから！」

墮姫が涙ながらに叫ぶ。

「鬼の頸を斬るのが俺たちの仕事だ。——お前は、来世で生まれ変われ」

墮姫を見る楓の瞳には、慈悲の念を捉えることが出来た。

この時天元が「なるほどなあ。これが不死川から『異端の柱』って言われてる所以かあ」と内心で呟き、頷いていた。

「もうお前には用はねえよ。栗花落の言う通り、来世で人生やり直しな。——つか、本物の上弦はどこに隠れてるか知ってるか？」

「なッ!?アタシは上弦の陸よ！」

「だったら、こんな短時間で頸を斬られるとかねえだろう。弱過ぎなんだよ、お前」

天元が墮姫をそう煽る。

「あ、アタシまだ負けてないからね！上弦なんだから！」

墮姫は、泣き叫ぶように声を上げる。

「アタシ本当に強いのよ！今はまだ陸だけど、これからもっと強くなって……」

「説得力ね——」

再び煽る天元。

そしてついに、堕姫は本格的に泣き出した。

「っ、わ——ん！」

突然のことに、ギョとする天元、楓。

「本当にアタシは上弦の陸だもん！数字だって貰ったんだから！アタシ強いんだから！」

楓と天元は「——おかしい」と内心で呟く。

鬼の頸を斬ったならば、体が崩壊していてもいい筈だ。——だがそれが無いのだ。

「……おい、栗花落。お前、ちゃんと頸を斬ったんだよな？」

「斬りました。間違えなく」

楓は——今入ることが出来た、*“透き通る世界”* で見たことを天元に話す。

「宇髓さん。アイツの本体はもう一つあるはずですよ」

楓は「体の作りが若干違いましたから」と付け足した。

確かに、鬼と人の構造はほぼ全く同じなのだ。もしそれが異なるのならば、体内に何かを細工している以外に考えられない。

「わあああああ！頸斬られた！頸斬られちゃったあああ！お兄ちゃんああん！」

堕姫が、お兄ちゃん、と叫んだ瞬間、周囲の重圧が増した。

そして空気が淀み、殺気が立ち込める。

「ううううん」

楓と天元は本能的に危険を察知し、墮姫の背後から現れたもう一体に鬼に向かって踏み込み、楓が四連撃、天元が三連撃を放つが鬼の頸を刎ねることが出来なかった。斬り裂けたのは、鬼が纏う帯の一部のみだ。

そして鬼は、墮姫を連れて後方に移動していたのだ。

「泣いたってしようがねえからなあ。頸くらい、自分でくつつけろよなあ。おめえは本当に頭が足りねえなあ」

隙を見た天元が鬼に斬り掛かろうとするが、鬼の動きを逸早く察知した楓が天元の前に躍り出る。

——花の呼吸 式ノ型 御影梅。

そう、楓が周囲に放った花の斬撃が、鬼が携える鎌の斬撃を全て弾いたのだ。

後方に移動した鬼は、振り向き口を開く。

「へえ、やるなああ。攻撃全て止めたなああ。……殺す気で斬ったけどなあ、いいなあお前ら、いいなあ」

特に鬼が注視しているのは楓だ。

今の斬撃ならば、柱たちを傷付けることが出来ていたのだから。

「お前らいいなああ、その顔いいなああ。肌もいいなあ、シミも痣も傷もねえんだなあ。」

……肉付きもいいなあ、オレ太れないんだよなあ

鬼は「妬ましいなあ」「死んでくれねえかなあ」と呟く。

そして墮姫が、今までの経緯を鬼に話、鬼は怒りを露にする。

「そうだなあ、そうだなあ、そりゃ許せねえな。オレの可愛い妹が、足りねえ頭で一生懸命やってるのを虐めるような奴らは皆殺しだあ」

鬼は両手で鎌を携えた。

「取り立てるぜ、オレはなあ……やられた分は必ず取り立てる。死ぬ時グルグル巡らせろ。オレの名は、妓夫太郎だからなあ！」

こうして、柱二人、上弦の陸の死闘が開始されたのだった。

才能

妓夫太郎は鎌の斬撃通常を放つが、

——花の呼吸 五ノ型・改 徒の勺薬。

楓が花の十八斬撃で鎌の斬撃を撃ち落とし、妓夫太郎に鋭い斬撃を与えようとするが、凄まじい反射速度で交わされる。

「へえ、今のを受け流すのかあ。お前いいなああ、甚振つて殺してやりてえなああ」

妓夫太郎は、楓に称賛の声を掛ける。

その隙に天元の斬撃が襲うが、妓夫太郎は携えている鎌で迎撃する。

「殺されるわけにはいかねえんだよ。オレたちには待つてる人が居るんでな」

天元は「な、栗花落」と同意を求め、楓は「そうですね」と刀を構えて頷く。——楓には、真菰とカナエに伝えなくてはいけないことがあるのだ。

「大切な人かああ、お前ら羨ましいなあ。オレたちにはいねえのになああ。死んでくれねえかな」

妓夫太郎は鎌を振り下ろす。

——血気術 飛び血鎌。

妓夫太郎の放った血気術は、薄い刃のような血の無数の斬撃だ。

——花の呼吸 弐ノ型 御影梅。

天元の前に躍り出た楓が、周囲に花の斬撃を放ち相殺させるが、血鎌の数が異常だ。全てを相殺させることが出来ない。

——音の呼吸 肆ノ型 響斬無間。

天元は楓が変わるように前に出て、前方広範囲に鎖で繋がった日輪刀を振り回し爆発を起こし、楓が相殺しきれなかった鎌を撃ち落とす。

——桜の呼吸 弐ノ型 千本桜。

——花の呼吸 弐ノ型 御影梅。

——音の呼吸 肆ノ型 響斬無間。

楓が刀を振るい、この場に桜の斬撃を降り注ぐ。

自身の頭上に降る桜は、周囲を舞う花の斬撃と天元が振るう日輪刀が爆発を起こし、全てを撃ち落とす。

この捨て身とも言える攻撃に妓夫太郎たちは対応できないと踏んでいたが、煙が晴れるとそこには帯が舞うだけだ。その後方には、妓夫太郎の背に乗る堕姫。

「……さすが上弦、一筋縄じゃいかねえよな」

「……ですね。通常の鬼に比べると強さが異常です」

先程の攻撃ならば、下弦の鬼ならば対応が出来ず、直後に頸を落とせたはずの攻撃だったのだ。

「それよりも宇髓さん。あの鬼はきつと二人で一つです」

楓が静かにそう呟くと、天元は「ああ」と頷く。

天元は、楓が言わんとすることを理解したのだ。

「オレもド派手に同意する。……問題は、どうやって同時に頸を落とすだが」

楓と天元の予想だが、妓夫太郎を柱一人で抑え込むのは難しい。そう、墮姫は誰かに任せるしかないのだ。

一刻が経過した所で楓たちの走り寄ったのは、炭治郎、善逸（寝ている）、伊之助だ。

「宇髓さん、楓さん！大丈夫ですか!？」

「グハハハ！オレ様 came 来たからには百人力だぜっ！」

「オレたちもの出来ることがある筈です」

上から、炭治郎、伊之助、善逸である。

前までの楓なら任せるのは不安だったが、炭治郎たちは楓の地獄に稽古に血反吐を吐きながら着いて来たのだ。

「炭治郎、伊之助、善逸で、女の鬼を任せる」

「ド派手に期待してるぜ。——同時に頸を刎ねるぞ」

「はいっ！」

「グハハハ！オレ様にかかれば、そんなこと簡単過ぎて欠伸が出るぜっ！」
「任せてください」

すると、妓夫太郎が「ククク」と笑う。

「お前らがそれに気付いてもなあああ、結局死んでいくだけなんだよなあ」

天元が「はッ！」と鼻で笑う。

「こいつら三人共、優秀なオレたちの継子だ！逃げねえし根性がある、手足が千切れても喰らいつくぜ！——栗花落も何か言つてやれ！」

楓は「そこで振るの」と内心で呟いてから溜息を吐く。

「きちんと成仏しろよ？でいいか」

青筋が浮かぶ、妓夫太郎と堕姫。

「ああうぜえなあ！気に食わねえなあ！妹を泣かせたクソ野郎は死んでくれやあ！」
「お前ら絶対に殺してやるっ！」

先手を打ったのは天元だ。

天元は右手に持っていた爆薬を妓夫太郎たちに投げ、鎖で繋がれた日輪刀をぶつけ爆発を起こし、堕姫と妓夫太郎を分断させて距離を取らせる。

そして、善逸が型を取っていた。

——雷の呼吸 壱ノ型 霹靂一閃・六連。

善逸は技を繰り出し、堕姫を押し上げるように動き、堕姫を引き連れて近場の屋根の上まで移動する。

炭治郎、伊之助もそれに続き——この場に残ったのは、妓夫太郎、楓、天元だけになる。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

楓と天元は妓夫太郎の頸を飛ばす為剣技を繰り出しているが、妓夫太郎の動きは蠍カマキリのように変則的であり、攻撃を往なしている内に楓たちは切り傷を作る。

屋根上で戦っている堕姫と炭治郎たちも、堕姫の進化に苦戦してるようだ。——ここからが、上弦の陸の本領、といった所だろうか。

「お前ら違うなあ、今まで殺してきた柱と違う。お前らは生まれた時から特別な奴だったんだろなあ。妬ましいなあ、一刻も早く死んでもらいてえなあ」

「……オレに才能。——ハッ！オレに才能なんてもんがあるように見えるか？オレ程度でそう見えるならテメエの人生幸せだな。何百年生きていようが、こんな所に閉じこもつてりや世間知らずのままでも仕方ねえのか。この世界は広いんだぜ、凄え奴がウヨウヨしてる。得体のしれねえ奴、刀握つて二月で柱になるような奴もいる。オレが選ば

れてる？ふざけんじゃねえ。オレの手の平から今までどれだけの命が零れ落ちたと
思ってたんだ」

「……悪いが俺も才能なんてもんはない。俺は努力することでしたか力を付けられない人
間だぞ。そんな奴が才能？——いやいやある訳ない。今の俺が柱に就任出来たのも、皆
の力があってこそぞだ。俺は恩人に拾われるまで、何所ぞに転がっていた普通の人間だ
ぞ」

楓と天元の言葉に、妓夫太郎は唖る。

「……ぐぬう。だったらどう説明する。お前たちがまだ死んでいない理由は何だ？オ
レの血鎌には猛毒があるのに、いつまで経ってもお前らは死なねえじゃねえかオイ！」

「オレは忍びの家系なんだよ。耐性つけてるから、毒は効かねえ」

「俺の場合は家族に毒に詳しい人がいてな、一日耐毒訓練なんてしたことがある」

ギョと目を見開く天元。

一日耐毒訓練など拷問以外に考えられない。——楓は毒の耐性を身に付ける為に、し
のぶに毒を仕込んで貰った経験があるのだ。

「……そうかあ。お前らのそのねえ才能は、オレが取り立ててやるから心配すんなあ」

話は終わりだ。と言う風に、楓と天元、妓夫太郎の鎌がぶつかり合い火花を散らす。

そしてこの瞬間、屋上で戦っていた堕姫の頸が落される。——今この瞬間に妓夫太郎

の頸を落とせば、鬼殺隊の勝利だ。

——音の呼吸 五ノ型 鳴弦奏々。

——花の呼吸 肆ノ型 紅花衣。

天元は鎖の日輪刀を振り回し爆発を起こしながら突進し、楓はその爆風に紛れ込み下から上に斬り上げる花の斬撃で妓夫太郎の急所^頸を狙うが、

——血気術 跋孤跳梁。

——血気術 円斬旋回・飛び血鎌。

妓夫太郎は血鎌で天蓋を形成して楓たちごと後方に弾き、妓夫太郎は両腕から血鎌が螺旋状に回転し、広範囲に繰り出される。——だが、楓は待つていたのだ。このような強力な技、墮姫の頸を落とす瞬間を。そして、今までの戦闘を分析すると、血鎌の血気術を放てば反動があり、僅かに妓夫太郎は硬直する^脱という情報も得ているのだ。

もし上弦でも、自身の強力な攻撃^毒を全身に浴びれば、頸を守ることが出来ても、四肢は切断され動きが取れなくなるだろう。

——花の呼吸 陸ノ型 渦桃。

楓は空中で花の斬撃を空に放ち、その反動で体勢を整える。

そして血鎌が四方から、天元、楓に襲い掛かるが、

——花の呼吸 漆ノ型 鏡花水月。

型を繰り出すと、楓と天元を包むように周囲に花の残像が浮かび上がってから水鏡を形成し、天元と楓を四方から襲う血鎌を反射させる。

血鎌は周囲に反射され、血鎌が反射された場所は抉れ、妓夫太郎自身も血鎌が全身に直撃。そして血鎌は、妓夫太郎を斬り刻む。

「ぐおおおおおお——！」

そう呻きながら、妓夫太郎は血鎌の斬撃を浴び続ける。

血鎌の斬撃が終わると、妓夫太郎は四肢を欠損させ、残るは欠損させた体に繋がる頸だけだ。

そして、着地した楓は刀を構え走り出す。

——花の呼吸 肆ノ型 紅花衣。

下から上に描く花の斬撃で、楓が妓夫太郎の頸を空高く刎ね飛ばした。

終幕

妓夫太郎の頸を刎ねた楓だが、途端体がぐらつき平衡感覚が危うくなる。——血塗られた猛毒が徐々に体を蝕み始め、皮膚が爛れているのだ。耐毒を身に付けているとしても、この毒の濃度は命に関わる。

「栗花落、よくやった」

そう言ったのは、楓に歩み寄った天元だ。

だが天元の徐々に毒に蝕まれ、皮膚が爛れている。

「ありがとうございます」

刀を納刀してから、楓は一礼する。

楓は「でも」と言葉が続ける。

「俺たち死ぬんでしょうか？この毒の濃度は、通常の解毒剤では効果ありませんよ」

「オレもド派手に同意だ。このままじゃ、オレたちは死ぬな」

そう言うってから天元が同調する。

——そう。呼吸で毒の巡りを遅らせても、蝶屋敷に到着し、治療を受けるまで間に合わない。だがさすが柱と言った所だろうか、天元と楓には動揺が見られない。

その時、禰豆子を背負いながら炭治郎が走り寄る。炭治郎も進化した堕姫の攻撃により、所々に殺傷があり、額からは血が流れていた。そして——進化した堕姫の帯には毒が付与されていたらしい。

「楓さんっ、宇髄さんっ！——禰豆子、頼んだ！」

炭治郎はそう言ってから禰豆子を背から下ろした。

禰豆子は「ウー！」と鳴いてから、楓と天元の片手を握ると血気術で燃やす。

すると、爛れた皮膚は色を取り戻し、毒を消し去ったのだ。

「——……こりや一体どういふことだ？毒が消えた」

「多分、禰豆子の血気術が毒を飛ばしたんじゃないですか」

楓が平静に状況を把握する。

「……こんなこと有り得るのかよ、混乱するぜ」

「禰豆子は人を護れる鬼ですから。人間を回復させる血気術を発現していてもおかしくないです——てか助かったぞ、禰豆子」

楓が禰豆子の頭を左掌でグリグリ撫でると、禰豆子は「ウー！」と鳴いて、猫のように目を細めた。

楓は周囲を見回してから口を開く。

「俺は今から、上弦の陸の頸を確認してきます」

妓夫太郎に取って、妹の墮姫がこれ程まで取り乱すのを始めて見たのだろう。

「アンタなんかとはきつと血も繋がってないわよ！だつて、全然似てないもの！この役立たず！強いことしか取り柄が無いのに、負けたら何の価値もないわ！出来損ないの奴よ！」

憤慨した妓夫太郎は、普段思っていないことを口にする。

「ふざけんじやねえぞ！お前一人だつたらとつくに死んでる！どれだけオレに助けられた!?出来損ないはお前だろうが！弱い癖に上弦なんか名乗りやがつて、お前みたいな奴を今まで庇ってきたことが心底悔やまれるぜ！——お前さえいなけりやオレの人生もつと違つてた！お前なんて、生まれて——」

「——嘘だよ」

炭治郎は妓夫太郎の傍で片膝を突け、右手を妓夫太郎の口許に寄せ言葉を遮る。

「本当はそんなこと思つてないよ、全部嘘だよ。喧嘩しないで仲良くしよう、この世でたった二人の兄妹なんだから」

「そうだな。お前らのしたことは許されるものじゃない。お前らは罪を償う必要もある。——でも、お前たちにも悲しい過去があり、人間と決別したいことがあったんだろう。——人間と共存する道は有り得なかつたんだろう。……だがお前らは鬼であり兄妹だ、なら最期まで笑い合つてくれ」

楓の瞳からは慈悲の念が汲み取れた。

そして、炭治郎と楓の言葉に、堕姫は涙を流しながら先程の言葉を撤回する。

「…………お兄、ちゃん…………弱くて、ごめん…………なさい」

この言葉を最後に、堕姫はバサと消滅する。

「——梅！」

妓夫太郎が言った『梅』が、堕姫の人間だった時の名前なのだろう。

そして妓夫太郎は、声を震わせる。

「お、オレ…………梅に…………なんて…………」

「大丈夫だ。お前らは兄妹なんだろう？ 兄妹なら、喧嘩して仲直りするくらい心配ない」

「うん。たった二人の兄妹なんだから、何度でもやり直せるよ」

楓、炭治郎がそう呟く。

そして妓夫太郎が思い出すのは、人間だった頃『梅』と過ごした日々だ。

『お兄ちゃん…………寒い…………』

『大丈夫だ、オレがついてる。オレたち二人なら最強だしな』

雨の日も雪の日も、それを凌ぐ家がなく、兄妹は身を寄り添って温め合う。

『いただきます！』

『腹一杯食えよ』

『うん！』

溜めた金で飯を買い、兄妹で分け合つて食べる。

『お兄ちゃん大好き』

『ああ、オレも梅が大好きだぞ』

どんなに貧しくても、兄妹で笑い合つた時。

そしてこれが、妓夫太郎が思い出した記憶。

「……そうだと、いいなあ」

妓夫太郎は、両瞳から涙を流し声は穏やかだった。——妓夫太郎は、堕姫の後を追うように消滅する。

お帰り

上弦の陸の討伐を終え、楓は一直線に蝶屋敷に帰路に着いた。

部屋に入り、帰りを待っていてくれたのは、向日葵の刺繍を基調にした真菰と、紫陽花の刺繍を基調にしたカナエだ。

楓は「お帰りなさい」と言ってもらえると思っていたのだが、真菰とカナエの一声は「可愛くなつたね、楓」だ。まあ確かに、花魁姿の楓は、男性の10人中8人が振り向くと思われる容姿だ。

ともあれ、楓は部屋に入り刀を立て掛ける。

「上弦の陸討伐、お疲れ様」

「怪我、大丈夫かしら？」

対面に立つ真菰とカナエが、楓を覗き込むように見る。——見た所、楓の外傷は切り傷だけなんだが。

「何とかな。でも、刀の反動が気になるな」

楓が「花の呼吸 漆ノ型 鏡花水月」を使用したと伝えると、真菰とカナエは目を丸くする。——下級の鬼に試す前に、上弦と戦闘で実戦投入したからだ。未だに、花の

呼吸 漆ノ型 鏡花水月”は未知な部分が多いのだ。

「そっかあ。それじゃあ、近い内に刀鍛冶の里に赴くんだね」

「でも、丁度良いんじゃないかしら。刀も、自身の整備じゃ不安があつたんでしよう？」

「まあな」と頷く楓。

そんな中、楓は嫌あな予感がした。真菰とカナエが、じつと楓を見ていたのだ。こういう時は、楓にとつては不安事では無い。

「今度、私たちと楓で街に行つて見ない。もちろん——楓は女装して」

「いいわね。その時は、うんとおめかしをしましょう。——楓には、女性の声質に変えて貰いましょう」

「……それって露見したら、俺の人生詰むよね」

柱たち（しのぶは除く）に露見したら、柱合会議が楓に取つて拷問場所に成り変わるだろう。……柱たちの視線が恐怖でしかない。

「……ダメ、かな」

「……楓、お願い」

真菰とカナエの、目許まごに涙なみだを溜ためめた上目遣うめぢいに楓は「うつ」と口籠くちかる。

そう。楓は一度も、真菰とカナエの上目遣うめぢいをお願いを断つたことが無い——いや、断れない。が正しいのかも知れない。

「わ、わかった。今度の非番の日を合わせて街に行こう。——も、もちろん、俺は女装で………いいよ」

楓は最後に葛藤が合ったのだが、真菰とカナエの願いを断ることはしなかった。

それから、真菰たちが温めてくれた夜食を食べ、楓は風呂に入ることになったのだが「三人で入りましょう」ということになり、三人で風呂に入り、就寝の支度をし眠りに就くのだが——、

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

く翌朝。とある部屋く

翌朝になり、楓は仰向けの体勢で、襖越しの陽の光を浴び両目を両手で擦り開く。

首を左右に動かすと、着ていた服が乱雑に周りに散らばっていて、生まれたままの姿で布団を被り、横になり眠る真菰とカナエの姿が映った。

楓が一刻程考え込むと、徐々に顔が熱を持つ。

「——理性が溶けたんだっけな」

楓は内心でそう呟きながら頭を抱える。

でも、美女二人と共に居るだけでも理性を保つのを苦労するのに、えんれい艶麗な誘いを断れる男の方が珍しい。

すると、右手で右目を擦りながら真菰が目を開け、楓は横向けになり真菰を見る。

「楓。おはよう」

「おはよう、真菰」

「カナエは？」

「まだ寝てるな」

真菰は「そっか」と頷く。

そうしてから、楓は逆横向けになり、真菰は眠っているカナエの寝顔を見る。

その表情は幼い子のようだ。起きている時は、お姉さん。という感じなので、カナエの寝顔は新鮮に見える。

楓は悪戯心が湧いたのか、カナエを起こさないように頬をつんつんと突く。

その時カナエが「んん」と呟き、うつすらと両目を開ける。

「起しちゃったか？」

「……うん。実は、少し前に起きていたの」

カナエは最初に起きていたのだが、時間も早かったのもあり、二度寝をしてしまった
そうだ。

「そういえば、昨日お館様の鴉が楓の元に来たらしいけど、どうかしたの？」

楓は「ああ、そのことか」と言ってから頷いた。

そう。昨日就寝する前に楓に指令が下ったのだが、その内容は「多々渡る上弦遭遇、上弦討伐、多忙な柱業務に任務。——さすがの私も見逃す訳にはいかなくなった。楓はこれから一週間体を休めなさい。産屋敷耀哉」と簡素な文だが、優しい命令文のようだったのだ。

このことを話すと、カナエと真菰は「妥当な判断だね」と呟き頷いた。——楓は働き過ぎなのだ。体を休めないといつか壊れてしまう。

「じゃあ、今日街に行こうよ」

「そうね。そうしましょうか」

「……それって、俺が女装して。なんだよね?」

真菰とカナエは「そうだよ」と言ってから頷く。

楓が、着物等はどうするのか聞いた所、着物は真菰の花柄の着物であり、化粧を施すのは真菰とカナエだということ。

楓は「な、何とかなるだろ」と内心で呟く。

「じゃあ、そろそろ起きるか?」

「そうなんだけど。実は腰が痛くて……」

「真菰ちゃんもそうなのね。実は私もなの……」

「……………めんなさい」

楓は小さな声で呟く。

真菰とカナエは「ふふ」と笑う。

「怒ってないよ。私たちが沢山愛をちようだい。って言った結果なんだし」

真菰がそう言つて、カナエも「そうね」と同意する。

それから真菰とカナエは、楓に身を寄せる。……楓にとっては肌が直に当たるので心臓に悪いんだが。

「もう少ししたら起きましょう。それまではこのままで」

「そうだね、そうしよっか」

カナエと真菰の言葉を聞き、楓が「これって生殺しだよねっ！」と内心で叫んだのは当然だった。

それから一刻が経過し、楓たちは布団から起き衣服を纏い、部屋を出てから風呂に入つて昼食を摂りに向かうのだった。

花火

昼食を摂り終え部屋に戻ると、楓は化粧鏡の前に座る。これから、おめかし化粧の時間なのだ。

化粧道具を用意したカナエが楓の顔を化粧品で保温し、スポンジを使用し下地を満遍なく塗っていき、パフを使用しファンデーションで顔全体を整える。

通常ならこれで終了にするんだが、今日は楓をうんとおめかしすると決めていた。なので、両目の睫毛をビューラーで上方に整えマスカラを塗ると、楓の瞳がパツチりする。

付け髪エクステを使用し黒長髪に伸ばすと、見た目はお嬢さまだ。

「……私、女として負けた気分だわ」

「……楓、綺麗すぎだよ」

「……俺はどう対応したらいいのか困るんだが」

カナエと真菰の言葉に、楓は眉を下げる。

まあ確かに、女性に男性が「可愛いね、綺麗だよ」と言われても、反応に困るのは明らかであった。

く蝶屋敷、診療所く

楓たちが診療所に移動すると、備え付けられて机の椅子に座り、しのぶが熱心に本に視線を落していた。——おそらく、医学に関する書物だろう。

「しのぶさん」

しのぶは目を丸くし、笑みを浮かべる。

「可愛くなりましたね、楓」

やはり家族だ。

しのぶは、楓の女装鈴声を見破ったのだ。

「まあうん。色々複雑なんだけど」

しのぶは「そうでしょうね」と言ってから苦笑した。

ともあれ、楓が今日一日家を空けることを伝える。

「姉さんと真菰も家を空ける。ということでもいいんですね？」

「うん。出掛けるついでに、祭り花火を見て来るよ」

「わかりました。姉さんと真菰をお願いします」

「任せる。二人の安全は保障する」

「ふふ。でも、楓も自身の心配をして下さいね。今の容姿だと、男に口説かれる危険がありますから」

楓は「まさかあ」と呟くが、客観的に見れば有り得ない話でも無いのだ。

楓は診療所を後にし、下駄に履き替えてから門の前で待つ、カナエ、真菰と合流し街へ向かった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
く街く

街に到着する頃には、夕陽が落ちる時間帯になっていた。

街は明かりが灯り、煌びやかな雰囲気を纏うようになる。

「夜、街に顔を出すのは初めてじゃない?」

「確かに、いつもは明るい時間帯に買い出しを済ませちゃうしなあ」

真菰の問いに、楓がそう答える。

「あそこに行きましよう」と言ってから、カナエが楓と真菰の片手を握り目的の屋台に近付く。——その屋台とは、金魚掬いである。

屋台に備え付けられている長細い水槽の中には、赤、黒色の金魚たちが泳いでいる。

「お嬢ちゃんたち、一回どうだい?」

「あ、はい。じゃあ、お願いします。——カナエと真菰もいいわよね?」

楓が親仁の問いに、鈴のような声で答える。

それから、楓がカナエと真菰にそう聞くと「いいよ」と呟き、頷く。

金を払い、楓たちは左手にお椀を、右手にポイを持ち、水中にポイ沈め金魚を掬おうとするが、これが中々巧くいかない。——楓だけは、三回目の挑戦である。すると楓が、『全集中の呼吸』を始めるではないか。

「か、楓。金魚掬いで『全集中の呼吸』はダメだよ」

「そ、そうね。私たちも協力するから、正規に掬いましょうね」

「……わかった」

楓は、むう。と頬を膨らませる。それから、楓、真菰、カナエで顔が付きそうな距離で金魚を見定める。——狙いを定めてポイを水中から上げ、素早くお椀に寄せると一匹だけが掬うことに成功したのだった。

「や、やった」

「ふふ。良かったわね」

「やったね、楓っ」

そう言つてから、楓たちは笑みを浮かべる。そして、男性共の視線は釘付けである。……まあ、そんなことは露知らずの楓たちだが。

「じゃあお嬢ちゃんたち、一匹ずつでいいかい？」

「あ、はい。大丈夫です」

楓が鈴声でそう言ってから、楓たちのお椀から金魚を掬い、金魚を袋の中に移し手渡してくれる。

袋を受け取ってから楓たちは立ち上がり、この場から離れたのだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

金魚掬いが終わると、楓たちは射的や輪投げ、ヨーヨー釣りと、楽しい時間を過ごした。

そして現在、楓たちは花火が見渡せる丘で足を崩し座っていた。

「楽しかったね」

「こんなに楽しいのは、久しぶりかしら」

「俺もかなあ。最近は、上弦討伐や警備で時間が取れなかったからなあ」

その時、

——ドーーーーーン!!

と音が響き、赤、青、緑、オレンジと、様々な色の花火が夜空に綺麗な花を咲かせた。

「綺麗だね」

「そうね」

「だなあ」

月並みの言葉しか出てこなかったが、この景色を言い表すには十分な言葉だ。

最後の花火が打ち上がったのを見てから、楓たちは腰を上げ、蝶屋敷に帰路に付いたのだった。——その間は、手を繋ぐことは忘れずに。

刀鍛冶の里

刀鍛冶の里

楓が女装をして祭りに赴いた数日後、楓は隠の人々の案内で刀鍛冶の里に移動していた。

そして、刀鍛冶の里の場所は誰も知らない。鬼に襲撃されるのを防ぐ為だ。その上、道順の鴉も隠の人々も頻繁に変更するのだ。

「桜柱様。到着しました」

楓が隠の背から下り地面に降り立つと、隠の人が目隠しを取る。

そこは森林に囲まれ、周囲には立派な木製の家が点在している。

「あちらを左に曲がった先が長の家です」

「わかった」

楓はそう言ってから頷いた。

まずは、責任者に挨拶である。

「私はこれで失礼します」

「案内お疲れさん」

「いえ、柱の方を案内できて光栄でした」

隠の人は「ごゆっくり」と言ってから、ペコリと一礼してこの場を後にした。

楓が長の宿に向かい為に歩いていると、箱を背負った少年を見つめる。——上弦の陸を一緒に討伐した、竈門炭治郎だ。

「あ、楓さん。楓さんも、刀の破損を？」

炭治郎は、楓の隣まで歩み寄り呟く。

ちなみに、炭治郎が刀鍛冶の里に赴いた理由は、ヒノカミ神楽の連発で刃毀れしてしまつたのだ。

「刀の反動が心配になつてな」

炭治郎が「反動？」と言つて首を傾げたので、楓は上弦の陸との戦闘で新たな型を使用したことを話すと、炭治郎は目を丸くする。まあ確かに、花の呼吸の型を創るということは、派生とは違ふのだ。

「新たな型、ですか。凄いですね」

「そうか？まあ、俺だけで創つたものじゃないんだけどな」

——花の呼吸 漆ノ型 鏡花水月 は、楓、真菰、カナエが共同で創つた剣技。謂わば、愛の結晶つてやつである。

「今度、その剣技を見てみたいですよっ！」

炭治郎は、目をキラキラと輝かせる。

だが、「花の呼吸 漆ノ型 鏡花水月」は技を反射させる剣技なんで、剣技を繰り出しても、楓の周囲に花の残像と水鏡が浮かび上がるだけだ。

ともあれ、楓は両腕を組む。

「見せるのは構わないんだけど、効果が反射だからなあ」

「それでも構いませんっ！——それじゃあ、オレのヒノカミ神楽も反射することは可能なんですか？」

「できると思うぞ。『鏡花水月』は例外なくどんな攻撃も反射するからな」

「花の呼吸 漆ノ型 鏡花水月」は例外無く全ての攻撃を反射するので、鬼にとっては初見殺しの技なのだ。——ということは、上弦の式にとっても有効な技、とも言える。

——楓は少なからず、上弦の式と因縁があるのだから

そう話していたら、長が滞在すると思われる家に到着し、長の元へ向かうのだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「どうもコンニチワ。ワシは、この里の長の鉄地河原鉄珍。よろびく」

炭治郎、楓が正座している対面の座布団の上に座っているのは、ひよつとこのお面をつけた鉄珍と、その側近二人である。ちなみに、鉄珍は小さく子供のようだ。

「里で一番小さくって一番偉いのワシ。まあ畳におでこつくくらいに頭下げたってや。——あ、桜柱はいいで、ワシと対等な立場やから」

「竈門炭治郎です！よろしくお願ひします！」

炭治郎は、畳におでこをつける勢いで頭を下げる、その間、ゴンっ、と音が鳴るもの。石頭の炭治郎は全然痛くなさそうだ。

「桜柱の栗花落楓です。よろしくお願ひします」

楓は小さく頭を下げる。

「まあええ子たちやな。おいで、かりんとうをあげよう」

「ありがとうございます！」

炭治郎は、鉄珍から渡された深皿に入っているかりんとうを右手を使い口に運んで咀嚼するが、楓は「俺のことはお構いなく」と言つて、やんわり断る。

話を聞く所、炭治郎の担当鍛冶職人——鋼鐵塚螢が現在には行方不明であり、炭治郎の刀の研磨はすぐに取り掛かれならしい。

「あの子は小さい時からあんなふうや。すーぐ癩癩起こしてどつかに行きよる。すまんの」

「いえいえそんな！オレがすぐに刃毀れさせたりするからで」

「いや違う。——そのような鈍を作ったあの子が悪いのや」

鉄珍の威圧が、炭治郎の背筋を凍らせた。

その後炭治郎は、体の疲れを癒す為に鉄珍に温泉を薦められて、一足先にこの場を後にした。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「桜柱。鉄穴森は違う鬼狩りの刀を打ってる為、この場にいないんや」

「そうですか。でも、時間はあるので急がなくても大丈夫ですよ」

鉄珍は「すまんの」と言ってから、楓の刀の状態を聞く。

なので、楓が『漆ノ型』の反動がないか？と伝えたら、鉄珍が息を呑む仕草を感じた。

「その若さで新たな型を創るとわのお。ワシ、驚きじゃ」

鉄珍が言うには、鉄穴森の作業が終わり次第確認させるから、日輪刀を預かりたいということだった。なので、楓は腰に下げている日輪刀を鉄珍に渡す。その間は、鉄珍が貸してくれた日輪刀が代用品である。

受け取り鞘から刀を抜くと、その代用品になる日輪刀も、楓が使用していた日輪刀と遜色ない日輪刀である。

「日輪刀の整備が完了するまで、桜柱はそれを使って頂けるか」

「わかりました。では、整備をお願いします」

「ウム。任せてね」

楓は立ち上がってから刀を腰に差し、鉄珍に一礼してから長の家を後にしたのだつた。

おみやげ

里の長との挨拶を終えた楓は、刀鍛冶の里を回ることにした。

特段下街と何ら変わらないのだが、道行く人たちはひよとこのお面をつけているので、異世界と勘違いしてしまいそうになる。

そんな時、楓の瞳にある露店が目につく。

「へえ、装飾品屋か」

楓はポツリと呟く。

刀鍛冶の里では刀を打つだけでなく、装飾品も取り扱っているのだ。

ともあれ、楓はその店に歩み寄り、ドアを開け店内に入る。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

木造作りの店内には所狭しと装飾品が並べられていた。——その中でも楓の興味を引いたのは、様々な動物を象った簪だ。その色も、赤、青、緑、紫、黄色と、色鮮やかである。

楓はその中で、蝶、狐の簪を右手で取る。

「真菰とカナエさんにピツタリだなあ」

楓は、真菰とカナエが簪をつけているのを想像して、口許を緩ませる。

それから商品を見回し、蝶屋敷に皆に見合う装飾品を選択し、選んだ商品を手に会計に向かう楓。

「これの会計をお願いします」

「贈り物ですかい？」

楓は「そんな所です」と言ってから頷く。

まあ確かに、男性が装飾品を購入する目的は、ほぼ贈り物だろう。

「包装、お願いしてもいいですか？」

「はい」

楓は店員が各々に包装して貰い、袋に入れて貰ってから代金を払い、袋を右手でも持ちこの場を後にした。

それからも街を散策していたら、山脈の向こうの陽が傾き、綺麗な夕焼けを浮かべていた。



手配された旅館に到着した楓は、女将に案内の元に部屋に向かう。

案内された部屋に入ると、そこはやや広い和室である。その奥には、布団が一枚に浴衣。

「ここが、桜柱様にご用意された部屋でございます。何か不都合があれば、いつでも仰つて下さいませ」

「わかりました」

楓がそう言うのと、女将が「では、ごゆつくり」と一礼してから襖を閉め部屋を後にする。

楓は一通り身の周りの整理を終わらせると、浴衣を持ち温泉に向かう。——刀鍛冶の里の温泉は、健康に良いと有名だ。



旅館を出て、温泉へ繋がる坂を上げると、温泉には先客がいた。——その人物は、炭治郎と玄弥である。

ともあれ、楓は衣類を脱ぎ、温泉へ入って行く。

「あ、楓さん。さつきぶりですっ!」

炭治郎の隣でタオルを巻き湯に浸かっていた禰豆子も「ウー」と鳴いている。

そして玄弥はペコリと一礼すると、おずおずと口を開く。

「あの桜柱……様。兄貴、元気ですか？」

——兄貴。ということとは、不死川玄弥の兄は、風柱・不死川実弥なのだろう。

「元気だったぞ。てか、桜柱様とか止めない？」

だが、楓と玄弥はお互いの名前を知らない。

なので、玄弥と楓は「あー、そういえば」と思いながら自己紹介をする。

「俺は栗花落楓だ。よろしくな」

「不死川玄弥。——楓さんは兄貴と戦ったって噂に聞いたんだが、本当なんですか？」

楓が思い出すのは、就任挨拶の時に実弥と刀を交えたことだ。

その際、お館様の屋敷を破壊してしまい、真菰とカナエに説教をされたのは苦い思い出だ。

「一応な」

「強かったですか、兄貴？」

「強かった。てか、あの人弱点とかあんの？」

楓がそう言うと、玄弥は誇らし顔だ。

やはり、兄が褒められるのは自分のように嬉しいのだろう

「あの、楓さん。また今度、オレに稽古をつけてくれませんか？」

「なッ!?お前、柱の人に稽古をつけて貰っていたのかよッ！」

「あ、本当？でも、楓君は既婚者だし問題ないわねっ」

「(いや、問題ありますからね)」

結婚していても、それとこれは別なのだ。ある程度の耐性は、真菰とカナエのお陰で付いているが。

「甘露寺さんは刀の研磨で？」

「うん、そうだよ——楓君は？」

「刀の強度ですね」

蜜璃が「刀の強度かあ」と言った所で、炭治郎が合流した所で夜食を摂った。ちなみに、玄弥は用事がある為ということ、食事は三人で摂ったのだった。

襲撃

刀鍛冶の里に赴いてから数日が経過し、現在楓の部屋には、炭治郎、無一郎、楓が集まっていた。

その間炭治郎は、刀鍛冶の里に存在する「縁壺零式」という絡繰人形を使い鍛錬をしていたそうだ。何でも、腕を六本装着しないと「縁壺」という剣士の剣技の再現が出来ないとか。

しかし、戦国時代から使用されている「縁壺零式」は老朽化が進んでいて、炭治郎の鍛錬を最後に壊れたそうだ。

——炭治郎が頭部を破壊すると、そこからは三百年前に使用されていたと思われる刀が埋め込まれていて、それを鋼鐵塚が現在研磨しているらしい。

「で、何で俺の部屋にいるの？」

胡坐で座る楓が、対面に座る炭治郎たちにそう聞いた。

「桜柱は鉄穴森っていう鍛冶屋に刀を打って貰ってるんでしょう？なら、場所もわかると思うって」

無一郎が、ポーっとさせながらそう呟く。

すると、炭治郎が口を開く。

「鉄穴森さんなら、多分、鋼鐵塚さんと一緒にいるんじゃないかな？」

炭治郎は「一緒に探そうか？」と、無一郎に提案する。

確か炭治郎は、絡繰人形の頭部から現れた刀を筋骨隆々で姿で戻って来た鋼鐵塚に渡したのだ。鋼鐵塚は「鋼鐵塚家に代々伝わる研磨術で刀を研ぐ」と言つて、共に居た鉄穴森と一緒に何処かに姿を消した筈だ。

——そして無一郎は疑問に思う。炭治郎はお節介が過ぎるのではないかと。

「……何で君は、そんなに人を構うの？君には君のやるべきことがあるんじゃないの？」

「——人の為にするのは結局、巡り巡つて自分の為にもなつてるものだから。結局の所、オレの為でもあるんだよ」

無一郎は炭治郎の言葉を聞いて、目を丸くする。

「……何？今何て言つたの？今、今……？」

「へ？自分の為になるって」

「ウー！」

炭治郎の両膝の上で眠っていた禰豆子が目を覚まし、頭を上げると同時に、ゴーンと炭治郎の顎に直撃する。

「禰豆子！起きたか——」

無一郎は首を傾げる。

「うーん。その子何か、凄く不思議な生き物だなあ」

「えっ、変？」

「うん、凄く変だよ。何だろう、上手く言えない」

その時楓が、隣に置いてある刀を取り抜き戦闘態勢に入る。

その表情は厳しいものだ。

「……お喋りはそこまでだ。——敵が来てる」

炭治郎、無一郎は「え？」と眉を寄せ、刀を抜き戦闘態勢に入る。

そして、襖を開けてぬらりと入って来たのは涙を流した鬼だ。——そして、ここまで

気配の消せるとすれば、間違えなく上弦と判断出来る。

——桜の呼吸 壱ノ型 乱舞一閃——極。

楓が加速して放った一閃は鬼が飛び上がり天井に張り付く。鬼には、頸に切れ筋を入れただけだ。

——ヒノカミ神楽 陽華突。

炭治郎が刀を突き上げると、鬼は素早い動きで床に落ちる。

——霞の呼吸 肆ノ型 移流斬り。

無一郎が滑り込むように繰り出した斬撃が鬼の頸を飛ばすと、頸から一体、体が再生

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

楓が長の宿に到着すると、長は金魚の化け物に体を掴まれ持ち上げられていた。息はあるようだが、このままでは死に至る。

——桜の呼吸 壺ノ型 乱舞一閃——極。

——恋の呼吸 壺ノ型 初恋のわななき。

楓が一閃と刃の斬撃が壺を破壊する。

楓がその人物の着地点を見ると、そこには隊服姿の恋柱・甘露寺蜜璃が長細い刀をしならせている。

「鉄珍様っ！」

蜜璃は刀を投げ捨て鉄珍を受け止める。

「若くて可愛い娘に抱きしめられて何だか幸せ……」

声は掠れていたが、命には別状はないようだ。

それを見ていた楓は、溜息を吐き納刀するのだった。

正と悪

「弱き者を甚振る鬼蓄……不快、不愉快、極めり」

六体目。否、喜怒哀楽が一つになり「憎」の文字が書かれた五つの太鼓を輪のようにして背負い、象の牙の形状の棒を持った、雷神のような小さい姿。

憎珀天が木の龍を生み出し、半天狗を守るように囲む。そして、憎珀天が棒で太鼓を叩くと、半天狗を木で包み込む。

「——待て！」

炭治郎が半天狗にそう言うと、憎珀天が睨み付ける。

それは息が詰まる威圧感だ。

「——何ぞ？ 貴様、儂のすることに不満でもあるのか？ のう、悪人共めら」

「……どうして、オレたちが悪人……なんだ？」

憎珀天は右手を握り拳を作る。

「弱き者を甚振るからよ。先程貴様らは、手のひらに乗るような小さく弱き者を斬ろうとした。何と言う極悪非道、これはもう鬼蓄の所業だ」

「小さく弱き者……誰がだ」

炭治郎の額に青筋が浮かぶ。

「——ふぎけるな。お前たちの匂い……血の匂い！喰った数は百や二百じゃないだろう！その人たちが何をした？その全員が命をもって償わなければならぬことをしたのか!？」

炭治郎は再び刀を構える。

「大勢の人を殺して喰ってにおいて、被害者ぶるのはやめろ！捻じ曲がった性根だ！絶対許さない！……悪鬼め！お前の頸はオレが斬る！」

その時、ふわりと空から舞い立った楓が、炭治郎の隣に着地する。

そして刀を抜き、憎珀天に向けて構える。

「そうだな。お前は来世でやり直せ」

憎珀天は、ピクつと片眉を上げる。

「……柱か」

「まあな。桜柱・栗花落楓だ。——ああ、覚えなくてもいいぞ。お前はここで滅されるんだし」

楓の挑発に、憎珀天は青筋を浮かべ怒りに表情を浮かべる。

「……貴様、必ず殺す」

「殺せるならな」

その時、空から蜜璃の声が届き、楓の隣に着地する。

「楓君早すぎだからねっ！」

そう抗議しながら、蜜璃はぶんすかと頬を膨らませる。

——そう。楓は足の負担にはならないように、“乱舞一閃”を連発してこの場まで急行したのだ。そして蜜璃は、その速度に着いて行けずに遅れたのだ。

蜜璃は憎珀天に目に向けて、目を輝かせる。

「キヤー！何あの子!? 幼い子鬼さん!?!」

「いや、鬼ですから。——上弦の肆です」

楓が蜜璃に、先程確認した数字を伝える。

「じよ、上弦!? あんなに幼い子が!?!」

蜜璃は目を丸くする。

「……鬼に見た目は関係無いでしょう?」

楓の言葉に蜜璃はハツとする。

「そ、そうね。鬼に見た目は関係ないものね。よし、お姉さん頑張っちゃうぞ！」

蜜璃は日輪刀をギュツと握る。

……何て言うか、命を賭けている戦いなのに空気がふわふわし過ぎである。

「……黙れ、あばずれが」

——血気術 狂鳴雷殺。

「あ、あば……お姉さん傷ついたんだから！」

——恋の呼吸 参ノ型 恋猫しぐれ。

蜜璃は迫り来る攻撃自体を斬り防ぐ。

この時、楓が炭治郎に合図をする。

「炭治郎。奴は俺と甘露寺さんの任せて、本体の頸を刎ねろ。多分だが、あいつは罔見たいなもんだろう？」

「……はい、奴は頸を刎ねても死にません。オレたちは本体の頸を刎ねますので、この場はお任せします」

これ会話が終わり、炭治郎、禰豆子、玄弥は半天狗本体を追い、楓と蜜璃は憎珀天を抑えることになったのだ。——憎珀天がチツと舌打ちをし、炭治郎たちに放った攻撃は、蜜璃の刃が斬り裂く。

そして、楓が憎珀天の懐に飛び込もうとするが、憎珀天が棒で太鼓を叩くと団扇のよな形をしたクレーターが出来、楓を地に押し付ける。

だが甘い、この程度で柱が殺される筈が無い。

——花の呼吸 式ノ型 御影梅。

楓が周囲に放った花の斬撃が、楓を守る刃となり憎珀天の攻撃を凌ぐ。

「柱となれば、今の攻撃は通用せんか……—ならば、一掃するのみ」

—血気術 無間業樹。

地面から大量の木で作られた龍が現れ、楓、蜜璃を襲う。

—花の呼吸 五ノ型・改 徒の勺薬。

—恋の呼吸 五ノ型 揺らめく恋情・乱れ爪。

楓は自身に迫る龍を花の十八連撃で撃ち落とし、蜜璃は龍を斬り刻みながら憎珀天に迫る。

そして、自身のしなやかな刀を憎珀天に巻き付け切断しようとした瞬間、憎珀天は口を開き、楓が叫ぶ。

「甘露寺さん！そいつは本体じゃないんだ！」

楓は「あの時情報が伝えられていれば」と内心で呟くが、後の祭りである。

まあ確かに、蜜璃は技を放った直後だったので、仕方無いと言ってしまったらそこま
でなんだが。

「（えっ！やだホントに!?判断間違えちゃ……）」

憎珀天はニヤリと笑う。

—桜の呼吸 壱ノ型 乱舞一閃—極。

楓はその場から加速し、蜜璃の目の前で停止する。

そして楓は刀を構える。

——血気術 狂圧鳴波。

——花の呼吸 漆ノ型 鏡花水月。

憎珀天は口から無数の雷撃のような攻撃を放つが、楓の周囲には花の残像が現れ、それが水鏡を作り、技を反射させる。

楓の予想では、この攻撃が直撃すれば本体では無い憎珀天は死にはしないだろうが、体が細切れになり再生に時間が掛かる筈だ。細切れになった所からは技の持久戦に持っていけるはずだ。

「こ、攻撃を反射……だと——!?!」

憎珀天は驚愕な表情を浮かべ、憎珀天は体を崩壊させる。

——桜の呼吸 式ノ型 千本桜。

細切れになった上から無数の刃の斬撃を降らせるが、肉が蠢き体を再生させようとす
る。

「甘露寺さん、ここからは持久戦です。体が再生しないように攻撃を与え続けて下さい」

「わ、わかったわー!」

蜜璃は目をキラキラ輝かせる。

「と、ところで、今の技って花の呼吸には無いわよね?」

「そ、そうです。俺たちが創った技ですから」

柱全員は、楓の嫁が真菰とカナエだということは知っている。なので『俺たち』の意味も解った筈だ。

そして蜜璃は「キヤー」と声を上げるのだった。……何と言うか、何とも締まらない戦闘であった。

克服

「ぐあああ！振り落とされるな！頑張れ、頑張れ！木の……アレ！ヘビトカゲ竜みたいのがこつちへ来ない内に！」

炭治郎たちは、蠢く本体が隠された木に振り落とされないように木の部位を必死に掴む。

「甘露寺さん、楓さんが子鬼の動きを止めている内に！」

その時、完全に木が動きを止める。

だが、動きが止まったとしても、本体を包み込んでいる木の塊は高い位置にある為、刀が届かせることが出来ない。

すると、禰豆子の爪の攻撃で木を半ばから切断し、着地し体勢を整えた炭治郎が禰豆子の血で赤く染まった刀を振るう。

——ヒノカミ神楽 炎舞。

半天狗が隠れているであろう中心部の木を縦に斬りつけ、玄弥と禰豆子が切断された木を支える。——だが、木の内部に半天狗の姿が無い。

「(いない！また逃げた！どこだ！どこだ！……近い)」

炭治郎が匂いを追った先には、ヒイイ、と叫び声を上げながら前方へ逃走する半天狗の姿。

そんな姿を見て、炭治郎は青筋を立てる。

「貴様アアア！逃げるなアア！責任から逃げるなアア！お前が今まで犯した罪、悪行！その全ての責任は必ず取らせる！」

「いい加減にしろ！この、バカテレエエエ！」

それを聞いていた玄弥が、近場に生えていた木を根っ子から引き抜こうとする。

「ガアアアア！クソがアアア！いい加減死んどけお前っ……空気を読めええええ！」

そう言うてから、玄弥は引き抜いた木を投げ、追い打ちと言うように何でも木を根っ子から引き抜き、半天狗に向け投げつける。

「ギヤアア！」

木を避けながら、半天狗が声を上げる。

禰豆子は走り出し、倒れた木を場所を飛んで半天狗に鋭い右爪を振り下ろす。

「ヒイイイ！」

半天狗は禰豆子の攻撃を躲して、声を上げながら前方に逃走する。

その速さは、通常では考えられない速度だ。

「足速エエ！何だアイツ！クソがアアア！追いつけねエ！」

玄弥が半天狗を見ながらそう呟く。

炭治郎はこの時、楓との稽古を思い出ししていた。

『桜の乱舞一閃と、雷の霹靂一閃は同じなんですか?』

『ん、そうだな。言ってみれば、乱舞一閃は霹靂一閃の模倣だしな』

だからこそ、技の構造もほぼ同じだと楓は言っていたのだ。

『でも、真似るとしたら善逸からコツを聞いた方がいいぞ。——模倣より、正式な方がいいだろ? な、善逸?』

『えっ!? オレですか!?!』

善逸は炭治郎のキラキラとした眼差しを見て、若干たじろいだから口を開き、霹靂一閃の要所を伝えた。

『えつとだな。雷の呼吸霹靂一閃は、筋肉の繊維一本一本、血管の一筋一筋まで空気を巡らせるイメージで、力を両足に溜め込んで爆発させるような認識かな』

『じゃあ、楓さんも同じ認識で?』

『似たり寄ったりって所だな』

これが稽古中にあつた他愛も無い会話だ。

今ここで、この時の会話が役に立つとは予想外だ。

「——筋肉の繊維一本一本。血管の一筋一筋まで力を溜め、一気に——」

炭治郎が地を踏み込み蹴ると、爆発的に加速し半天狗の頸に刀を喰い込ませる。

「お前はああ！儂が可哀相だとは思わんのかアアアア！弱い者いじめをオするなああああ！」

突然巨大化した半天狗が炭治郎の口許を驚掴みにする。

その時、玄弥が半天狗の腕をガシツと掴み、炭治郎の頭部を潰そうとするのを抑える。

「テメエの理屈は全部クソなんだよ！ボケ野郎がアアア！」

半天狗は、玄弥と炭治郎を蹴散らす為に口を開き、口内に高出力の光を溜めようとする。

だが、禰豆子が燃える炎を半天狗にかざし、力が弱った所を玄弥が半天狗の両腕引き千切り拘束を解き、炭治郎を解放する。

「うわあああ！」

刀を半天狗の頸に喰い込ませた炭治郎と、勢いに乗った禰豆子が崖から落ちる。

「炭治郎っ！禰豆子っ！」

玄弥が崖から見下ろし叫ぶ。

地面へと落下したのは半天狗と禰豆子だけであり、炭治郎は崖付近に茂る木に引っ掛かっていた。

だが、半天狗はそれに見向きもせず前方へ移動する。その先には、刀を背負う里の者

たち。

「待て。逃がさないぞ……。地獄の果てまで逃げても追いかけて頸を斬るからな……！」

だが、刀は半天狗の頸に喰い込んだままであり、炭治郎が動けたとしても頸を斬る手段が無い。

その時、ドスツと炭治郎の目の前に刀が直立に刺さる。

「炭治郎それを使え！」

刀を投げたのは、崖の上に居る無一郎だ。

その隣には、鋼鐵塚の姿もある。

「返せ！まだ第一段階までしか研いでないんだ、返せ！」

「夜明けが近い！逃げられるぞ！」

「クソガキ！使うな、返せ！」

「(時透君、ありがとう！)」

内心でそう呟いてから炭治郎は木から降りて刀を拾い、先程の要領で足に力溜め加速し、

——ヒノカミ神楽 円舞一閃。

刀を振り半天狗の頸を刎ねるが、夜が明けようとする。

この開けた場所では、禰豆子を陰に隠さないと消滅してしまう。

「——夜が明ける、禰豆子を早く日陰に」

炭治郎は振り向き禰豆子を見るが、禰豆子は炭治郎の元へ走り寄る。

「逃げる！ 禰豆子……！ 日陰になる所へ！」

「うううっ！ ううう！」

禰豆子が後方を指差すと、頸を刎ねた筈の半天狗が活動を続けている。

奴が手を伸ばす先には、半天狗から逃げる里の者たち。

「うわああああ！」

「逃げる！ 逃げる！」

「死んでない！ 頸を斬られたのに！」

炭治郎が頸を刎ねた半天狗の舌には「恨み」。

本体は「怯え」だったはずなのだ。

「しくじった！ 止めなければ……アイツに止めを！」

炭治郎が半天狗の方を振り向いたと同時に、太陽が完全に上がろうとする。

「ギャッ！」

太陽が禰豆子の皮膚を焦がす。

炭治郎は迷った、禰豆子を助けるか。里の者たちを助けるかを。

その時、禰豆子が炭治郎を前方に蹴り飛ばす。

『私のことはいいから。鬼を斬って』

と言う、禰豆子の答えなのだろう。

その証拠に、禰豆子は太陽に焼かれていながらも微笑んでいた。

そして、炭治郎は半天狗を見据え着地する。

「——嗅ぎ分ける、遠くには逃げていない。本体がいきなり遠くへ離れたら匂いで気づくはず。近くにいる、どこだ、匂いで捉えろ)」

炭治郎は両目から涙を流しながら、嗅覚を集中させる。

「（そこか。まだ鬼の中にいるな。そうか、もつともつと鮮明にもつと）」

そして見つけた、半天狗の本体は心臓の中だ。

「（今度こそお終いだ、卑怯者。——悪鬼!）」

前方では、半天狗が里の者に襲い掛かろうとする。

炭治郎は地を蹴って加速し、半天狗の心臓に向けて頸ごと横に斬り裂く。

「——命をもって罪を償え!」

完全に消滅を確認し、炭治郎はその場で両膝を地につける。

……半天狗には勝った。禰豆子を犠牲にして。

「竈門殿! 竈門殿!」

里の者が後方を指差している。

炭治郎が後方を振り向くと、禰豆子が太陽の下で佇んでいた。

「お、お、おはよう」

そう。——禰豆子は太陽を克服したのだ。

炭治郎は禰豆子の元まで走り寄る。

「禰豆子……。よかった、大丈夫か。お前……人間に」

「よ、よ、よかった。だい……。だいじようぶ。よかったねえ」

牙はそのままだが、禰豆子は言語能力が回復していた。

炭治郎が禰豆子を抱きしめると、その場で力尽きたように項垂れ里の者たちが支え

る。

こうして、上弦の肆の討伐が終了したのだ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「もうやだ。いつまで再生するのよお。てか、再生速度上がってるよねえ」

蜜璃は再生する肉片を攻撃し憎珀天の再生を阻止し、涙目で声を上げる。

憎珀天を細切れにしたのはいいが、血気術も残っており、それを破壊しながら本体が

再生しないように攻撃を加えているのだ。もしこのまま本体の再生を許したら、憎珀天

と戦うことになる。

楓と蜜璃はかなりの疲労を蓄積しているのです、それだけは何としても阻止したい。

「炭治郎たちが本体の頸を刎ねるまでの辛抱ですからっ！」

——桜の呼吸 式ノ型 千本桜。

——花の呼吸 五ノ型・改 徒の勺薬。

楓は襲ってくる木々を無数の桜の斬撃で斬り刻み、花の十八連撃で憎珀天の肉片を攻撃し再生を食い止める。

——恋の呼吸 五ノ型 揺らめく恋情・乱れ爪。

——花の呼吸 式ノ型 御影梅。

蜜璃が日輪刀を鞭のように撓らせ、憎珀天の再生を食い止め、楓が襲ってくる木々を周囲に放つ斬撃で蜜璃と自身を守るように放つ。

その時、パスツと紙屑のように憎珀天の体、血気術が消え去る。

どうやら、炭治郎たちが半天狗の本体の頸を刎ねたようだ。

「お、終わった」

蜜理は、その場で両膝をつけ地面に座り込む。

楓も溜息を吐くと、刀を納刀するのだった。

こうして、刀鍛冶の里の襲撃を阻止することに成功したのだ。——だが、里の被害も

僅かに出てしまった。

小さな命、柱稽古

玉壺、半天狗を倒した後、楓、蜜璃、無一郎、炭治郎、禰豆子、玄弥は集まり喜びは分かち合った。

だがそれも束の間、刀鍛冶の里の復興が急がれた。夜になれば、再び鬼の襲撃があるかも知れないのだ。なので、失った者たちを悼む時間は無い。直ぐ様、里の拠点を移す必要があるのだ。幸いなことに、刀鍛冶の里の外では「空里」というものを幾つも作っているの、刀鍛冶の里はその一角に移動することになったのだ。

そんなこともあり、楓たちは里の復興の手助をしてから里を後にしたのだった。

—— 閑話休題。

鉄穴森から新たな刀を受け取り刀鍛冶の里を後にした楓は、無事を知らせる鴉を蝶屋敷に飛ばし、帰りの道中鴉から手紙が届けられた。

差出人はカナエと真菰であり、その内容は『刀鍛冶の里の件で大変だったと思うけど、蝶屋敷に帰ったら大事な話があるんだ』というものだ。

それを見た楓は「大事な話？」と首を傾げる。

大事な話だと言うことは、*「花の呼吸 漆ノ型 鏡花水月」*のことだろうか？
そんなことを考えながら、楓は蝶屋敷に帰還したのだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

蝶屋敷に帰還した楓は玄関で靴を脱ぎ、自室に繋がる廊下を歩き部屋に向かう。

部屋の前に到着し襖を開け部屋に入ると、花柄の着物を身に纏った真菰と、蝶の刺繍を基調にした着物を身に纏ったカナエが隣に座り、テーブルに書物を置き目を通していった。

ともあれ、畳の上に座っていた真菰とカナエは顔を上げる。

「楓、お帰り」

「お帰りなさい、楓」

真菰とカナエは「大丈夫だった？」と言葉を掛け、楓は「大丈夫だ、問題ない」と返す。

ともあれ、楓は刀を立て掛けてから隊服を脱ぎ、着物に着替えてから真菰とカナエの対面に座る。

「ところで話して？」

楓がそう言うと、真菰が口を開く。

「実はね。私とカナエ——月の物が来なくなったから、しのぶに診断をお願いしたの」

「診断した結果、私たち——妊娠、約五週間目だったのよ」

真菰とカナエの言葉を聞き、楓は目を丸くしその場で固まる。

「……………妊娠？」

楓は、やつとの思いで『妊娠』と言う言葉を口にする。

てか、真菰とカナエをほぼ同時に身籠らせる楓は、ある意味凄いかも知れない。

「うん、妊娠」

「私たちのお腹の中には、楓の子がいるのよ」

楓は「俺の子？」と血迷ったことを思ったが、真菰とカナエは、楓としか交わっていない。

だから、他人の子、というものは有り得ないのだ。

そして楓は、重い口を開く。

「……………真菰とカナエさんは、お腹の子をどうしたいんだ？」

「もちろん産みたい」

「私も産みたいわ。私たちの愛の結晶だもの」

真菰とカナエは、楓の問いに間髪入れずに答える。

既に真菰とカナエの意思は固まっているのだ——この子を産みたいと。

だからこそ、楓が反対をする理由はない。

「……そうか。——蝶屋敷の皆は、妊娠のことは？」

楓が「知っているのか？」と問いかけると、事情を知るのはしのぶだけ、ということだ。

楓たちは、妊娠のことはお館様柱たちと蝶屋敷内部だけに知らせよう、という方針に決める。

「私たち、一児の母になるんだね」

「そうね。予想より随分早かったけれど」

真菰とカナエが嬉しそうに語る。

まあ確かに、真菰とカナエは十代であり、世間の目で見ればかなり早いだろう。ちなみに、楓も十代であるが。

「しかしそうなると、鬼殺隊士は引退ってことか？」

真菰は、右手人差し指を口許に当てる。

「そうだなあ。鬼殺隊士は引退で、お腹が大きくなるまでは蝶屋敷のお手伝いになるかも」

「私も真菰ちゃんと同じかなあ」

カナエは「軽い任務も無理そうだしね」と付け加える。

カナエは柱を引退しても、リハビリで『全集中の呼吸』が僅かな時間使用できたので、任務に出ていた経験があるのだ。

ともあれ、楓たちは立ち上がり、報告の為に居間へ向かう。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

～蝶屋敷、居間～

蝶屋敷の居間には、怪我をした炭治郎を始め、この蝶屋敷に住む家族がテーブルを囲むように座っている。

その中心に座るのは、楓、真菰、カナエだ。

「今日は皆に報告があつてこの席を設けさせて貰いました」

「実は、私とカナエのお腹の中では、新たな命を授かっているの」

「だから、二人を気に掛けてやって欲しんだ」

カナエ、真菰、楓の順で口を開いた。

開口一番に口を開いたのは善逸だ。

「えええええええ——ッ！（汚い音声）命を授かるつてっ、妊娠ですよねっ！」

「ほ、本当ですか！」

きよがそう言うてから、すみたちが「おめでとうございます！」と祝福してくれて、炭

治郎やカナヲも「負担があると思われれることは任せて下さい」と喜んでくれる。
——そう。これが、蝶屋敷の一幕だ

痣と報告

妊娠の知らせから数日後、産屋敷邸では緊急柱合会議が開かれた。柱たちが集まる中、最後に屋敷に足を踏み入れたのは楓だ。

——そう。真菰とカナエが悪阻の期間に入り体調を崩し始めたので、柱警備が終了した楓は、看病の為蝶屋敷から動こうとはしなかったのだ。

でもまあ、真菰とカナエの言葉である『楓は柱であり、この子たちの父親になるんでしよう。しっかりとしなきゃ』と聞き届け、重い足を動かして産屋敷邸に赴いたのである。「すいません。遅れました」

楓が口重たそうに言ってから、しのぶの隣に腰を下ろす。——そして、事情を把握しているしのぶは溜息を吐く。

すると、実弥が右頬に手を添える。

「あーああ。羨ましいことだぜエ。何でオレは上弦と遭遇しねエのかねエ」

そう呟き、実弥は楓を見る。

確かに楓は、上弦の式、参、肆、陸と遭遇しているのだ。——柱の中では、最多の遭遇率なのだ。

「こればかりは遭わない者はとんとない。甘露寺と時透、栗花落は体の具合はどうなんだ？」

蜜璃、無一郎、楓は「問題ない」と答える。

「死なずに上弦二体を倒したのは尊いことだ」

行冥がそう言った所で前の襖が開き、そこから産屋敷あまねが姿を現す。

「本日の柱合会議、産屋敷耀哉の代理を産屋敷あまねが務めさせて戴きます。——そして、当主の耀哉が病状の悪化により、今後皆様の前へ出ることが不可能となった旨、心よりお詫び申し上げます」

あまねの言葉を聞いた柱たちは、バツと前に両の手をつけ姿勢を正す。

「承知……。お館様が一日でも長くその命の灯火を燃やして下さることをお祈り申し上げます……。あまね様も御心を強く持たれますよう……」

行冥が柱を代表して答え、あまねは両目を一旦閉じた。

「柱の皆様には、心より感謝申し上げます」

あまねが会議内容について話し始める。

「既にお聞き及びとは思いますが、日の光を克服した鬼が現れた以上、鬼舞辻無惨は目の色を変えてそれを狙ってくるでしょう。己の太陽を克服する為に。——だからこそ、大規模な総力戦が近づいています」

彌豆子が太陽を克服したことで、鬼の出現がピタリと止まったのだ。——これぞ、嵐の前の静けさというものだ。

——鬼と人。お互いに、全てをぶつけ合う刻限が近づいてきている。それは、どちらかが滅ぶ程の壮絶な戦いだ。

「上弦の肆、伍との戦いで、時透様、甘露寺様に独特な紋様の痣が発現したという報告が挙がっております」

蜜璃が「痣？」と呟くと、あまねは一度頷き言葉を続ける。

「戦国時代。鬼舞辻無惨をあと一歩という所まで追い詰めた始まりの呼吸の剣士たち。彼ら全員に、鬼の紋様に似た痣が発現していたそうです」

——痣者は、普段以上の力を引き出すことが可能になるのだ。

そして、驚愕で息を呑む柱たち。

「伝え聞くなどして、御存じの方は御存じです」

「オレは初耳です。何故伏せられてたのです」

あまねにそう聞いたのは、実弥だ。

「痣が発現しない為、思い詰めてしてしまう方が随分といらっしゃいました。それ故に、痣については伝承が曖昧な部分が多いのです、当時は重要視されていなかったせいかも知れませんか。——鬼殺隊がこれまで何度も壊滅させられかけ、その過程で継承が途

切れたのかも知れません。ただ一つ、はつきりと記し残されていた言葉があります」
あまねは一度言葉を切つてから、再び口を開く。

「——痣の者が一人現れると、共鳴するように周りの者たちに現れる」

そして、この世代で最初に痣を発現したのは、竈門炭治郎だ。

「ですが、上弦の陸との戦闘に於いて、桜柱・栗花落楓様。音柱・宇髄天元様には現れなかつた。でも里の一件で、恋柱・甘露寺蜜璃様、霞柱・時透無一郎様が発現させた。——甘露寺様、時透様。宜しければ御教示願います」

あまねが小さく頭を下げる。

あまねの頼みに、蜜璃がはい！と意気込み、力強く頷いた。

「あの時はですね、確かに凄く体が軽かつたです！え——つとえ——つと——ぐあああ——つてきました！グツとしてぐあ——つて！心臓とかが、ばくんばくんして耳もキーンとして、メキメキメキイッて！」

——沈黙が屋敷を包み、この場に居る者全員行冥は除くの目が点になる。

蜜璃は気まずい雰囲気を感じ取つたのか「すいません」と呟き、恥ずかしさの余りに上体を倒し、「穴があつたら入りたい」と言つて羞恥で畳に顔を埋める。

蜜璃の代わりに、無一郎が口を開く。

「痣というものに自覚はありませんでしたが。あの時の戦闘を思い返して見た時に、思

い当たること、いつもと違うことが幾つかありました。——その条件満たせば、恐らく痣が浮き出す。今からその方法を御伝えします」

無一郎曰く、痣を浮き出させる為には心拍数と体温が鍵となるらしい。

そして無一郎は、里での戦闘で怒りによつて心拍数が二百以上に跳ね上がり、体は燃えるように熱かった。その体温は蝶屋敷での治療で測つた際に出た、三十九度の高熱と同じ体感だったのだ。

しのぶが言うには、心拍数二百以上、体温三十九度は人が死に兼ねない状態だと断定し、無一郎は「そこから死ぬか死なないかが、痣発現の分かれ道」になると断言した。

「チツ。そんな簡単なことではないのかよオ」

「これを簡単と言つてしまえる簡単な頭で羨ましい」

義勇の言葉に実弥が「何だど?」と言つて義勇を睨むが、義勇は「何も」と素知らぬ顔だ。

「では、痣の発現が急務となりますね」

「御意。何とか致します故、お館様には御安心召されるようにお伝え下さいませ」

しのぶと行冥がそう言うのと、あまねが小さく頭を下げる。

「ありがとうございます。——ただ一つ、痣の訓練につきましては、皆様にお伝えしなければならぬことがあります」

あまねが言うには、痣を発現した者は例外なく——二十五歳までしか生きられない、とのことだった。

言つてしまえば痣は寿命の前借りであり、その寿命を戦闘能力に変換し命を燃^{鬼と戦}やすのだ。

「では、もう一つの話題に入りましょう——栗花落楓様、お願いできますか？」

「(……え？この空気の中、あの話をするの?)」

確かに、柱たちが揃っているので良い機会だと思うが「別の形がよかつたなあ」と思う楓である。

——でも、こんな時だからこそ、なのかも知れない。

なので、楓が口を開く。

「実は、この度父親になることが決まりました、一応、柱として御報告をと」

暫しの沈黙が流れ、蜜璃が両手を両頬に当てる。

「キャ——っキャ——っ！楓君が父親つてことは、真菰ちゃんとカナエちゃんが妊娠してるのねっ！」

「っ！ド派手にめでてえ！しかし、餓鬼を栗花落に先越されるとはなっ！」

と、天元が愉快そうに笑う。

「ええ……妊娠つて早くない？」

確かに、無一郎が言う通り世間の目ではかなり早い。——いや、早すぎると言つても過言ではないが。

「ふむ。——安産祈願の御守りが必要だな」

義勇はいつも通りの無表情で呟くが、内心では喜びに満ち溢れていた。

同門の妹弟子が身籠つたのだ、これが嬉しくない筈がない。

「南無……新たな命を授かるとはめでたい限り……」

行冥は両手で数珠をじゃらじゃらと鳴らし、両目から涙を流す。

「……………」

楓の発言が衝撃だったのか、小芭内と実弥は声も無く固まっている。

「改めておめでとうございます、楓。姉さんと真菰を幸せにしてあげてね」

楓の隣に座るしのぶが、そう言ってから微笑んだ。

それぞれの反応が落ち着いた頃、あまねがコホンと咳払いをして話し出す。

「御三方は先日、当主耀哉に報告に来て下さいました。現在、鱗滝様と胡蝶様のお腹の中に御子さんがいらつしやることに。——当主耀哉も、大層喜んでおいででした」

その時蜜璃が「ハイ！質問です」と楓に問いかける。

「楓君たちつて、式は挙げてなかったわよね？」

「そうですね。まあ、形緒だけでも取ってるんで問題ないかと」

だが蜜璃が言うには「女の子は白無垢を纏うのが夢でもあるのよ」とのこと。ならば、何所かのお店で貸し出して貰って、写真に収めるか。と、内心で考えを出す楓である。ともあれ、一通りの質問が終わるとあまねが退出することになり、帰ろうと席を立とうとした義勇を楓が残らせ、柱たちで輪を作り向き合った所で行冥から提案が出た。それは——柱稽古というものだ。普段の柱たちは、継子以外には稽古をつけなかつた。

理由は単純、多忙の身であるからだ。

柱は警備担当地区が広大な上に、鬼の情報収集や自身の稽古、その他にもやるが多かつたのだ。

しかし先も述べた通り、禰豆子の太陽克服以来、鬼の出現がピタリと止まっている現在、柱は夜の警備と日中の稽古のみに焦点を絞ることが出来るのだ。

「総力戦となる以上、隊員たちの実力の底上げは必要だ。やり方は各々に任せるが、内容は極力重ならない方が良かろう」

「ンなら、稽古内容を決めていこうぜエ」

「そうですね。姉さんたちにも協力を仰ぎましょう」

確かに、真菰は準柱、カナエは元柱だ。

彼女たちの助言は力になるはずだ。

このようにして、柱稽古の内容が決まっていたのだった。

祈り

緊急柱合会議から翌日。蝶屋敷の門前にとある客人が訪れていた。

——その人物は、真つ赤な天狗の面で顔を隠し、青い羽織を羽織り、その柄は波が打っている。そして腰部には日輪刀。名前は——元水柱・鱗滝左近次。

真菰の育ての親であり、師匠。楓とカナエには、義父に当たる人物である。

「楓たちにお目通り願いたいんだが、本日は蝶屋敷にいらつしやるか？」

鱗滝は、門前で出迎えたアオイにそう言葉を掛ける。

出迎えたアオイは赤い天狗の面を見て声を上げそうになったが、平静を保ち口を開く。

「楓様たちはいらつしやると思います。本日はどのような御用件で？」

「うむ。——妊娠の件で謁見したくてな」

鱗滝は、蝶屋敷の面々が妊娠の件について知っていると文で確認済みだ。なので、蝶屋敷内部でなら話を公にしても問題はないだろう。

妊娠の件、と聞いてアオイは目を丸くしたが、妊娠のことを知っているとなれば、楓たちの深い関係者なのだろう。

の使い所がアレなのは黙認である。

「そ、それにしても多いよね」

真菰が焦ったように呟く。

——まあ確かに、鱗滝、張り切り過ぎである。

「多い方が祈願があるはずだと、儂は思ってる」

——鱗滝、それは違う。御守りに個数は関係ない。

「そ、そうですね。私たちの為にありがとうございます、お義父」

カナエも焦りを伴いながら呟く。

カナエの言葉に、鱗滝は「うむ」と力強く頷く。——鱗滝、子が絡むとポンコツ過ぎ

ないか？

ともあれ、御守りを受け取る楓たち。

「ところで、お前たちは式は挙げないのか？」

これは、鱗滝の率直な疑問だ。

「今は挙げないつもりです」

「式を挙げるとすれば、鬼舞辻無惨を滅した後になるかなあ」

「それまでは、現状維持になりますね」

楓、真菰、カナエの順で答える。

鱗滝も「なるほど」と言ってから頷く。確かに、鬼舞辻無惨を滅した後に、何か道筋を作つて於いた方がいいだろう。——楓たちの場合、それが結婚式、というわけだ。

なので、話の話題は必然的に此間の柱合会議の内容になつた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

楓が柱合会議での出来事を話すと、鱗滝たちは難しい顔になる。

そう——痣を発現したら、二十五歳までしか生きられないからだ。

「……痣、か。楓はどうするつもりだ？」

「今の所は、発現させないつもりです」

鱗滝の問いに、楓がそう答える。

現在の楓は、痣の代わりに “透き通る世界” を代用しているのだ。……それも、い

つまで通用するか不明なんだが。

このことを鱗滝に話すと「そうした方がいい」と言ってから頷く。

「お館様や他の柱に失礼になるかも知れないが、楓、お前には未来がある。——だから、

痣を出さずに最後まで足掻くんだ」

「……痣を出すとか、元柱が言ったらダメですよ」

「今は目を瞑れ。——儂は元柱でもあるが、お前たちの義親でもあるんだ。こう考えて

しまうのは致し方あるまい」

鱗滝は、痣を発現させ強くなれるのに越したことはないが、寿命を縮め戦わないで欲しい。という想いで板挟みになるのだ。

「私たちも同じなんだ。この子たちの為に、極力死を呼び寄せるのは止めて欲しい」
「私たち、楓と一緒に子供の成長を見届けて、お爺ちゃんとお婆ちゃんになっても一緒に居たいから」

真菰とカナエは、お腹を擦りながら呟く。

でもそうか。確かに、痣発現⇨未来を削る。とも考えてしまう。……本当に難しい問題だ。

ともあれ、それからは話題を変え談笑した。

——もうそれは、傍から見ても親子の光景だった。

柱稽古

翌日、柱稽古が開始された。

稽古内容としては、まず初めに、桜柱・栗花落楓による基礎型の確認、正しい呼吸法——そう、全集中の呼吸を休まず続けるのだ。

もし型に癖、呼吸が乱れてしまっていたら、攻撃、防御に転じる速度が微妙に違ってくる。——これを矯正するのが、桜柱・栗花落楓が考案した稽古内容だ。

——もしかしたら、*“透き通る世界”*が習得できる切っ掛けになるかも知れないのだ。……まあ、柵から牡丹餅になるけれども。

ともあれ、これは地獄のような稽古だが、真菰、カナエが見て回って悪い点を指摘してくれるのだ。

「うん。呼吸は乱れていないようだね。でも、型を舞う時に余分な力が入ってる。そこを直そうね」

「君は逆かしら。型は問題なけど、呼吸が不安定になりがちね。呼吸は力まないように、ゆっくり優しく」

——蝶屋敷の三大美人である、胡蝶カナエ、鱗滝真菰の優しい指導だ。

楓とカナヲは日輪刀を抜き、一定の距離を保ち神経を集中させる。

そして、ほぼ同時に相手を錯乱するように左右に動き、刀を振るう。

——花の呼吸 肆ノ型 紅花衣。

——花の呼吸 弐ノ型 御影梅。

楓の下から上に描かれる花の斬撃を、カナヲが周囲に花の斬撃を放ち、互いに受け止め刀の甲高い音が道場に響く。

刀を弾き、楓は刀を構える。

——花の呼吸 五ノ型・改 徒の勺葉。

カナヲも同じく、“花の呼吸 五ノ型 徒の勺葉”で迎え撃つが、楓の勺葉は十八連撃、カナヲの勺葉は九連撃だ。

「(……兄さん、剣技を昇華させてるのっ!?)」

目を見開くカナヲ。

カナヲは、楓が放つ“勺葉”は初見なので、解らなくて当然だ。

そしてカナヲは、九連撃を相殺されてから、型を繰り出す。

——花の呼吸 弐ノ型 御影梅。

カナヲは周囲に花の斬撃を放ち、残りの九連撃を防ぐが、これは楓の予想通りだろう。そして斬撃が止んだ瞬間が、楓の狙いだ。

——桜の呼吸 壺ノ型 乱舞一閃。

——花の呼吸 陸ノ型 渦桃。

楓は腰に刀を回して加速し、カナヲの刀を落す為には右腕を狙い一閃を放つが、カナヲは飛び上がり一閃を躲し刀を振るう。楓はそれに刀を打ち当て相殺させる。

カナヲは着地し、持ち前のバネのような体を駆使し、そのまま上るように剣技を繰り出す。

——花の呼吸 肆ノ型 紅花衣。

カナヲが下から上に放つ花の斬撃を、楓は足を後方に移動して紙一重で躲す。それから、お互いが譲らない攻防を約三十分継続した。



「やっぱり決定打に欠けるな」

「……うん。お互いの手の内を知り尽くしてるから」

楓が「だよなあ」と言つて、楓とカナヲは刀の構えを解き納刀する。これ以上打ち合つても、勝負は付かないと悟つたのだ。

すると、話を切り替えるようにカナヲが口を開く。

「……兄さんは、決戦時に上弦の弐と戦うの？」

「ああ。アイツとはまた殺し合いをする確信がある。——きつと、どちらかが死ぬまで戦い続けるだろうな」

それに上弦の式の力量は、あの時よりも増している筈だ。

おそらく楓と上弦の式は、二対八で上弦の式に勝利が傾いているだろう。

「——私も兄さんと一緒に戦う」

カナヲは力強く頷く。

その両瞳の中には、奴を滅する覚悟の炎が灯っていた。

きつとカナヲは、楓と共に上弦の式と戦うだろう。楓もそれが解っていたかのように

「そうか」と言つて頷く。

「……それに兄さん、終ノ型の使う気、なの？」

カナヲの言葉に、楓は、ギクツと体を震わせる。

楓の終ノ型である、“千本桜・景厳”は、両腕に途轍もなく負担が掛かり、両腕が動かなくなるかも知れないのだ。

「……私も、終ノ型を使う覚悟はある」

カナヲの終ノ型——彼岸朱眼は、カナヲの動体視力を極限まで高めるものだ。

それは、両目の負担が途轍もなく掛かり、使用時には両目が赤く染まる。赤く染まると言うことは、眼球が負荷に耐えられず出血するから。なので、失明と隣り合わせな技

でもある。

「そ、それはダメだ！あれは、失明の恐れがあるだろう！」

楓は声を上げる。

「……でも、兄さんは父親になる。もし終ノ型を使えば、命を縮めるかも知れない。だから私が使う」

カナヲは一步も引かない。

「わ、わかった。お互い、終ノ型を使用する前に上弦の式を倒せば問題ないだろ」

「……うん」

どうやら、カナヲも納得してくれたようだ。

——でもそうなれば、*花の呼吸 漆ノ型 鏡花水月*が勝負の流れ決める剣技になるのかも知れない。

贈り物

カナヲと鍛錬が終わった数時間後、楓はしのぶに呼ばれ、しのぶの部屋に訪れていた。楓と対面に座るしのぶが話したい内容は——上弦の式についてだろう。

「楓。私も上弦の式とは戦うわ。一人で戦おうとしないで」

楓は「やつぱりか」と内心で呟く。

確かに、しのぶはカナヲと共にあの場に居合わせた者だ。——家族想いのしのぶだ、楓に重傷を負わせ、カナヲを傷付けた鬼を許せる筈が無い。

——閑話休題。

上弦の鬼の力量は一般の柱三人相当、柱の力量を持つカナヲと合わせても四対六であり、常に敗北の文字が頭を巡るのだ。

だが、しのぶが参戦すれば六対四。論理的に見れば、幾分か余裕が出来るのは確かだ。「そうだな。上弦の式は、俺たちで討とう」

しのぶは力強く頷く。

それとしのぶは、ある薬と同時並行で、上弦の鬼に対しての毒を作っているとのことだ。それも、八割方制作が完了してるとも言っていた。でもそれは、重ねて撃ち込む必

要がある。

楓は「そうか」と言ってから頷く。

「でも、毒が効く前に私たちが倒しちゃってもいいのよ。」

そう言ってから、しのぶは微笑む。

その笑みは貼り付けた笑みでは無い、蝶屋敷内部だけで見せる本来の笑みだ。

「それで倒せれば、それに越したことはないけどな」

でも、楓たちが対策しているのは毒だけでは無い。——もちろん、剣技にもあるからだ。

先と変り、しのぶは真剣な表情になる。

「今から家族として聞いわ——楓。痣、どうするの?」

楓は内心で苦笑し、「義父と内容が似てるな」と思いながら、口を開く。

「——今の所は、現在持っている手札技で足掻くつもりだ」

しのぶは「そう」と呟く。

確かに、柱として見れば発現させて欲しいが、家族として見れば、寿命を縮めてまで戦わないで欲しい。という思いで板挟み状態でもあるのだ。——楓にとっても、しのぶと想いは同じなのだ。

「じゃあ、俺は部屋に戻るな」

刀を立て掛け、着物に着替え対面に座る楓が、申し訳なさそうに呟く。

「気にしてないよ、いつものことだもん」

「そうね。問題ないわよ」

真菰とカナエは、全く気にしてないように呟く。

まあ確かに、子作りをしていた楓たちから見ると、全く問題ないとも言えるが。

「あ、そうだ——カナエ、あれ」

「なるほど。丁度いいわね」

そう言うてから、真菰とカナエが化粧台の下まで移動し、両手である物を取ってから元の位置に戻る。

その一つは羽織であり、その柄は、波が打つ上を蝶が舞っている柄だ。——その羽織は、真菰とカナエが交代で編んだ手作りの羽織なのだ。

そしてもう一つは、真菰とカナエの日輪刀の刃を溶かし鉄を融合させ、楓の為に制作をお願いした一振りだ。

楓がカナエから刀を受け取り、左手で鞘を持ち、右手で柄を握り刀を抜くと刀身が桜色に変わる。——鏢近くには、柱の証明である『亞鬼滅殺』の文字。

「この刀は、鉄穴森さんをお願いして削って貰ったの——刀が二本になっちゃうけど、鏡花水月」のこともあるから」

「きつと決戦時に多々に技を使用して、刀を折っちゃうと思つたから」

真菰は「鍛冶屋の方には、申し訳ないことをしちゃうかも知れないけど」と付け加える。

まあ確かに、真菰とカナエが言う通り、上弦の式との戦いでは「鏡花水月」の使用は、一度では済まないかも知れない。

「あと、これを」

真菰が楓に手渡したのは、先の羽織だ。

そしてこの羽織には——二人の想いが詰まっているのだ。

「私たちの想いを持っていつて。きつと力になるから」

「……ああ、ありがとう」

そう言つてから、楓は刀を隣に置き、真菰から羽織を両手で優しく受け取る。

立ち上がり、この場で羽織を羽織ると、楓に良く似合っていた。——楓は、この羽織りを羽織つて鬼と戦うのだ。

餞別が終了し、楓が入浴を済ませ就寝の支度をし、仰向けになり布団を掛ける楓たち。それから、真菰とカナエは真ん中で眠る楓に密着するようにして目を閉じるのであった。

そして——決戦の刻は、徐々に迫っているのだった。

無限城、教祖との戦い

上弦の式、再び

数週間が経過し、隊員たちの柱稽古が全て完了し、隊服姿の楓、着物姿のカナエ、真菰は縁側に座り月を眺めていた。

「楓。必ず帰って来てね」

「私たち、この子たちと共に待つてるから」

お腹を擦る、真菰とカナエの言葉に応えるように、楓は「ああ」と呟く。——楓たちは、決戦が近い内にあると直感しているのだ。

そして、真菰とカナエのお腹は徐々に大きくなっていて、愛おしい子の成長が見て取れる。——赤ん坊の性別は、真菰のお腹の中には女の子、カナエのお腹の中には男の子、とのこと。

「必ず帰る」

楓がそう答えた時——運命の刻が刻まれた。

そう。楓の鴉が、楓たちの前を凄まじい速度で飛んだからだ。

「緊急招集——ッ！緊急招集——ッ！——産屋敷邸襲撃ッ……産屋敷邸襲撃ッ！」

粉々に消し飛んだ産屋敷邸に到着すると、そこでは紅いは針に固定された鬼舞辻無惨を抑えながら、無惨の腹に右腕を突き入れた珠世の姿。そして、それに対峙する行冥が見えた。

行冥が、産屋敷邸に集結した柱たちを見ると、大声で叫ぶ。

「——無惨だ！ 鬼舞辻無惨だ！ 奴は、頸を斬つても死なん！」

——頸を斬つても死なないと言うことは、無惨との決戦は持久戦になる、ということだ。

そしてその言葉に、炭治郎柱たちが刀を構える。

〔霞の呼吸 肆ノ型〕

〔蟲の呼吸 蝶ノ舞〕

〔蛇の呼吸 壱ノ型〕

〔恋の呼吸 五ノ型〕

〔水の呼吸 参ノ型〕

〔風の呼吸 漆ノ型〕

〔花の呼吸 肆ノ型〕

〔ヒノカミ神楽 陽華突〕

迫りくる攻撃に対して、無惨はニヤリと不敵な笑みを浮かべる。

炭治郎 柱たちの攻撃が無惨に届く前に、突如現れた障子の襖が開き、足元が抜けるように柱たちは異空間に吸い込まれて行く。

楓は空間に吸い込まれながらも、刀を抜き隣接する壁に突き刺し落下速度を抑え、そこから一回転して飛び、地面に着地する。それにこの空間だが、上下左右が滅茶苦茶だ。そして、無惨もこの空間に落ちた。——きつとお館様は、全てを悟っていた。

——花の呼吸 五ノ型・改 徒の勺薬。

楓が突如現れた鬼たちに、花の十八連撃を放ち塵に還し、

——花の呼吸 肆ノ型 紅花衣。

襲い掛かって来た一体の鬼を、下から上に斬り上げる花の斬撃で滅する。

この場に出現する鬼だが、一体一体の力量が下弦の鬼に近い。——無惨の狙いは、まず鬼殺隊を消耗させることなのだろう。

「……血の匂いがする」

——それに忘れもしない気配。この扉の先に奴が居る。

楓は納刀し、奴の気配を感じ取れる鉄錆びた扉に手を掛け開く。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

部屋に入ると、そこには細い橋が縦横無尽に架けられ、周囲には池には蓮の葉が浮か

んでいた。

橋の中央では、女の腕をボリボリと食べている——上弦の式。

上弦の式——童磨は、振り向き楓を見ながらニコニコと笑みを浮かべる。

「やあ、久しぶりだね。——花の呼吸使いの君」

「……久しぶりだな——クソ野郎」

童磨は「酷いなー、君」と言つてニヤニヤ笑い、楓はゆっくり刀を抜く。

そして童磨は、刀の鏢の部分『亞鬼滅殺』の文字を見て喜びの声を上げる。

「わあ。君、柱に就任したんだね。——オレ、女の子しか食べない主義なんだけど、柱の君は別かなあ〜」

確かに、柱の血肉は、人間百人分の価値があるのだ。

童磨は、齧っていた腕を全て呑み込んでから、被っていた血の帽子を取った。

「改めて自己紹介しよう。——オレの名前は童磨。いい夜だねえ」

「桜柱・栗花落楓だ。——お前を殺す名だ」

「簡単には殺せないと思うけどなあ。でもそつかそつか、君の名前は楓って言っただね」

童磨は、よいしょ、と言つて立ち上がり、両手で携えている扇を開く。

「やっぱり君の雰囲気は、花の女の子にそっくりだねえ」

童磨が言った花の女の子とは——胡蝶カナエのことだろう。

楓はカナエの弟子。霧囲気が似ていて当然だ。

「つてことは、血肉も同じ味つてことかなあ」

——血気術 蓮葉氷。

童磨が振るつた扇から、氷の蓮が周囲に浮かび上がり、冷気と共に鋭い斬撃の一振りが襲う。

——花の呼吸 式ノ型 御影梅。

楓が周囲に放つた花の斬撃が、童磨が放つた冷気を相殺させる。

それにこの冷気の中には、肺胞を破壊する霧状の血気術が織り込まれているのだ。

「粉凍りは対策済みかあ。やっぱり、初見で殺してあげることが出来ないみたいだね」

その時、左方向に刀を回した楓がその場から消える。

——桜の呼吸 壱ノ型 乱舞一閃——極。

加速し、楓は童磨の頸目掛けて一閃を放つが、童磨は対の扇で一閃を防御する。——

楓は解つてはいたが、童磨の反応速度は並のそれじゃない

だが、お互い手の内を全て出し切っていない。

そして、お互いが武器を弾き、距離を取ってから刀を構える。

——桜柱・栗花落楓。——上弦の式・童磨の死闘は、これから過激さを増していく。

強さ

避ける。刀を打ち合う。体を翻して刀を振る。

楓と童磨の得物が甲高い音を響かせ、周囲の水面を揺らす。

——花の呼吸 五ノ型・改 徒の勺薬。

——血気術 枯園垂り。

楓が斬撃の嵐から一步後退し刀を振るい童磨の急所に十八連撃を放つが、童磨が振るった扇から砕けた氷が広範囲に飛び散り「徒の勺薬」を防ぎ切る。

「ここまで傷一つ付けられないのは、黒死牟殿との血戦以来だよ」

「君、前はすぐに怪我しちゃったしねえ」と言つて、童磨は笑う。

そして、童磨の言つた血戦とは——十二鬼月の数字を入れ替えることが出来る、鬼の戦いだ。

童磨は、んー、と考える素振りを見せる。

「……ねえ君、もしかして——あの世界が見えてるの?」

童磨は、「透き通る世界」を知っている。

黒死牟に勝てなかった一つの理由が、「透き通る世界」なのだ。

「……教えると思うか、悪鬼が」

楓から感じ取れるのは——童磨の頸を落す。只これだけだ。

「釣れないな。教えてくれてもいいのに」

——血気術 蔓蓮華。

童磨が扇を振るうと、周囲に生まれた氷の蓮華から無数の蔓が伸びて、楓に迫る。

——花の呼吸 肆ノ型 紅花衣。

下から上に迫る花の斬撃で、楓は自身に迫る蔓を斬り払う。

——桜の呼吸 貳ノ型 千本桜。

楓は刀を振るい、自身の周囲に無数の桜の雨を降らせるが、童磨は喜々として急所に降り注ぐ斬撃だけを扇で弾き落とす。

——血気術 冬ざれ氷柱。

楓の頭上に展開されたのは、多数の氷柱。

身の危険を察した楓が咄嗟に地を蹴り後方に跳び回避すると、楓が先程立っていた橋は多数の氷柱が降り注ぎ、橋の底に大きな穴を穿つ。

「凄い飛翔力だねえ。今までの柱ならば、先の血気術で傷を負ってたんだけどなあ」

童磨はニコニコと笑う。

そして、お互い決定打に欠ける。——楓の場合は、無理に飛び込むことが出来ない。

童磨が扱う血気術に直接触れてしまえば、凍死の危険が伴うからだ。

童磨から見れば——楓の攻撃を注意深く見ていないと、花の斬撃と組み合わせた“乱舞一閃”で頸を刎ねられることが解っているのだ。

最初に動いたのは童磨だ。童磨が扇を振るう。

——血気術 散り蓮華。

——血気術 凍て雲。

——血気術 冬ざれ氷柱。

童磨が振るったのは、血気術の同時行使。——連続行使なら兎も角、同時行使なんて聞いたことがない。

そして、振るった扇から砕けた氷が広範囲に飛び散り、そこから追撃するように冷気の煙幕を発生させ、楓の頭上には多数の氷柱が展開される。

「……聞いたことねえぞ。血気術の同時使用なんて」

楓は内心で愚痴を呟く。

楓は氷柱を回避し後退しながら“御影梅”での周囲の花の斬撃で血気術を飛ばすが、全てとはいかず冷気が当たった部位が凍るが、楓はすぐ様氷を弾き落とす。

「ほらほら楓君、オレの頸を斬るんでしょ」

——血気術 寒烈の白姫。

後退している楓の前に、氷の巫女が現れ極寒の吐息を吹く。

「(……マズいな)」

楓は「御影梅」で周囲に花の斬撃を放ち冷気を避けるよう後退しているが、数歩後退すれば行き止まりなのだ。

その時、楓の天井付近が、ドンツ、穴が出来た所に、隊服姿で日輪刀を構えたカナヲが降り楓の前に立つ。

——花の呼吸 式ノ型 御影梅。

——花の呼吸 式ノ型 御影梅。

楓とカナヲが周囲に放った二重の花の斬撃が、迫って来る冷気を全て飛ばす。

さすが義兄妹と言うべきか、楓はカナヲの、カナヲは楓が放とうとした剣技を瞬時に理解したのだ。

「わあ凄いな。全て弾き飛ばすなんて。——同じ呼吸を使用するってことは、兄妹なのかな?」

童磨は「そうだ」と両手を打つ。

「お嬢さん。お名前を聞かせてくれるかい?」

カナヲは刀を構えてから、童磨を見据え口を開く。

「——桜柱・栗花落楓の義妹、栗花落カナヲだ」

「やっぱりオレの予想通り兄妹なんだね。——それに君、柱に匹敵する力量があるね」
カナヲが不敵に笑い童磨に眩く。

「私が柱の力量?……有り得ないわよ、柱である兄さんや姉さんたちの足元に及ばないもの」

「——そんなことはありませんよ。カナヲは強いもの」

不意に凜とした声が響き、童磨は後方を振り向く。

そこに佇んで居たのは——胡蝶しのぶだ。

——蟲の呼吸 蜂牙ノ舞 真靡き。

しのぶは地を踏み込み振り返った童磨の右目を鋭い突きで貫いてから、童磨の背に回るように体を回転させ、踏み台の要領で童磨を踏み付け、その反動で反対方向に居る楓たちの前に着地する。

「ごめんなさい。途中の鬼に手間取って遅れたわ」

しのぶに言葉に、楓が「気にするな」と眩く。

しのぶ、カナヲが童磨を睨むと、童磨は笑みを浮かべる。

「君たちは家族なんだね。——じゃあ、家族ごとオレが救ってあげよう」

その時、童磨が両膝を地に突け上体を曲げ吐血する。——しのぶが先程童磨に打ち込んだ毒の効果が効き始めたのだ。

だが、童磨は顔を上げる。

「あれえ？毒、分解できちやつたみたいだなあ。ごめんねえ。せつかく使ってくれたのに」

童磨が嘲笑うかのように呟く。

だが、毒が分解されるのは想定内。

しのぶの役目は、調合した毒を多数撃ち込むことなのだから。

激戦

——血気術 蓮葉氷。

——血気術 蔓蓮華。

——花の呼吸 式ノ型 御影梅。

——花の呼吸 五ノ型・改 徒の勺薬。

——蟲の呼吸 蝶ノ舞 戯れ。

童磨の振るつた扇から広範囲に氷の蓮が展開され、広範囲の氷の蓮中を紛れるように鋭い無数の蔓が楓たちに襲い掛かる。

橋の上に立つ楓たちは、周囲に広がる氷の蓮はカナヲが周囲に放つ花の斬撃で相殺させ、楓が襲い掛かる蔓は楓の花の十八連撃で斬り落とし、その間を潜り抜けるようにしのぶの鋭い複数回の突きが童磨の体に突き刺さり、しのぶは楓たちの隣まで後退する。

童磨は「ごふッ！」と僅かに吐血したが、毒をすぐに分解させ「ごめんね」と煽るように呟く。

「……蝶の彼女の毒、オレにはもう効かないかもねえ。耐性ついちゃったしね」
挑発するように呟く童磨。

そんなことで頭に血が上るしのおでは無いが——でも確かに、しのぶ一人で童磨と戦っていたら、焦りで動きが乱れてしまっていたかも知れない。

だが今のしのぶには、背中を預けられる家族がいるのだ。——家族の存在は、しのぶの心を穏やかにしてくれる。

「残念だけど、そんな挑発には乗らないわよ——クソ野郎」

楓たちは頷き、型を取る。

——蟲の呼吸 蝶ノ舞 戯れ。——花の呼吸 五ノ型 徒の勺葉。

——花の呼吸 五ノ型・改 徒の勺葉。——蟲の呼吸 蝶ノ舞 戯れ。

——花の呼吸 式ノ型 御影梅。——蟲の呼吸 蝶ノ舞 戯れ。

しのぶ、楓、カナヲの花の斬撃と鋭い突きが童磨を襲う。

童磨も扇で頸を守りながら冷気冷を振るうが、それはカナヲの周囲周に放つ花の斬撃が消し飛ばし消し飛ばし、花の二十七連撃の斬撃に、高速の突きが複数回童磨を突き刺す。——その中の一つの突きは、高濃度の毒入りだ。

「くっ……これは流石に」

さすがの童磨も、花の二十七連斬撃＋高速の突きの前では呻いた。

——血気術 粉凍り。

——血気術 吹雪の舞。

童磨が扇を振り、煌びやかな氷の粒を大量に撒き散らした。それは、見る者のが見れば幻想的な物かも知れないが、吸い込めば肺胞が破壊される凶悪な吹雪だ。

その時、楓はふと思った。——「これを奴が吸えばどうなる？」と、そう思ったのだ。

——花の呼吸 漆ノ型 鏡花水月。

楓が型を取ると、しのぶ、カナヲを包むように花の残像が舞い、水鏡で向かってくる大量の吹雪を全て反射させる。

童磨は目を見開き、反射された吹雪を跳び退き回避しようとしたが、それは間に合わず粉凍りを吸ってしまう。

「……………はッ。はッ」

童磨はその場で両膝を地に突け、上体を折り咳き込む。——楓の予想通り、粉凍りは諸刃の剣だったのだ。粉凍りは、鬼にも効果があるのだ。

「……………技の反射かあ。……………予想外な攻撃を、……………仕掛けて、くるんだね」

童磨の動きは、目に見えて鈍くなっている。

追撃をするには絶好の機会。

——蟲の呼吸 蜈蚣ノ舞 百足蛇腹。

——桜の呼吸 壺ノ型 乱舞一閃——極。

——桜の呼吸 壺ノ型 乱舞一閃——極。

——血気術 結晶ノ御子。

しのぶが攻め筋を読ませないように四方八方にうねる動きに加えて、橋を踏み割る程の踏み込みから驚異的な速力を乗せて突きを放ち、楓とカナヲは刀を左腰方向に回し橋を踏み込んで加速し目掛けて一閃を繰り出す、それは童磨が苦し紛れに生み出した三体の分身が童磨を守るように立ち塞がり、全ての分身が童磨を守り崩れ去った。

——蟲の呼吸 蜻蛉ノ舞 複眼六角。

しのぶは消滅させた分身に目もくれず童磨に喉、頭、膝と、急所となる部位に六連撃の正確無比な突きの連撃を放ち、大量の毒を打ち込む。

童磨は後方に吹き飛ぶが、すぐ様体勢を立て直す。——だが、その表情は苦悶に満ちている。さすがに、自身の技となれば再生が思うようにならない。

そして童磨は、感情を欠落させた顔で楓たちを見る。

「……君たちはあの方の脅威になるかも知れないから、救済してあげるここで死んでもらうよ」

——血気術 結晶ノ御子。

童磨は、眼前に七体の分身を作り出す。

「……さあ、お仕置きの間だ」

——血気術 枯園垂れ。

——血気術 散り蓮華。

——血気術 蔓蓮華。

——血気術 冬ざれ氷柱。

——血気術 蓮葉氷。

——血気術 凍て雲。

——血気術 寒烈の白姫。

七体の「結晶ノ巫女」は、一つずつ血気術を繰り出した。

まるでこの部屋が極寒の冬の様な冷気がこの場を埋め尽くす。そして、蔓の氷、氷の氷柱、氷の息吹、氷の斬撃が楓たちに襲い掛かる。

——花の呼吸 式ノ型 御影梅。

——花の呼吸 式ノ型 御影梅。

——花の呼吸 式ノ型 御影梅。

楓たちは、周囲に花の斬撃を三重に放つが、全ての攻撃を相殺することは出来ず、自身の間合いに入り込んだ鋭利な蓮と冷気が楓たちを傷付ける。

「(……マズいな。持久戦になれば、こつちが押される)」

こう思っているのは、しのぶ、カナヲも同様だった。——そう。童磨は、「結晶ノ御子」をほぼ無制限に召喚できるのだから。

楓の頭の隅には、「——桜の呼吸 終ノ型 千本桜・景厳」の剣技が過る。

「……突破口が開けるのは、終ノ型、なのかも知れない。——きっと兄さんも、終ノ型の使用を考えてる……でも、使わないで欲しいって考えてしまうのは、私の我儘なのかな」

カナヲも——花の呼吸 終ノ型 彼岸朱眼”の使用を頭の片隅に入れる。
このようにして、楓たち v s 上弦の弐の戦いは、最終局面に移るのだった。

討伐

「君たちの二つの呼吸、高速で入れ替えて使用してるでしょう？その証拠に、君たち三人の息が上がるのが早いね。でもそんなことをしたら、粉凍りを吸い込みやすくなる」

「……——本当、忌々しい程によく見てるな」

息を荒げながら、楓が忌々しそうに呟く。

「まあね！オレは信者たちの教祖だからさ！信者をよく見て救ってあげる義務があるのさ——」

そんな童磨を見て、楓の言葉を引き継いだカナヲが不敵に微笑む。

「信者をよく見てる？違うでしょ？」

「……どうということかな？」

嘲笑うかのようなカナヲの口調を聞いて、童磨は笑みを消す。

「貴方が見ているのは人の感情だけ。貴方はそうしないと、人の輪の中に溶け込まない。

——貴方、感情が欠落してるもの。……本当、可哀相な鬼だね」

カナヲは嗤う、目を細め、口角を上げ童磨を嘲笑った。

「——貴方、何の為に生きてきたの？」

「……今まで、随分の数の女の子とお喋りしてきたけど、君みたいな意地の悪い子初めてだよ。何でそんな酷いこというのかな？」

その時、童磨に変化が起きた。

童磨の体が、内部から溶け出してきたのだ。

「……え、何かな、コレ？」

そう言つてから童磨は絶句する。そして、口の中から巻き起こる吐き気。

童磨は、それを抑えられずに両膝を突け上体をクの字に折り「ぐふっ！」と吐血する。

「ふふ、やつと効果が出始めましたね」

しのぶが微笑む。

——そう。しのぶは童磨の毒を打ち込む時、高濃度の毒の原液を混ぜ込んでいたのだ。そしてその原液は、藤の毒を凝固させた中に閉じ込めていたのだ。

それを知らない童磨は藤で固められた毒しか分解することしかなく、原液は分解されずに知らずの内に体内を駆け回る。

「貴方は喜々と言つていていたわね、藤の毒を分解できたと。……でももし、鬼の血気術で隠された高濃度の毒の原液はどう？」

「……血気術？」

「そうよ。珠世さんの血気術を混ぜ入れ、共同で作り出した高濃度の毒よ。——もちろ

ん、貴方の為にね」

しかも童磨は、数え切れない程しのぶから毒を打ち込まれている。

「……珠世？ああ、あの逃れ者の鬼かあ」

童磨は顔を擧める。

——鬼舞辻無惨^我が^主姿を隠している鬼に追い詰められているなんて、童磨は夢にも思わなかったのだろう。

童磨の体は、毒が蝕み体内から臓物、目、顔、脳を溶かしている。

「（……まだ大丈夫。信者を救^喚え^ば毒は解毒できるはずだ）」

童磨は苦し混じれに立ち上がり、扇を振るう。

そう——「結晶ノ御子」七体は健在だ。この御子が破壊される前に、童磨は楓たちに止めを刺すのだ。

——血気術 霧氷・睡連菩薩。

童磨の前に計七体の「結晶ノ御子」。

そして、その後ろには大質量の氷を纏った氷の菩薩像が生まれ、今までとは比に成らない程の冷気がその場を満たす。

通常なら絶体絶命な場面だが、楓は刀を両手で構え心を落ち着けていた。——遂に訪れたのだ、あれを使用する機会が。

——桜の呼吸 終ノ型 千本桜・景巖。

終ノ型は、千本桜の二倍の殺傷力、速度、攻撃範囲だ。だからこそ、“結晶ノ御子”、“菩薩像”が攻撃を仕掛けるよりも速く桜の雨を降らせることが可能なのだ。

桜の雨の刃は、“結晶ノ御子” “菩薩像”を完全に破壊するが、瀕死の童磨は懸命に對の扇を使用して致命傷を避ける。

追撃を仕掛ける絶好の機会だが、崩れ逝く“結晶ノ御子”、“菩薩像”を掻い潜らなければ、童磨の頸を刎ねることが叶わない。

——花の呼吸 終ノ型 彼岸朱眼。

カナヲの両眼球が真っ赤に染まる。

更にこの時に到達した“透き通る世界”が合い染まって、極限まで高めた動体視力で景色その物が止まって見え、その先の未来を幻視する。

——花の呼吸 陸ノ型 渦桃。

カナヲは地を踏み込んで高く跳び、童磨の頸に刀を食い込ませ、柔らかな体幹を活か

した体を空中で回転させた力を合わせた斬撃が——童磨の頸を刎ねる。

「(……頸を刎ねられた？こんな華奢な子に？……いやいや、まだ望みはある。猗窩座殿が消滅する時の感じたあの感覚、猗窩座殿はなりかけたんだ、無惨様のように頸の弱点克服を)」

だが童磨の想いは虚しく、頸が、ゴンツと橋に転がりボロボロと崩れ始める。

「(うわ——。体も崩れ始めた。駄目なんだ、オレは。——やつぱり死ぬんだ、オレ)」
童磨は消滅仕掛けていても、死ぬことが怖くなく、負けたことも悔しくなく——何の感情も湧いてこなかった。

童磨はいつだってそうだった。信者に次々出す狂気に満ちた父を見ても、そんな父を刺し殺した母が半狂乱になりながら服毒自殺した時も。

——童磨に取って人の感情は、他人事の夢幻だったのだ。

——上弦の貳、討伐終了。

繋ぐ（本編完結）

上弦の弐との戦闘を終え、楓、しのぶ、カナヲは一箇所に集まる。

「——お疲れ様。カナヲ、楓」

刀を納刀したしのぶが労いの言葉を掛ける。

楓も、折れてしまった刀を納刀し口を開く。

「ああ、疲れたわ」

楓は口重そうに呟く。

ともあれ、楓が「透き通る世界」越しに断裂した左腕を見ると、腕の筋が完全に切れ
ている。——治療で腕が動くようになっても、後遺症が残るのは否めないだろう。

「うん。しのぶ姉さんもお疲れ様」

カナヲも刀を納刀して呟いた。

楓がカナヲの目の状態を聞くと、神経網膜と水晶体が辛うじて繋がっている為、完全な右
目失明の状態には陥ってないとのこと。

だが、治療で回復しても後遺症が残ると思われるので、完全な視力回復は見込めない
だろう。

それに、先程鴉が部屋周りを飛び『上弦の壺、参を討った』ことを伝えたのだ。

「残るは——無惨だけか」

「そうね。早く皆と合流しましょうか」

「に、兄さんっ！しのぶ姉さんっ！まさかその傷でっ!？」

カナヲが声を上げる。

まあ確かに、現在の楓は左腕筋の断裂、しのぶは右肩から斜めに大きく扇で斬られているのだ。それに、所々の殺傷も痛々しい。

だが、声を上げるカナヲを見て楓は苦笑した。

「カナヲも右目が殆んど見えてないんだ。どっちもどっちだよ」

「それにね、私と楓は柱。——だから柱の責務があるのよ。刀が握れなくなるまで戦うっていう意思がね」

カナヲはしのぶの言葉を聞いて、下唇を噛んだ。

こう言われてしまったら、戦わないで、と言えない。——カナヲの本心は、今すぐに刀を置いて欲しいのだ。

「カナヲ、俺は死なない。——いや、死ねないんだ。蝶屋敷では、俺たちの帰りを待つてる人たちが居るだろう?」

蝶屋敷には、真菰とカナエ、アオイにすみたちが帰りを待っているのだ。

そう。楓たちには帰る為の場所がある。

「生きて帰るんだ。カナヲ——お前も義姉になる為にな」

カナヲはハツとした。

確かに、楓の子が産まれたら、カナヲは——義姉になる。

「……そうなるよ、しのぶ姉さんは——叔母さん」

カナヲがそう言うのと、しのぶの額に青筋が浮かぶ。

……まあ確かに、叔母さん。と言う言葉は、若い女性が呼ばれたくない上位に食い込む言葉でもある。

「……カナヲ。私はまだ十代。叔母さんは早すぎると思いますよ」

「ついでに、ごめんなさい。しのぶ姉さん」

「わかればいいのよ。わかれば」

しのぶは、うんうんと頷く。

この時カナヲは、「しのぶ姉さんを叔母さんと呼ぶのは、絶対に止そう」と心に決めるのであった。

そしてこの場を笑いが包み、肩の力を抜くことが出来たのだ。

「——さあ、前へ進もう」

「——はい」

「——ええ」

楓たちは歩み始める、決戦無惨の元の地へ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

同時刻、蝶屋敷

アオイは部屋を出て廊下を歩く。そして、この静かな蝶屋敷は落ち着かない。

蝶屋敷は、炭治郎たちのお陰でいつも笑みで包まれていたのだから。

「……………あ」

アオイが廊下を歩いていると、刀を自身の隣に置き、縁側で月を眺めている妊婦の姿が映った。その横顔はとても儂い。——まるで、硝子細工のようだ。

「……………そっか」

アオイは、納得したように内心で呟く。

——楓たち鬼殺隊は、この月空の下、無惨の根城となる場所で死闘を繰り広げているのだ。

「あれ、アオイ? どうかしたの?」

「蝶屋敷の護衛なら私たちに任せて、アオイは休んでも大丈夫だよ」

カナエと真菰は「今日も沢山の患者さんを見たんではしょ?」と言葉を続けた。

「いえ、眠れなくて」

「そうなのね。じゃあ、私たちとお話をしましょうか」

「そうだねえ。恋話とか？」

アオイは「そんな話はありませんっ！」と思いながら、促された真菰隣に「失礼します」と言つて腰を下ろす。

それから、アオイはおぼろげと口を開く。

「あ、あの。真菰様とカナエ様は、楓様と離れ離れになつて寂しくないんですか？」

「寂しいか、寂しくないかと聞かれたら、寂しいかなあ。——でもね、信じてるんだ。楓たちが無事に帰つて来るって」

「楓の言葉を借りるとしたら、今私たちは『強くあろうと頑張つてる』かしらね」

真菰とカナエがそう言つて、くすくすと笑う。

まあ確かに『強くあろうとする』と言う言葉は、楓の口癖なのだ。

その時、真菰とカナエが「あ！」と声を上げる。

「今、赤ちゃんがお腹を蹴つたよ。きつと、この子たちも信じてるのかな？」

「そうね。きつとお父さんの帰りを待つてるのね、この子たちも」

そう言つてから、お腹を擦る真菰とカナエ。

真菰たちがアオイと話していたら、眠りに就けなかつたのか、すみたちもこの場に

やって来る。まあでも、皆一緒に居た方が安心できるのは確かだ。

それから、すみたちもカナエ、アオイの隣に座る。

「ま、真菰様。お腹、触ってもいいですか?」

「か、カナエ様もいいでしょうか?」

「わ、私も」

真菰とカナエの「いいよ」と返事を貰ってから、すみたちは、おずおずと真菰とカナエのお腹に手を当てる。

そして感じた、小さな命の鼓動を。

「「け、蹴りました」」

「ふふ。皆のことがわかってるのかもね」

「そうかも知れないわね。蝶屋敷の皆は家族だもの」

真菰とカナエはそう言うってから微笑む。

そして今日全てが決まる。——鬼と人の全てが。

未来へ

未来（平和な世界）

鬼殺隊は、念願の鬼舞辻無惨の討伐に成功した。

そして、鬼舞辻無惨の最期を追いやった攻撃は——赫く染まった刀のヒノカミ神楽十三番目の型で、複数の脳、心臓を討ち、それに合わせ“乱舞一閃”で無惨の頸を刎ねた。赫い刀だった。

——無惨は、絶望に染まった顔で口を開き、

『まさか……私が……こんな所で……！』

という言葉葉を最期に、太陽の光を浴びて灰へと姿を変えた。

だが、あれ程憎んでいた存在が消えても、喜びで声を上げる者は居なかった。——無惨討伐の地を見回して見ると、そこは瓦礫の山が積み上がり、柱を庇った隊士は死に、柱であつた者も命を落とした。

不幸中の幸いと言うべきは、鬼殺隊の指揮を執っていた“産屋敷耀利哉”らが犠牲に成らなかつたことだろう。

また、無惨を討伐したことで鬼殺隊の存在は必要ないと騒がれていたが、無惨が最期

に呪いを外し、特殊な体質を持っていた鬼は消滅していなかった。なので鬼殺隊は、その残党の鬼を滅するべく存続し続けたのだ。

そして「産屋敷耀利哉」を筆頭に、鬼殺隊は鬼の残党狩りをしながら、警備会社として運営できるように取り計らっているのだ。——そう。鬼を全て狩った瞬間、鬼殺隊士は今後の道を迷ってしまうのだから。

とはいえ、鬼の数も減っており、全盛期のような鬼の出現もない。なので、鬼殺隊士は交代形式で鬼を狩りながら、お偉いさんの護衛などで食を繋いでいる。



く数年後、とある一軒家く

鬼を狩り終えた楓が帰路に着くと、家の扉を開け、夏を季節を催した着物を身に纏った女の子が楓に正面から抱き付く。

——彼女の名前は、鱗滝夏帆。——真菰のお腹の中から生まれた命の子だ。

「パパっ。おかえりなさいっ」

「ただいま、夏帆」

夏帆は「うん！」と頷く。

それを見た楓は、顔を綻ばせた。

「今日は鬼狩りのお仕事？」

「そうだな、鬼狩りの仕事だ」

昨日楓は、鬼殺隊の現お館様——「産屋敷耀利哉」からの依頼で鬼狩をして来たのだ。

現在の楓は鬼殺隊社では無い。——元柱であり、前線から身を引いたのだ。

そう。楓はあの戦い無で左腕城の筋を完全に断裂してしまった為、治療を行っても左腕を思うように動かせなくなってしまったのだ。……まあ、右腕だけで刀を握っても、現柱と互角に渡り合える力量は持ち合わせているんだが。

「鬼、強かった？」

「どうだろうな？俺からしたら弱かったな」

このように言っている楓だが、今日狩った鬼は、下弦に及ばなくても強い鬼である。でも確かに、元柱である楓に取っては雑魚鬼の部類に入ってしまうんだが。

——この時、楓の面影を残した男の子が楓の元に歩み寄る。——彼の名前は、胡蝶海斗。——カナエのお腹の中から生まれた命の子だ。

「お父さん、お帰り」

「ただいま、海斗」

「あ、あの、お父さん。……呼吸、なんだけど」

楓は「ああ、そういうえば」と思い出す。

楓が朝家から出る時、海斗が呼吸に関して教えて欲しいとのことだったのだ。

「花の呼吸の教授、だったか？」

楓はそう呟くと、海斗は頷く。

また海斗には、花の呼吸の適性が楓とカナエ以上にある。——海斗はカナエと楓の血が色濃く受け継がれているのだ。なので、適性が高いのは必然でもあった。

「私は水の呼吸っ！」

そう言った夏帆は、水の呼吸の適性が異常にある。

夏帆の血には、準柱としての真菰の血が色濃く受け継がれているので、水の呼吸に適性があるのは必然だ。

そして、海斗、夏帆の血には、楓の血も流れている。と言うことは、桜の呼吸の適性もある。ということにも繋がるのだ。

「うし。呼吸に関しては、カナエたちと一緒に教えるよ」

楓がそう言うってから、夏帆、海斗は楓に続くように家に入るのだった。



くどある一軒家、居間く

玄関から家に入り居間に向かうと、楓を迎えてくれたのは、花柄、蝶柄の着物を身に纏った真菰とカナエだ。

「お帰りなさい、楓」

「お帰りく、楓」

「おう。ただいま」

そう言ってから、楓はいつもの席に腰を下ろす。

呼吸習得の前に楓たちで話し合いの場を設け、先程の会話を楓の対面に腰を下ろした真菰とカナエに話す。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「そう。花の呼吸を海斗が」

「夏帆は水の呼吸かあ」

「でも、あの子たちに全集中の呼吸は習得できるかしら？」

「まあ確かに。型の前に、全集中の呼吸からだね」

「うーん。と唸る楓たち。」

「そうなれば、まずは肺の強化からだなあ。と思いながら、訓練内容を組み上げる楓たち。」

常中。という話題も出たが、さすがにそれは早すぎる。と言うことになり、常中の習得は却下の方向になった。

「呼吸が出来るようになったら、まずは簡単な型からだな。——花の呼吸と言えば、ノ型 紅花衣”か」

「そうね。陸ノ型 渦桃”でもいいとは思うけど、最初に覚えるとしたら 肆ノ型 紅花衣”かしら」

楓が「水の呼吸はどうだ」と真菰の聞くと、真菰は思案顔をしてから口を開く。

「五ノ型 千天の慈雨”か、壺ノ型 水面斬り”かなあゝ」

このようにして、海斗、夏帆に教授する呼吸法を確立させていく楓たちであった。

相談

〜とある一軒家〜

「夏帆、海斗。行くわよ」

カナエがそう言うと、夏帆と海斗は「はい！」と返事を返す。

そう。楓たちこれから——炭治郎たちが身を寄せる、蝶屋敷に向かうのだ。

ともあれ、楓たちは靴に履き替え、家の扉を閉めてから鍵を掛け、楓、真菰、カナエが夏帆と海斗を真ん中に、横一列になり楽しく談笑しながら蝶屋敷へ向かって歩み始めた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
 蝶屋敷

蝶屋敷の門前に到着し楓たちを迎えてくれたのは、両耳で耳飾りを靡かせ、隊服の上から羽織るのは緑と黒の市松模様の羽織。腰から下げるのは日輪刀。そう——日柱、竈門炭治郎だ。

楓と交代するように柱に就任したのは炭治郎だけでは無い。

我妻善逸——鳴柱。

嘴平伊之助——獸柱。

栗花落カナヲ——花柱。

其々が柱に就任したのだ。

「楓さんとお久しぶりですっ！今日はどうしたんですか？」

「遊びに来ただけだ。てか、しのぶに鴉を飛ばしたんだが、まだ伝わってなかったか？」

「あ、そうなんですか。しのぶさんは研究で部屋に閉じ籠ってまして……」

楓は「またか」と言ってから溜息を吐いた。

でもまあ、しのぶ珠世の研究の成果があり、「患者」の寿命問題を解決させた薬を完成させることが出来たのだが。

「じゃあ、私たちでしのぶを部屋から出してくるわね」

「しのぶ叔母さんの所に私も行くっ！」

「夏帆お前、しのぶさんに叔母さん呼びは怒られるよ」

「じゃあ楓、先に私たちは蝶屋敷に上がってるね」

そう言つてから、カナエと真菰が、夏帆、海斗の手を取り蝶屋敷へ入って行つた。



炭治郎が楓に近況報告をしていると、炭治郎が口を閉鎖させ言い淀んだ。

「あ、あの楓さん。……オレがカナヲと恋仲になるのは、反対ですか?」

楓は「え?」と疑問符を浮かべる。

それはそうだ。いつも甘い雰囲気を漂わせ、お互いの視線は甘く優しく、お互いがお互いを想いやる気持ちが見て取れるのだ。

それで恋仲じゃない?それを数年継続してる?俺の意見なんて必要ないだろ?え?マジで?と叫びたい楓である。

善逸の言葉を借りるとすれば『とんでもねえ炭治郎だ!』ってやつだろう。

「反対じゃないぞ。寧ろ、早くくつついた方が良い。……蝶屋敷で、被害者の会が創立するかも知れないから」

まあ、既に被害が及んでいるのも否めないが。

でも、善逸には被害が及んでいるかも知れない『ちきしよ——ツ! (汚い音声) こんなに甘い音響かせやがってツ!オレだって禰豆子ちゃんと——ツ』的な感じの空想の叫び声が聞こえる。

と、そんな時、楓が内心で話題に挙げていた我妻善逸が姿を現す。

隊服で羽織を上から羽織り刀を腰から下げているということは、任務が終わり蝶屋敷に帰還した、という所だろう。

「俺がまだ蝶屋敷に居る時、禰豆子が善逸の昔の想いを笑顔で受け留めていたのは、^想そういうことじゃないのか？」と思いつながら、楓は内心で首を傾げる。

「……まだ禰豆子が鬼の時あれ程『大好き』を連呼していたのに、人間に戻った姿を見たら委縮したのか……数年単位で？」

「……その通りです」

「……何て言うかお前ら、恋愛に奥手過ぎないか？」

悪く言ったら、ヘタレである。

……——鬼を狩る時はあんなに華やかな姿なのに、なぜ恋愛になるとポンコツになるのだろうか？

「な、なので、既婚者である楓さんから恋愛アドバイス^教をお願いします」

楓は「アドバイス^授」って言われてもなあ。と内心で呟く。

楓の場合は、全て勢い任せなのだ。

蝶屋敷で三人共同部屋になったのも、勢い。

カナエと真菰に想いを伝えたのも、勢い。

結婚の予定を決めたのも、勢い。

カナエと真菰を抱いたのも、勢い。

このように、全てが勢い任せなのである。……探せば、まだ当て嵌まる事項が出て来

るかも知れないが、そこは省略である。

なので楓は、一番手つ取り早い方法を口にする。

「もうあれだ、押し倒せ。そうすれば、全部上手く行くはずだ」

でもまあ楓の場合、最後の糸を切ってくれたのは、カナエと真菰のお陰なんだが、さすがに鋼の理性も、美女二人の誘い前では一刻で焼き切れたのである。

「え——つ、極論過ぎませんか？」

「そ、それが出来ていれば苦勞しませんよ」

まあ確かに、炭治郎たちはそういう順序をしっかりと守る考えなのだろう。

「でも待たせ過ぎるのは、女子陣は不安になるぞ」

「そ、それは、そうですけど」

未だに優柔不断（楓も当て嵌まるかも知れない）のように言い淀む炭治郎と善逸。ともあれ、これが蝶屋敷の一角で行われた男子会？であった。

花言葉

↳ 蝶屋敷、居間↳

海斗、夏帆をしのぶ^{アオイ}たちに一時預け、蝶屋敷の居間にはテーブルを囲むように、任務が終えたカナヲ、蝶屋敷に手伝いが一段落した禰豆子、一児の母であるカナエに真菰が足を楽にして腰を下ろしている。

「それとなく雰囲気を出しているのに、炭治郎たちが襲ってくれないし、告白もまだって……」

「……はい」

真菰の問いに、カナヲと禰豆子が頷く。

……うーむ。それが事実なら由々しき事態である。なので、カナエと真菰は内心で頭を悩ませる。

「でも、一番早い解決方法があるんだよ」

「そうね。私たちは、その勢いで現状を打破したものの」

真菰とカナエが言う現状を打破した行為とは——相手の理性を焼き切ることである。お互いが意中の相手ならば、効果は抜群だ。

このことをカナヲ、彌豆子が聞くと顔を赤く染める。

まあ確かに、真菰たちはカナヲたちに『抱かれてこい』と言っているものなのだ。

「……カナエ姉さん。それは、ちよつと私たちには難易度が高い……」

カナヲが顔を赤く染めながら、恥ずかしく呟いた。

すると、カナエの隣に座る真菰が「うーん、それじゃあ」と口許に右手人差し指を当てる。

「一緒にお風呂に入るのはどうかな？——上手くいけば、かなり意識して貰えるよ」

真菰の言ったこれは実体験である。

真菰とカナエ、楓は、蝶屋敷で住んでいた時、よく一緒に風呂に入ったものだ。

「でも、襲われる覚悟をしておく必要があるけどね」

真菰は「むふふ〜」と言ってから笑みを浮かべた。ちなみに、真菰とカナエは楓に襲われた経験がある。

まああれだ。鋼の理性を持ち合わせていても、楓も男だった、ということだ。

「……真菰ちゃん、先程と多分内容が変わってないわよ」

「そ、そうかな。良い案だと思ったんだけど」

真菰がそう言うのと、カナエは「もうっ」と唇を尖らせ別の方法を提示する。

「花を贈るのはどうかしら？——花にはたくさんの花言葉があるから」

例えばアザレア——恋の喜び。

例えばベゴニア——片思い、愛の告白。

例えば花水木——私の想いを受け入れてください。

と、花には花言葉が隠れているのだ。

「……花、ですか。確かに、善逸さんたちに『後で花言葉を調べ下さい』って渡して逃げちやえばいいかもですね」

禰豆子は思案顔だ。

いつそのこと——有名な花言葉になる赤い薔薇を渡してしまおうか、と考えてしま

う。

「……じゃあ、私も花を贈ることに決めます」

カナヲも何やら覚悟を決めている。

「ともあれ、カナヲと禰豆子の今後の方針としては、炭治郎たちに花を贈ることに決めたのだった。



「ま、真菰姉さんは、兄さんとどんな出会いだったんですか？」

「わ、私も気になりますっ。真菰さんとカナエさんの出会い」

「そう言ったカナヲと禰豆子は、興味津々です。という表情だ。」
「楓との馴れ初めかあ」

真菰と楓の出会いには最終選別で手鬼との戦闘時の邂逅であり、楓に間一髪の所で助けて貰ってから、気に成り始めたのだ。

その数日後に上弦の弐との戦闘で重傷を負う者だから、気が気ではなかったという。じゃあ、それを解決する為に一緒に暮らしちゃえ。と、蝶屋敷住まいに行動に移したのである。……思い立ったら吉日が、真菰の利点なのかも知れない。

「私の場合は、カナヲなら良く知ってるはずだけど」

まあでも、共に蝶屋敷で暮らしていても、修行の詳細までは知らないのだ。

ともあれ、カナエと楓の出会いは、鬼に襲われていた所を助けたことから始まる。

その後は蝶屋敷で共に暮らし、正式な後継者として親密度をかなり深め、お互いに強固な絆を結んだのだ。なのでカナエと楓は、弟子と言う意味でも特別な存在になったのだ。

簡単だが、これが真菰とカナエ、楓の馴れ初めになる。

このことを聞いたカナヲと禰豆子は「へえ」と声を上げる。

「まあこんな所かな。私たちと楓の会いは」

「それに、楓の子を授かれるなんて、あの時は考えもなかったわね」

それはそうだろう——十代で子供を授かれるなんて、予想できる筈もない。

「そろそろ行こつか。しのぶたちも待つてるだろうしね」

「良ければカナヲ。海斗と夏帆に稽古をつけてあげてもいいわよ。現役の柱から鍛えて貰えるのは、あの子たちにとって良い経験になるだろうしね」

真菰とカナエがそう言ってから立ち上がり、「うん!」「はい!」と返事をしたカナヲと彌豆子もそれに倣うように腰を上げ、しのぶたちが待つ道場に向かうのだった。

恋と蛇

楓たちが道場に集まり海斗と夏帆に時間一杯稽古をつけ昼食を摂った後、子供たちの面倒を蝶屋敷の皆に任せ、楓、真菰、カナエは買い出しに街へ向かっていた。

今朝、食べ物の在庫が品薄になっていたからである。

到着した街では、道中の人通りは途切れることはなく活気に満ち溢れている。

「お家の食材を購入し終えたら、蝶屋敷の皆にお菓子を買っていきましようか」

「そうだねえ。最近噂の、ちよチヨコレコレイトイトを買っていこうよ」

「確か、外国から渡ってきた甘いお菓子だったか」

楓の記憶によると、外国から輸入されたチヨコレイトは異国の食べ物であったが、最近ではその製造が日本で行われるようになった代物だ。

つまり、珍しいお菓子。ということである。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「かなり買ったな」

両手で食材が入った大袋を持つ楓が呟く。

「これなら、暫くは買い出しをしなくて済むね」

「でも、すぐに食べちゃうのは気のせいかしら」

真菰、カナエがそう呟く。

その時、楓たちを呼ぶ声が前歩から届く。

「楓君——！カナエちゃん——！真菰ちゃん——！」

その人物の容姿は、鮮やかなピンク色の長い髪に整った顔立ち、ピンク色を基調にした着物を身に纏った——甘露寺蜜璃である。

無惨戦では、無惨の複数の心臓、脳を討つ時に一役買っていた恋柱でもある。——でも無惨討伐時、左腕を失い鬼殺隊を引退した経緯を持つ。

楓たちの元まで、右手を振り走り寄って来た蜜璃は口を開く。

「こんな所で会えるとは思っていなかったよ!!今日は夫婦でお買い物っ?こうやって見ると美男美女だね!そういうえば、蝶屋敷から引越したんだよね?」

可愛らしい声で、楓たちが質問に答える前に次から次へと質問が飛ばされ、楓たちが口を挟むことが出来ない。

でも、無惨討伐を終えても目に見えて気持ちが沈んでいたの、現在の活発な蜜璃を見た楓たちは安堵の息を吐く。

「お久しぶりです、甘露寺さん。——それと、今日は買い出しです。後、蝶屋敷からは

引つ越しましたね」

ちなみに現在楓たちが住む一軒家は、楓が鬼殺隊引退時にお館様から頂いた家である。

「蜜璃ちゃんは、今日はどうしたの？」

「誰かと逢引とか？」

カナエと真菰の言葉を聞き、蜜璃は両頬を若干赤く染める。

そして小さな声で「……逢引じゃないはず」と呟く。

「じ、実は伊黒さんから誘われて、街で有名なご飯屋さんに来たの」

蜜璃が口にした『伊黒さん』とは——元蛇柱である、伊黒小芭内のことだ。

小芭内も無惨討伐時に右目の視力を完全に失ってしまった為、鬼殺隊には籍を置いているが、柱からは引退した経緯を持つ。

「なるほど。伊黒君もやるわね」

「楓、こういう所は無頓着だったからね」

うんうんと頷くカナエと真菰。

すると、楓たちの後方から冷たい声が届く。

「おい貴様ら何でこんな所にいる貴様らは引つ越したはずだ時に栗花落は甘露寺を見すぎだ塵屑にするぞ」

相変わらず、ネチネチと言葉を吐く小芭内。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ごめんね、伊黒さん。楓君たちを見つけはしゃいじゃって……伊黒さん、困ったよね」
 「……いや、甘露寺がオレを困らせたことなど一度もない。寧ろ、久しぶりに見る知人に素直に喜べるのはお前の美德だ」

「伊黒さん……」

蜜璃は頬を若干紅く染め、お互いを見つめる小芭内と蜜璃。

この光景を対面に座って見ている楓たちは、かなり居心地が悪かったりする。

「……何で俺は、伊黒さんたちの逢引を見なきゃいけないんだ」

「……居心地が悪いわね。確かに、伊黒君と蜜璃ちゃんが上手くいつてるから嬉しいけれども」

「(……私、胸焼けしそうだなあ)」

楓、カナエ、真菰が内心でそう呟く。

そして、こうなった経緯はこうだ。

楓たちは逢引の邪魔をする訳にはいかないと思い「お先に失礼します」とその場を離れようとしたのだが、蜜璃の「楓君たちも一緒にどう？」と言う言葉に引き留められた

のだ。

でも如何にかこの場を去ろうと思案した楓たちなのだが、小芭内の「甘露寺の誘いを断るのか、貴様ら」と、若干庄が強い言葉を受け、共に食堂にお邪魔したのだ。

それから数刻が経過し、蜜璃のテーブル前に店員から届けられたオムライスの数が十皿を超えている。

まあでも、蜜璃の体質を知っている楓たちは、時に驚くことはしないが。

「伊黒さんっ……このオムライスとても美味しいですっ！」

十皿のオムライスを平らげ、蜜璃がキラキラと目を輝かせる。

「そうか。今度は甘露寺の為に団子屋も探した。次はそこに行こう」

平然と次の約束を取り付けている小芭内。

いや、それにしても――、

「(……伊黒さん。甘露寺さんの為に色々なお店に通って、甘露寺さんの好みの味を見つけてるのか……凄えな)」

そう思いながら、店が推している有名緑茶が注いである湯のみを右手で持ち口につける楓。

それに聞いた話によると、小芭内は蜜璃を想って、度々蜜璃の屋敷に訪れているらしい。

まあ確かに、蜜璃は左腕を欠損している為、自身で間々ならない事項があるのは確かなのかも知れない。

「伊黒君が蜜璃ちゃんの心を射止めるのも時間の問題かしら？」

「(でも男性陣は、肝心な所でヘタレちやうんだよねえ)」

カナエと真菰も内心でそう呟きながら、有名緑茶が注いである湯のみを右手で持ち口をつける。

それから、蜜璃がオムライスを五皿注文を追加し、全てを平らげ店を後にするのだった。



く外く

「じゃあ、甘露寺さん伊黒さん。俺たちはこの辺で」

「何かあれば、私たちのことも頼って下さい」

「遠慮しなくていいからね」

楓たちがそう言うのと、蜜璃と小芭内が口を開く。

「うん！今日はありがとう、また会おうね！」

「ふん。貴様らに頼ることなんて一寸も無いと思うがな」

そう挨拶を交わしてから、楓たちは進行方向へ踵を返した。——蜜璃と小芭内が結ばれるようにと願いながら。

桜と水

買い出しを終え蝶屋敷に帰還した時、楓の目線の先に見えるのは、黒い袴に二枚の別種類の布を縫い合わせた羽織。長い黒髪を後頭部付近で一括りにしている。そして、腰から下げるのは日輪刀。名を——水柱・富岡義勇という。

だが、羽織から見える筈の右腕がない。そう、義勇は無惨戦で右腕を失っているのだ。ともあれ、楓は義勇が座っている縁側へ向かい、義勇の隣に腰を下ろす

「富岡さん、お久しぶりですね。定期健診ですか？」

「……そうだ。それに久しいな、栗花落」

そう言った義勇は微笑んだ気がした。

未だに無表情の義勇だが、無惨討伐をしたことにより若干だが喜怒哀楽が見えるようになったのだ。

「富岡さんは、鬼殺隊士を引退するところは視野に入れてないんですか？」

現在の義勇は右腕を欠損している。

柱だとはいえ、鬼殺隊士を引退しても誰も文句は言わないだろう。——現に、左腕が戦闘で使用不可能になった楓が鬼殺隊士を引退しているのだ。

「……鬼舞辻無惨が討伐されても鬼は消えていない。オレは、鬼を完全に消し去るまで戦い続ける」

「そう、ですか。でも、しのぶを悲しませたら駄目ですよ、富岡さん」

「……なぜ胡蝶妹が話題に出てくる?」

義勇は首を傾げる。

なぜ今の話から、しのぶの話題が出てくるのかと疑問符を浮かべているのだ。

「いや、富岡さんはしのぶに好か——何でもないです」

楓から見えるしのぶは義勇と共に居るだけで一喜一憂が激しいし、時折会話の中で頬を朱に染める。

——これはどう見ても、しのぶは義勇に気があるはずだ。だが、それを楓が伝えるのは筋違いというものである。

「そういうえば栗花落。海斗と夏帆は一緒じゃないのか?」

「海斗と夏帆なら蝶屋敷のどこかに居る筈です。多分、炭治郎たちが相手をしてくれているかと」

「……なるほど。オレも相手をしてあげていいだろうか?」

「はい、喜ぶと思います」

楓がそう言うってから微笑む。

それに表に出さない義勇だが、義勇はかなりの子供好きでもある。なので、自身が世帯持ちになったら暴走してしまわないか心配だ。

その時、玄関方向から真菰とカナエの声が届く。

「楓。先に屋敷に入ってるわね」

「夕食の準備を始めるから、早めに屋敷に戻って来てよ」

そう言ってから、屋敷に入っていく真菰とカナエ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「……出来た嫁だな」

「俺もそう思います。真菰とカナエは、俺にはもったいない奥さんたちですよ」

楓はしみじみ呟く。

「富岡さんは、鬼を狩り終わった後どうするか決めているんですか?」

「……胡蝶妹に、鬼を殲滅した後も蝶屋敷で世話になる約束になっている」

「……………本当ですか」

楓は、義勇の発言を聞いて目を丸くした。

聞く話によると、水柱邸は今日を最後にお館様に返上したらしい。ということは、今日から義勇は蝶屋敷に住み込みになるのだ。

「ああ本当だ」

「——富岡さん。しのぶをよろしく願います」

楓が思うには、しのぶが弱音を零せるのは姉と義勇だけだと思っている。きつと義勇は、しのぶの弱さを受け留めてくれるはずだ。

とまあ、つい父親のような発言をしてしまった楓だが……楓の方が一つ年上だし、だ、大丈夫だよな？

「じゃあ、夕食に頂きにいきましょう」

「……ああ」

そう言うってから、楓と義勇は蝶屋敷の中へ入って行く。



く夕食時、居間く

夕食になり、炭治郎たちは蝶屋敷の居間に集まってテーブル椅子で囲むように着席し夕食を食べていたが、夏帆と海斗が爆弾発言を落とす。

「カナエママ、真菰ママ。私、妹か弟が欲しい」

「オレは弟がいいなあ。弟から兄ちゃんって呼ばれて見たいなあ」

それはそうと、炭治郎たちは早々に夕食を食べ終え「……ご馳走様でした」と言って

から、食器を持って逃げるように流しに向かっている。まあ確かに、この話題から逃げたいのは当然かも知れないが。

「……あ、あはは。ど、どうしよっか、楓」

「……そ、そろそろ、もう一人ずつ考えてみる?」

苦笑する、真菰とカナエ。

……そりやそうだ。まさか食事中に、夫婦の営みが飛び出すなんて予想外過ぎる。

——時折だが、子供の無知ほど怖いものはないだろう。

「……そ、そうだな。色々と落ち着いてきたし、問題ないはずだ」

楓が遠慮気味に呟いた。

ともあれ、近い将来楓たちは七人家庭になりそうである。

……そうになると、現在の小さな一軒家は引き払い、大き目の屋敷が必要になりそうだ。

実家

私の名前は鱗滝夏帆。真菰ママのお腹から生まれた子供です。

私には、胡蝶カナエママと二人目のママがいるんです。——真菰ママに聞いた話だと、パパがママたちを囲んでお嫁にもらったとか。

私はそんなパパが大好きです。

「夏帆、そろそろ着くぞ」

そう言ったのは、私のお兄ちゃん。

お兄ちゃんは私と違って、カナエママのお腹から生まれた男の子。

パパの子供版みたいです。

「ん。おじいちゃん元気かな？」

私が呟いたおじいちゃんとは、パパたちの義父になる鱗滝左近次さんのこと。

「文を見た限りでは元気そうだったけどね」

「久しぶりね、お義父に会うのは」

そう言ったのは、真菰ママとカナエママ。

パパも一緒によかったんだけど、今日は鬼狩りの依頼が鬼殺隊お館様からあったらしくこの

ど。

「でも、あの決戦でこの程度で済んだのは幸運ですよ」

「……そうだな」

おじいちゃんは考え深く呟く。

それと、パパが今さつき呟いた『決戦』は、鬼と人が全てを賭けた総力戦って聞いている。

それは激戦であり、死者も出たこともパパから聞いたんだ。

「ねえパパ。その戦いの話、もう一回聞きたいな。——何とか無惨のことも」

「確か、鬼舞辻無惨だったけ。お父さん、そいつって鬼の始祖なんだよね」

パパの両膝に乗る私がそう言い、パパの隣に座るお兄ちゃんがそう言った。

それとその鬼は、パパの刀と炭治郎お兄ちゃんの刀が滅したんだよね？

「構わないけど。夏帆たちはもう三回目になるだろ、飽きないか？」

パパの言う通り、あの決戦の話の全てを伝え終わるとなれば約一時間程度かかったりする。

「全く飽きないよ。パパたちのお話が聞けるんだもん」

「うんオレも。鬼と人が全てを賭けた戦いだもんね」

私とお兄ちゃんがそう言うと、パパは「わかったよ」と言っただけで苦笑する。

「儂も聞いていいか？無限城の決戦は、儂は当事者として居なかつたもんでな」

「じゃあ、私も聞こうかなあ〜」

「そうね。歴史の転機となつた話だものね」

おじいちゃん、夕食の準備を終えた真菰ママ、カナエママがそう呟いた。

パパは「義父にお前たちもか」と苦笑し、真菰ママとカナエママがパパとお兄ちゃんの隣に座る。

「じゃあ話すぞ。あの戦いは——」

パパがそう言つて語り始め、私たちは耳を傾けた。

そしてその話が終わると私たちは夕食を食べ、パパとおじいちゃんから剣の指導をして貰つたんだ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
 ～夜から朝にかけて～

あの後鱗滝の家から帰ろうとしたが、夏帆と海斗は鱗滝の所に泊まることになり、私たちは明日用事があるので一足先に家に帰還した。まあ、用事が済み次第再び顔を出す予定だ。

ともあれ、楓たちは家に帰還すると、三人で風呂に入り就寝の支度を整えていたが――

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
朝になり、楓が右手で右目を擦すり目を開けると、左右から人肌の温もりを感じ取った。

楓が上体だけ上げると、ぼやけた視界のまま周囲を見回す。そこには乱雑に散らばる衣服、後片付けに使ったと思われる紙屑に、楓に寄り添うように眠るのは真菰とカナエだ。

楓は「そうか」と納得する。

「(昨日、真菰とカナエを抱いたんだっけな)」

自分が生まれたままの姿で、寒っ、と感じた楓は、すぐ様布団をかけ横になる。

抱いたのは夏帆と海斗が寝静まった時にもあるが、昨日は三人だけだったので盛り上がり過ぎた。……まあ楓の暴走もあるが。

その時、右手で右目を擦る真菰とカナエが目を開ける。

「楓、おはよう。起きたんだね」

「おはよう、楓」

楓は真菰とカナエを見てから口を開く。

「おはよう、二人とも……それと、昨日はすいませんでした」

「ふふ。体力ありすぎです、元桜柱さん」

「途中から腰砕けになっちゃったしね」

カナエと真菰の言葉を聞いて「申し訳ないです」と小さくなる楓。

そしてカナエたちは「大丈夫だよ」と笑った。

「二人は今日は蝶屋敷だっけ？」

「そうね。蝶屋敷でしのぶと薬の調合に関するとかしら」

「私は蝶屋敷で、機能回復訓練と剣術の指南についてかなあ」

カナエは調合について、真菰は隊士に指南。といった所だろうか。ちなみに楓の今日の仕事は、お偉いさんの護衛だ。

楓たちは、もう少しゆっくりしてから起きよう。ということになり、これからのことに話し合うのだった。

そしてこの一夜が、真菰とカナエのお腹に新たな命を宿すことになることを、楓たちはまだ知らないでいた。

結婚式（完結）

（蝶屋敷）

「あ、鱗滝さん！こちらです！」

蝶屋敷の門前で、炭治郎が鱗滝に「お久しぶりです！」と右手を挙げて振る。

そして、鱗滝はそれに応えるように右手を挙げた。

「式の前に、楓さんたちに挨拶しますか？」

「そうだな。式に差し支えなければな」

鱗滝が蝶屋敷に門を潜ると、屋敷の周囲ではきよたちが忙しく動き、蝶屋敷の主人であるしのぶ、居候の義勇や善逸、伊之助が式の準備を進めていた。

ちなみに伊之助なのだが、アオイに「今日だけは着て下さい！式が終わるまでいいですから！」と言われ、正装を無理矢理着せられ、伊之助は「こんなもん着るのかよ！拷問じゃねえか！」と言う一幕があつたのだが。

「楓たちは大丈夫か？緊張してないか？」

「全くしてませんでした。楓さんたちは、こういう舞台に慣れてるでしょうか？」

「そんなことはないと思うが、楓たちには支えてくれる人たちが居るからじゃないか」

そう言うってから苦笑する楓。

てか、式が終わったら真菰とカナエが楓に何か報告があるらしいのだが、何のことだろうか？

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
 ～一方女性側～

「わあ、綺麗ですね。カナエさんと真菰さんの白無垢姿」

「うん、とっても綺麗。姉さんたちをお嫁にもらった兄さんは、幸せ者だね」
 着付けを手伝っていた、禰豆子とカナヲが呟く。

でも確かに、真菰とカナエの白無垢姿は白く儂い一輪の花のようだ。

「ふふ、ありがとう。禰豆子とカナヲもすぐに袖を通すことになるわよ」

「そうそう。既成事実を作ってしまったえばすぐだよ」

まあ確かに。真菰の言う通り、付き合うまでが停滞していても既成事実を作ってしまったら、結婚まではそう遠くないだろう。……まあ、式を挙げずに結婚。という例外もあるが。

「……真菰ちゃん。二人には刺激が強過ぎる言葉、かな」

その証拠に、顔を赤く染める禰豆子とカナヲ。

「私も白無垢は重かったかも、とっても素敵な正装なんだけどね」

「そうね。でも、念願の白無垢に袖を通すことができて満足かしら」

花、蝶の柄の着物に着替え、化粧を落とした真菰とカナエがそう呟く。

ともあれ、楓が口を開く。

「ところで、何か重要な話があったんだよね？」

「うん。楓、私たち——妊娠したんだ」

「しのぶが言うには——約二週間、らしいわよ」

「……………マジか」

楓は、かなりの間を置いてから口を開くのだった。

楓が逆算をした所、久しぶりに抱いたあの日に種子を残したのだろう。

「マジだよ。私たち七人家族になるんだよ、お父さん」

「ふふ。まだ増えそうな気もするけど、気のせいかしら？」

「……………あー、どうだろうな？先のことが決まり次第じゃないか？」

でも楓たちの予想では、まだ増えそうな気もするが。

このことを鱗滝に報告した所「本当かッ！」と泣いて喜んでくれ、蝶屋敷の皆も「おめでとうございます！」と祝いの言葉を頂いた。

——まだ鬼は全て消し去っていないが、小さな幸せは確かにここにある。